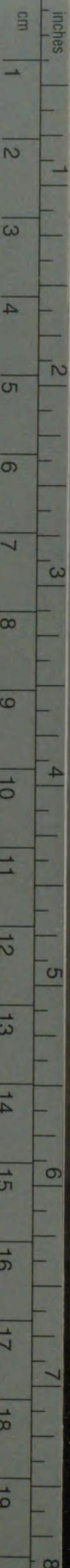


# Kodak Gray Scale



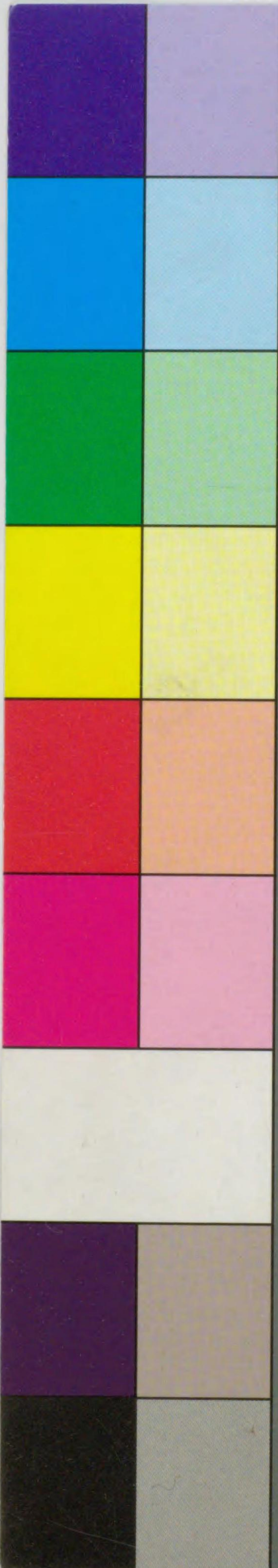
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



315  
2

315-2



\*1200701762059\*

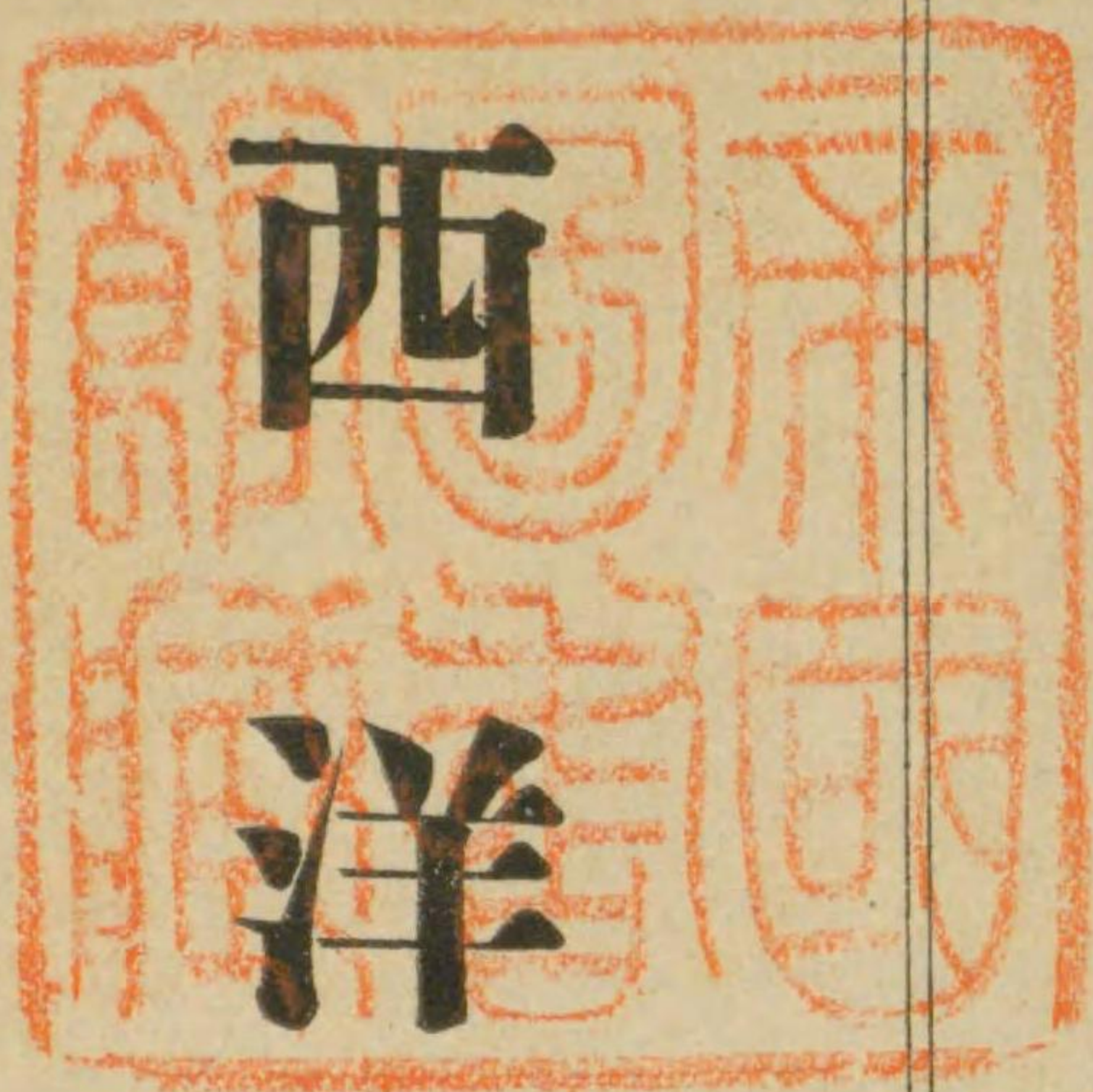
明治大學廿九年度

商科第一學年講義錄

西洋商業史

村上直次郎





東京帝國大學  
文部省  
文科大學  
學士

村上直次郎君講述

# 商業史

完



明治大學出版部發行

寄贈本



# 西洋商業史目次

## 緒論

### 第一章 古代ノ商業

にじふと

ふいにしや

かるたご

ぎりしや

るゝま

古代ニ於ケル工業ノ狀況

### 第二章 中世ノ商業

あまるふい

びざ

丁敷

一

二

二

二

五

六

八

九

一七

一九

二〇



ふろれんす	二〇
べにす	一一
ぜのあ	二五
みらん	二五
まるせいゆ	二六
ほるとー	二七
ばるせろな	二七
どいつ諸市	二八
低地諸市	三三
工業ノ状況	三四
第三章 発見時代	四一
第四章 ほるとがるノ東洋貿易	六八
第五章 いすばにやノ新発見地經營	八五

第六章 日本トいすばにやトノ貿易	一一二
第七章 おらんだノ東洋貿易	一五二
第八章 いざりすノ東洋貿易	二〇二
第九章 南北あめりかノ發展	二一八
第十章 十八九世紀歐洲貿易ノ状況	二二六

西洋商業史目次 畢

目次



西洋商業史目次

第一章 十八世紀以前歐洲貿易之概況 一〇一  
 第二章 南亞細亞之貿易 一〇二  
 第三章 東亞之貿易 一〇三  
 第四章 東洋貿易之概況 一〇四  
 第五章 日本貿易之概況 一〇五  
 第六章 日本貿易之概況 一〇六

西洋商業史

東京帝國大學  
 文科大學講師  
 村上直次郎君講述

緒論

人類ハ野蠻未開ノ時代ニ於テハ箇々獨立シテ生活ヲ計レトモ、一度其域ヲ脱シテ社會ヲ組織スルニ至レハ、各箇人漸ク其業ヲ異ニシ各部落亦外界ノ事情ニ應ジテ特殊ノ産業ヲ起シ、箇人ト箇人ト其製作品ヲ交換シ、部落ト部落トノ間ニ有無相通シテ茲ニ商業起ル、交通ノ便開タルニ從ツテ貿易ノ區域彌々廣カリ、之ト同時ニ彼此思想ノ交換モ亦行ハレ、之ニヨツテ文明益々進歩ス、故ニ商業史ハ實ニ文化ノ歴史ニシテ、ソノ説ク所ハ古今ニ通シ、東西ニ亘ルト雖モ、茲ニハ我邦ニ關スル所少キ歐洲古代ノ商業ハ極メテ畧叙シ、近世史ノ初期歐洲諸國カ遠ニ活動ヲ増シ、東西洋ノ新地ヲ探檢シ、之ト通商シ此處ニ移民ヲ派シ、終ニ我邦ト交



通スルニ至レル頃ヨリ、現今萬國商業ノ隆盛ナル時代ニ至ルマテノ歴史ヲ詳説スヘシ。

## 第一章 古代ノ商業

エジプト Egypt

エジプトハ古代ニ於テ最モ早ク開ケタル地方ノ一ニシテ基督紀元前二千五百年以後一二世紀間ハ世界第一ノ開明國ナリシカハ商業ニ於テハ自ラ進ンテ計營スル所多カラサリシモ農工業發達セルカ故ニ他國ヨリ此地ニ向ツテ貿易ヲ營ムモノ多クあらびや (Arabia) ノ商人ハ隊ヲ組ミテ砂漠ヲ越エ香料沒藥奴隸ヲ輸入シエジプトノ麻布綿布武器家具陶器玻璃器等ノ製造品あふりか東岸ノ黃金象牙等ト交換シしりや (Syria) くぶる島 (Cyprus) ヨリハ海路木材銅鐵葡萄酒等ヲ輸入セリ

西海商業 ぶにしや Phoenicia

古代ニ於テ商業國トシテ最モ知ラレタルハふいにしやナリ、ふいにしやハしりやノ西ニ當レル南北百五十哩東西五哩乃至十四哩ノ狹隘ナル地ナルカ、ればのん山 (Mt. Lebanon) ヲ負ヒ、地中海ニ臨ミ、其位置良好ナルカ爲メ、國人早クヨリ航海ノ術ニ長シ、其船ハ小あじや (Asia Minor) ざりしや (Greece) 及ヒ黒海ノ沿岸ハ勿論遠クしりや (Sicily) スすばにや (Spain) 及ヒあふりかノ北岸ニ至リ、更ニじぶらるたる海峡 (Gibraltar) 當時 Columns of Hercules へらくれすノ柱ト稱セリヲ過キテ英國ノ南部ニ航シ、尙進ンテ北海ノ岸ニ達シ、到ル處ノ各地ト貿易ヲ營ミ、又くぶろどす (Rhodes) くれて (Crete) 並ニ附近諸島まるた (Malta) しりや、さるぢにや (Sardinia) あふりか北岸、いすばにや南部等ニ殖民地ヲ設ケタリ、此中いすばにやノかぢす (Cadiz) ハ基督紀元前千百年頃ニ建設セラレ、今日ニ至ルマテ尙ホ存セリ、ふいにしやノ隊商 (Caravan) ハ又陸路ばびろにや (Babylonia) へるしや (Persia) さんど (India) ニ至リ、或ハるじぶとヨリあらびやヲ經テいんどす (Indus) ノ河邊(當時 Ophir 〔あふいる〕ト稱セリ)ニ出テ、其國產ト東方諸邦ノ產物トヲ交換シ、更ニ之ヲ前ニ舉ケタル西方各地ニ輸入シテ其產ト換へ、ふいにしやノつろ (Tyre) しどん



(Sidon)ノ市ハ爲メニ當時最モ繁盛ナル商業ノ中心トナレリ  
 ふいにしやノ輸出品ハ金、銀、寶石細工、ガラス器、陶器及ヒ染メタル麻布、綿布ナリ  
 キ、染色ハふいにしや近海及ヒ地中海ノ處々ニ産スル數種ノ貝ノ汁ヲ精製シテ  
 得タルモノニシテ、淡紅ヨリ眞黒ニ至ル五十三種アリ、就中紫ハ王者ノ色トシテ  
 此色ニ染メタル服ハ最モ珍重セラレタリ、  
 ふいにしやニハ右ニ舉クルカ如キ特産アリシカ、其貿易ハ重ニ媒介的ニシテ、近  
 クハしりや、ぱれすちな (Palestine)ノ農業及ヒ牧畜ノ産物、地中海沿岸及ヒ諸島ノ  
 穀類、果物、魚類、革皮、木綿、寶石、金、銀、銅、錫、鉛ヨリ、遠ク東邦ノ綿布、絹布、象牙細工、寶石、  
 香料、あらびやノ香料、薑物、黒檀、あふりかノ黄金、多じふとノ麻布、綿布、穀類、南部イ  
 すばにやノ銀、錫、鉛、鐵、穀類、葡萄酒、臘、羊毛、英國ノ錫、北海ノ羊毛、革皮、獸皮、魚類、木材、  
 銅、琥珀ニ至ルマテ、皆ふいにしや商人ノ手ヲ經テ各處ニ輸出セラレタリ、  
 ふいにしやカ商業國トシテ最モ繁盛ヲ極メタリシハ基督紀元前千三百年ヨリ  
 同八百五十年頃マテニシテ、其間しどん先ツ繁華ヲ極メ千百年頃ヨリつろ市之  
 ニ代ハリシカ同市ニ黨派ノ争起リ、有力ナル人士ハ是ヨリ先キ同市ヨリ殖民セ

ルあふりかノかるたご (Carthage)ニ移住シタルヨリ、漸ク衰運ニ向ヒ、あつしりや  
 (Assyria)ばびろにや (Babylonia)多じふと、べるしや等ノ諸強國相繼イテ此國ニ君  
 臨スルニ至ツテ彌々衰へ、基督紀元前三百三十三年あれささんでる大王つろヲ  
 攻取シ、翌三百三十二年ないる (Nile)ノ河口ニあれささんどりや (Alexandria)市ヲ  
 建設スルニ及ンテ、ふいにしやハ全ク昔日ノ繁華ノ状態ニ復スル能ハサルニ至  
 レリ、

### かるたご Carthage

かるたごハ基督紀元前八百五十年頃ニ創設セラレタルふいにしやノ殖民地ナ  
 ルカ、母國ノ政争ヲ厭ヒテ此地ニ移ルモノ多ク又其ノ外國ノ治下ニ歸スルニ及  
 ンテ、難ヲ避ケテ此處ニ來ルモノ彌々多キヲ加へ之ニ連レテ國力益々増進シ、あ  
 ふりかノ西北岸、ぱれあれす諸島 (Balearic Ids.)しりや等ヲ征服シ、地中海西部  
 ノ航海權ヲ獨占シ、母國ニ代ツテいすばにや殖民地ノ利ヲ收メ、其東岸ニハ新ニ  
 新かるたご今かるたへな [Carthago]ト稱ス、其他數箇處ノ殖民地ヲ開キ、北方ノ航



海ヲ繼承シ、あふりかノ西岸ヲ下ツテしえられぬ(Dierra Leone)ニ至リ、又陸路北あふりか、えじふトヲ經テ紅海ニ隊商ヲ派シ、在來ノえうろつば、あじやノ貨物ノ外、盛ニあふりか内部ノ黄金、象牙、黒檀、駝鳥羽等ヲ輸出シ、其貿易ノ盛ニシテ國ノ富強ナルコト昔日ノふいにしやニ劣ラサリキ、  
 かるたごハ此ノ如ク一時強盛ヲ極メシカ、屢々しりやト戰ヒテ大ニ其力ヲ減シ、基督紀元前二百六十四年以來三度ろうまト戰ヒ、第三びゆにく戰爭ノ末、百四十六年ニ至リ、ろうま軍長期ノ攻圍ノ後かるたごヲ陷レ、六日間ノ市街戰十七日間ノ火災ニヨリ市ハ全滅シ、市民ノ生存セルモノハ皆奴隸トシテ賣ラレ、かるたごノ領土ハ悉クろうまノ治下ニ歸セリ、

### ざりしや

Greece

ざりしやハ其海岸ニ港灣多ク船舶ノ出入ニ便ナリシ爲メ、同國人ハ早クヨリ海運ニ從事シ、小あじや、黒海、いたりや及ヒあふりかノ沿岸ヲ航海シ、各處ニ殖民地ヲ設ケ、盛ニ貿易ヲ營メリ、其殖民地中小あじやノみれとす(Miletus)ハ羅紗及ヒ絨

氈ヲ製造シテ之ヲ黒海地方ニ送り、其地ノ殖民カ内地ヨリ輸出セル革皮、羊毛及ヒ奴隸ト交換シ、ぼすふちらす(Bosphorus)岸ノかるせとん(Chalcedon)及ヒびざんちうむ(Byzantium)ヨリハ穀類、魚類、材木、鹽、蜜、臘、草、羊毛等小あじや及ヒ黒海ノ産物ヲ輸出シ、南部いたりや一帶ノ殖民地ニシテ所謂大ざりしや(Magna Graecia)ト稱セル地方ニテハ穀類、果物、葡萄酒、油、牛馬等トざりしやノ陶器、鐵器、衣服等ヲ交換セリ、而シテざりしや商人カあふりかヨリ得タルハ馬、羊、香料、穀物、油、椰子實、寶石等ナリキ、

ざりしやノ諸市中商業最モ盛ナリシハこりんと(Corinth)ニシテ同名ノ地峽ニアリ、船ヲ陸送シテ對岸ニ達セシムルコトモ亦難カラサリシカハ、船舶ノ出入スルモノ多クシテ、各地ノ貨物此所ニ集リ、土産ノ織物、染物及ヒ金屬製ノ器物ト共ニ再ヒ他ニ輸出セラレタリ、あてん(Athens)ハ銅、青銅製ノ器物、工具、陶器及ヒ美術工藝品ノ製造ヲ以テ名アリ、亦盛ナル貿易市場タリキ、

ざりしやノ商業ハ國ト盛衰ヲ同クシ、基督紀元前三百三十八年けろにや(Cleopatra)ノ大戦ニ敗レテませどにや(Macedonia)ニ服従スルニ至ツテ漸ク衰へ、次イ



テあれきさんでる大王東征ノ結果あれきさんどりやカ世界ノ貿易市場トナルニ及ンテ全ク衰微シ其商賈モ多クハあれきさんどりや其他まじぶとノ諸市ニ移住シ其繁榮ヲ助クルニ至レリ、

### ローマ Rome

ローマハ始メいたりやノ一市トシテ起リ、漸次全半島ヲ平定シ、終ニ全歐及ヒ兩亞ヲ統治スルニ至リシカ、其長スル所ハ兵事及ヒ政治ニシテ、商業上貢献スル所多カラズ、其輸出品ハ葡萄酒、硫黄、蜜等數種ニ過キス、只帝國ノ盛時ニハローマ一市ノ人口百六七十萬ニ達シ、其消費品ノ供給ヲ各地ニ仰キ、間接ニ商工業ヲ獎勵シタルト、軍政ノ必要上ローマノ市場(Forum)ニアル黄金ノ里程標ヲ起點トシ、帝國內各所ニ至ル公道ヲ設ケ、驛傳ヲ備ヘ、爲メニ運輸通信ノ便ヲ大ニシ帝國統一ノ下ニ各國永ク平和ヲ樂ミ、商業隨ツテ發達シタルハ全クローマ帝國ノ賜ナリ、

### 古代ニ於ケル工業ノ狀況

毛織物ノ産出ハ牧羊ト相伴フモノナレハ古代ヨリ諸邦ニ盛ニシテ、就中製品ノ精巧ナルヲ以テ最モ名アリシハバビロン(Babylon)せるう(Seleucia)しどん、みれとす、さもす(Samos)こりんと、かるたご、いたりやノたれんと(Tarentum)いすばにやノかるたへな、たらごな(Tarragona)等ナリ、羊毛ハ初メみれとす産ヲ最良トシ南いたりや、黒海北岸、まじぶと、しりや、南ふらんす、北あふりか等ノ産之ニ次キシカ後ニハいすばにや産優等ノ位置ヲ占ムルニ至レリ

麻織物 麻ハまじぶと及ヒ西部あじやノ天産ニシテバビロンにや、しりや、小あじや及ヒまじりしやニ於テハ、婦人ハ肌着トシテ麻布ヲ用ヒタレハ、其製造ハ早クヨリ此地方ニ發達シ、殊ニまじぶとニ於テハ最モ盛ナリキ、基督紀元ノ初メニ至リテいたりや、がりや(Gaul)いすばにやニ於テモ亦此製造興リ、いすばにやノかるたへな、たらごな産最モ珍重セラレタリ、



木綿織物 ハふいにしやノ商人カイインドヨリ輸入シタル貨物中最モ古キモノ、一ニシテ、ばびろん、ゑじぶと等ニ於テ輸入ノ棉花ヨリ製造シタルモノト共ニ歐洲諸市場ニ出テタリ、あれきさんてゐる大王時代ニハふいにしや人へるしや灣内ノ島及ヒあらびやノ南岸ニ移住シテ木綿ノ栽培ニ從事シ、まるた、べろばねそす(Peloponnesus)等ニ於テモ前後シテ之ヲ移植セリ、基督紀元三百年頃ニ歐洲ノ市場ニ現ハレタル木綿織物ハインドノ精巧ナル品ノ外あれきさんどりや、まるた、せるうきや、めそぼたみや(Mesopotamia)地方ノ諸工業市ノ産ナリキ、

絹織物 養蠶ハ支那、いんどニ始リ永ク該地方ノ專業ナリシカ、絹織物ハ支那ヨリハめそぼたみやヲ經、いんどヨリハ或ハばびろんヲ經由シ或ハそことら(Doo-Fra)ゑじぶとヲ過キテ小あじやニ輸入セラレ、へろどとす(Herodotus)時代ニモ絹布ハ最モ高價ナル被服ノ料トシテ王侯富豪ノ間ニ用ヒラレタル由其著ニ見エタ

リ、基督紀元前三百五十年頃ニハ生糸ヲいんどヨリ輸入シばびろんニ於テ之ヲ織リ次イテ小あじや及ヒ其沿岸ノ諸島ニ於テモ絹織物ヲ製造スルニ至レリ、羅馬帝國時代ニハ支那ヨリモ生糸ヲ取り寄セ又百六十六年まるこ、あうれりち(Marcus Aurelius)ノ代ニ海路東京ヲ經廣東ニ特使ヲ派シテ輸入ノ便ヲ計リタルコトアリ、然レトモ古代ニ於テハ蠶兒ハ終ニ歐洲ニ輸入セラル、ニ至ラサリキ、染料 さんどニ於テハ太古ヨリ染料トシテ藍、檀香水(Sandal-wood)らぐくたス(La-ak-dye)ヲ用ヒ、地中海地方ニ於テハ茜草、染草、梔子花、ろどす及ヒしりや産ノサフラン、いすばにやノあるまでん(Arnaden)産ノ朱砂、ちくる(Ochre)ろどすノ白鉛、綠青めろす島(Melos)ノ白堊、しりや紅、あるめにや(Armenia)藍又黒色ニハ葡萄ノ皮、葡萄渣滓、アンチモニ等ヲ用ヒタリ、ふいにしや人カ紫染ニ貝ノ汁ヲ應用シタルコトハ既ニ述ヘタルカ染料トシテ品質最良ナルハつる、べろばねそす東南岸、あふりか西北岸及ヒ南いたりや沿海ニ産スル貝ヨリ取りタルモノナリキ、染メタル色ヲ留ムルニハ古代ニ於テハ専ラ明礬ヲ用ヒタレハ、明礬ハゑじぶと



めろす、ませどにや(Macedonia)あるめにや、北あふりか等ニ於テハ重ナル輸出品ノ一ナリキ、硫黄ハ羊毛ヲ晒スノ料ナリシカめろす島すとろんぼり島(Stromboli)産第一トセラレタリ

製紙 古代ニ於テ文字ヲ認ムルニ用ヒタルハ布、木、象牙、大理石板、青銅板、鉛板等ニシテ、後ニハ木又ハ象牙ノ板ニ蠟ヲ流シタルモノ廣ク行ハレ、文字ヲ之ニ書スルニハ鉄筆ヲ用ヒタリ、此筆ヲすたいる(Stylus)ト稱ヘタルカ後ニハ文態、容態等ノ意ニ轉化セリ、ゑじぶトニ於テばびるす(Papyrus)ト稱スルないる河畔ニ産スル草ノ織緯ヲ以テ紙ヲ製スルニ至リテ各地ニ於テ之ヲ用ヒ、あれきさんどりやハ數百年間盛ニ之ヲ輸出セリ、英語ニペーパー(Paper)ト云フモ實ニ此語ヲ採リ用ヒタルナリ、ゑじぶト國王ばびるす紙ノ輸出ヲ禁止スルニ及ヒ小あじやノべるがもん(Pergamon)ニ於テ獸皮ヲ以テ紙ニ代用スヘキモノヲ製造スルコトヲ試ミ成功スルニ及ンテ廣ク歐洲諸國ニ行ハレタリ、獸皮ノ中ニハ羊皮ヲ以テ此品ヲ作ルヲ最良品トナセリ、どいつ語ニテ之ヲペるがめんと(Pergament)英語 Parchmentト云フハ初生産地ノ名ヲ存セルナリ、いんどニ於テハ椰子ノ葉ヲ用ヒ今日ニ及ヘリ、

ガラス製造 ハ太古ヨリゑじぶトニ於テ行ハレ、ふいにしや人ハ之ヲ同國ニ學ヒタルカ如シト雖モ、ふいにしや沿岸ニ純良ナル石英砂アルカ爲メ製造業大ニ發達シガラスハ同國産中重要ナル位置ヲ占ムルニ至レリ、あれきさんどりや繁榮ノ時代ニ及ヒ同所ノガラス製造亦甚盛大トナレリ、然レトモ古代ニ於テハ、ガラスノ價不廉ナリシカ故ニ重ニ裝飾品トシテ用ヒ之ヲ以テ瓶盃等ノ日用器具ヲ製シタルハ遙ニ後世ノコトナリ、

陶器金屬器 ノ製造ハ早クヨリ東方各地ニ於テ殆ント完全ノ域ニ達セリ、ざりしやニ於テハこりんとハ陶器製造ノ率先地ニシテてろす(Delos)おもす、ちよす(Chios)あてん等之ニ次ケリ、其後奢侈ノ度ヲ加フルニ從ヒ錫、銀、われくとろん(Elektro)金銀ノ混合物(こりんと金屬)金銀銅ノ混合物(黃金、寶石等)ヲ以テ器具ヲ製ス



ルニ至リ、寶石、象牙、琥珀、木材等ノ彫刻及ヒ象眼亦行ハレタリ、ろーま帝國時代ニハ富豪驕奢ヲ極メ貴金屬寶石ノ器具裝飾品ハ非常ナル高價ヲ以テ購ヒタレハ彌々此技術ノ進歩ヲ促セリ、穀類 大麥小麥ハ昔ヨリ食料トシテ用ヒラレ隨ツテ多ク穀類ヲ産スル地方ヨリ需用者多クシテ産額少キ地ヘ輸入ヲナスニ至レリ、あてんノ如キハ最モ繁昌ノ時ニ當リテハ年々五千萬リトシテ黒海沿岸、多ジぶと、しりや、しりや等ヨリ輸入シ、ろーま帝國ノ盛時ニハ帝都ノ民ヲ養フ爲メしりや、北あふりか、多ジぶとヨリ小麥ヲ輸入セル運送船ノ數ハ非常ニ多カリシト云フ、大麥ハあれささんでりや及ヒ南ふらんす地方ニ於テハビール様ノ飲料ノ製造ニ用ヒラレ爲メニ他ニ輸入ヲ仰キタリ、

熱帶地方ノ産物 ノ中ニモ果樹、橄欖、葡萄等ハふいにしや人、ざりしや人等漸次其植民地ニ移植シタレハ常ニ熱帶地方ヨリ輸入セラレタルハ薰物及ヒ香料ナリキ、薰物ハ宗教上ノ禮拜及ヒ供物ヲナスニ用ヒラレ、又ざりしや、ろーまノ人ハ未タ石鹼ヲ知ラサリシカハ皮膚ノ惡臭ヲ消ス爲メニ薰物ヲ要セルハ今日ノ比ニアラサリキ、サレハ乳香、沒藥、檀香末、檀香油、甘松香、さふらん(Saffron)等頻リニ輸入セラレ、こりんと、かぶわ(Capua)、なぼり(Naples)等ニ於テハ盛ニ香膏、香水ヲ製造セリ、肉桂、胡椒、薑等ノ藥味又いんどヨリ輸入セラレタリ、砂糖ハ當時藥品トシテ用ヒタルノミナレハ輸入額極メテ少ク、飲食物ニ甘味ヲ與フルニハ重ニ蜜ヲ使用セリ、

通貨 未タ貨幣ノ鑄造セラレサルニ當リテえじぶと及ヒあじや西部ニ於テハ金屬塊及ヒ延へ板ヲ用ヒ賣買ノ際ニハ之ヲ量リ價ニ應シテ多少ヲ與ヘタリ、貨幣ノ鑄造行ハル、ニ及ヒばびろんノ貨幣制度ハ西あじやヨリ歐洲地方ニ採用セラレタリ、金貨ハリぢや(Lydia)ニ於テ始メテ行ハレ、べるしや王だりうす(Darius B. C. 336-330)ハ其像ヲ印シタル金貨ヲ鑄造セシメタリ、ろーまニテハモト銅貨ノミ行ハレシカ基督紀元前二百六十九年ニ至リテ始メテ銀貨ヲ造リ、其後五十



餘年ニシテ金貨ヲ鑄造セリ、當時金銀價格ノ差ハぎりしや、ろイマ時代ヲ通シテ一ニ對スル十ナリシカ後ニハ一ニ對スル十二三乃至十四五トナレリ、ぎりしやニ於テ商業漸ク盛ニナリ貨幣ノ用増加シ其種類亦多クナルニ從ツテ金銀ノ取扱ヲ專業トスルモノ出テ、初メハ只兩替業ヲ營ムニ過キサリシカ、漸ク利息ヲ收メテ金銀ヲ貸與シ、終ニ現金有價證券等ヲ保管シ小切手ノ如キモノヲ取扱ヒ、全ク今日ノ銀行ノ業務ヲ執ルニ至レリ、而シテ當時ノ利廻リハ最モ確實ナルモノ一割二分乃至一割八分ニシテ、商業ノ資本ニ對シテハ二割乃至三割ヲ徵シ最モ高キハ三割六分ニ達セリト云フ、

ろイマニ於テモ亦あるげんたりうす (Argentarius) ナルモノアリ富豪ノ金銀ヲ預リ其發スル小切手ニ對シテ現金ヲ支拂ヒ預リ金ヲ貸附ケテ利ヲ收ムル等銀行ノ業務ヲ行ヘリ、此ノ如キ銀行家ハ漸次團體ヲ作りろイマ政府ヨリ各種ノ請負ヲナシ又諸方ノ占領地ニ到リ其地ノ金銀ノ取扱及ヒ諸請負ヲ一手ニ收メ大ナル利益ヲ得タリ、利子ノ割合ハ通常一割二分ナリシカ甚シキハ五割六割ニ達セリト云フ、

關稅、ぎりしやノ諸州ハ何レモ輸出入品ニ二分ノ稅ヲ課シろイマニ於テハ稅率ハ通常輸入品ハ二分五厘ニシテ、奢侈品ハ一割二分乃至一割六分、輸出品ハ皆二分五厘ナリシト云フ、

## 第二章 中世ノ商業

基督紀元三百七十五年はん種族 (Huns) ぼるが河 (Volga) ヲ涉リテえうろつばニ侵入スルヤあらに (Alani) ちすところとす (Ostrogoths) びしごず (Visigoths) ばんだる (Vandals) すすび (Suevi) 等ノどいつ民族之ニ逐ハレテ漸次西南歐ニ移リ、ろイマ帝國內ハ爲メニ大混亂ノ狀ニ陥リタリ、民族大移轉ハ四百年ノ長期ニ亘リ、其間古代ノ文化ハこんすたんちのーぶる (Constantinople) ニ都ヲ置ケル東ろイマ帝國内ニ僅ニ其跡ヲ留メ、他ハ全ク蠻族ノ蹂躪スル所トナリ、四民其業ニ安セス、豐沃ナル地モ荒野トナリ工業衰頽シ商業モ亦交通不便ナルト、到ル所盜賊出沒シ、諸方割據ノ豪族又橋梁公道市場ニ重稅ヲ課シ、商人ヲ苦シメタレハ全ク廢レタリ、



歐洲ノ産業ノ不振スノ如クナリシニ又蠻族ノ需ムル所ハ單ニ日用品ニ過キサ  
 リシカハ、遠ク外國ヨリ奢侈品ノ輸入ヲ仰クノ要ナク、輸出スヘキ貨物亦乏シカ  
 リシカ故ニ外國貿易モ亦大ニ衰ヘタリ、  
 じやーれまん帝 (Charlemagne 768-814) 天下ヲ一統スルニ及ヒテ、道路ヲ通シ運河  
 ヲ開キ橋梁ヲ修メ、大ニ農工業ヲ奨励シタルハ、商業モ從ツテ繁昌ノ域ニ向ヒ、外  
 國貿易モ亦皇帝ノ盡力ニヨリ舊態ニ復スルニ至レリ、  
 しやーれまん帝死スルニ及ヒテ、一時平靜ニ歸シタル歐洲諸邦ハ再ヒ亂レシカ  
 此間ニ封建制度發達シ、各地方ニ有力ナル諸侯起リ、商工ノ保護ヲ求ムルモノ其  
 城下ニ來リ、安ソシテ其業ニ從ヒ、諸侯亦領國ノ發達ヲ計リ之ヲ奨励セルカ故ニ  
 集ルモノ漸ク多ク終ニ都會ヲナスニ至レリ而シテ此ノ如キ都會ノ繁昌スルニ  
 從ヒ、商工業者ノ勢力次第ニ増加シ、領主ハ戰時其他必要ノ場合ニ屢々金錢上ノ  
 助力ヲ之ニ受クルコトアリ、其報酬トシテ諸種ノ特權ヲ附與シ、終ニ全ク諸侯ノ  
 支配ヲ受ケサル獨立市起リ、此種ノ諸市又相互ノ利益ノ爲メニ同盟シ或ハ傭兵  
 ヲ置イテ自衛ニ備ヘ、或ハ戰艦ヲ造リテ海上貿易ヲ保護シ、大ニ商業ノ發達ヲ便

ナラシメタリ、市ノ發達ハ中世ニ於テ最モ著ルシキ事實ニシテ、其ノ最モ盛ナリ  
 シハいたりや及ヒどいつナリキ、  
 いたりや諸市ノ繁昌ハ東方貿易ノ爲メニシテ、其勢力加ハルニ從ヒ、第十世紀ノ  
 末ヨリ獨立ヲ計リ、第十一世紀ニ至リテ其目的ヲ達シテ共和政府ヲ組織シ、爾來  
 三四百年間北いたりやハ全ク諸市ノ分領スル所トナレリ、

あまると Amalfi

いたりやノ諸市中第一ニ發達シタルハされるの灣 (Salerno) 頭ニアルあまると  
 いニシテ其地味ノ豊沃ナルカ爲メ第九世紀以來重要ナル商業市トナリ、第十一  
 世紀ニ於テ其繁昌ノ極ニ達シ、南いたりや、ばれも (Palermo) ニ其商館ヲ置キ其船ハ  
 えじぶと、しりや、ざりしやノ諸港ニ到リ、地中海上商船航海ノ法規モ其法律家ノ  
 定メタル所 (Tabula Amalfitana) ニヨレリト云フ、基督紀元千二百年頃ニ至リびざ、  
 のあべにす諸市ノ競争ノ爲メあまるとふいハ衰ヘ、其商業ハいたりあ西岸ノ沿岸  
 貿易ニ限ラル、ニ至レリ、



ピサ Pisa

びざハモトさるぢにや (Sardinia) ノ植民地ニシテ、十字軍ニ参加シテ富強ノ基ヲ据エ東方諸邦、あふりか、いすばにや等ト通商シ彌々盛大ニ赴キシカ、ぜのあノ興隆スルニ及シテ屢々之ト衝突シ、千二百八十四年海戦ニ大敗シタルヨリ次第ニ衰へ終ニふるれんすノ配下ニ歸スルニ至レリ、

ふろれんす Florence

ふろれんすノ富ハ前二市ト異リ、工業ニヨリテ得タルモノニシテ、第十三世紀ノ中頃ヨリ附近ノ諸市ヲ征服シ、第十五世紀ニ至リめぢち家 (Medici) 主權ヲ握ルニ及ヒテ其隆盛ノ極ニ達シタリ、めぢちノ家ハ商ヲ以テ起リ銀行家トシテ彌々富ヲ増シこすも (Cosmo) ノ代ヨリ漸ク市政ヲ左右シ、其子ろれんぶ (Lorenzo) ニ至リテふろれんす共和政府ノ主位ヲ占メ其家ヨリれお十世 (Leo X) くれめんと七世 (Clement VII) ノ二法王ヲ出シテ更ニ權勢ヲ添へ、終ニどいつの皇帝ちやゝれす五

世 (Charles V) ト同盟シテふるれんすノ主權ヲ奪ヒ、千五百六十六年こすもハとすかな大侯 (Grand Duke of Tuscany) ノ稱ヲ法王ヨリ許サレタリ、

ふるれんすノ工業ノ主要ナルハ織物ニシテ精巧ナル羊毛織物、絹布、金襴ハ歐洲各地ニ輸出セラレ、金銀寶石細工亦甚タ賞美セラレタリ、ふるれんすハ又銀行業ヲ以テ知ラレ其銀行家ハ一時歐洲ノ財政界ヲ支配シ、多額ノ貸借ハ必ス其手ヲ經ルノ有様ナリキ、而シテ其取引額モ頗ル多ク、英國王エどわると三世 (Edward III) ハばるぢ家 (Bardi) ヨリ九十萬ふるりん (Florin) 金貨一ふるりんハ時價換算凡五圓) べるつぢ家 (Peruzzi) ヨリ六十萬ふるりんヲ借用シ、しゝりヤ王ハ同時ニばるぢ家ニ十萬ふるりん、べるつぢ家ニ四十五萬ふるりんノ負債ヲ有シタリト云フ以テ當時ノ富豪ノ資産多カリシヲ推知スヘシ

べんす Venice

べにすハ海中ニアリ、市内ノ交通一ニ水路ニヨリ、他所ニ於テ馬車電車ヲ用フル場合ニハ gondolae ト稱スル此地特有ノ小舟ト小蒸汽船ヲ用ヒ、一種異



様ノ觀アリ、此市ノ起原ハモトあちら(Atilia)カはん種族ヲ率キテいたりやニ侵入シタルトキ、沿岸ノ住民難ヲ島中ニ避ケタルニアリ、其附近ハ漁業製鹽ニ便ニシテ、當時歐洲諸邦ニ於テ鹽坑未タ知ラレス、鹽ノ産額甚タ少カリシニ冬季ノ用ニ充ツル爲メ魚獸肉ヲ保存スルニ付鹽ノ用途頗ル多カリシト、又基督教徒カ金曜日ニ精進ヲ行ヒ、肉ヲ斷チ魚ヲ用ヒタルカ爲メ、魚類ノ需用モ亦甚タ大ナリシトニヨリ、漸次富強ヲ加ヘ此所ニ集ルモノモ亦其數ヲ増セリ、基督紀元六百九十七年ベにすハ憲法ヲ制定シドージェ(Doge)ヲ戴キタル共和國トナレリ、國運隆盛ニ赴クニ從ツテ商業モ亦發達シ、其船ハいたりやノ東岸ヲ航シ、又ぎりしや、しりや、えじぶと地方ニ至リ、ベにすハ漸次東方貿易ノ要港トナレリ、海外貿易漸ク盛ナルニ從ヒ船舶ノ數増加シ、第十四世紀ニハ商船ノ數三千ニ達シ之ヲ保護スル爲メ戰艦四十余隻アリ、商船ハ年々隊ヲ組ンテ出帆シ、戰艦ハ護衛ノ爲メ之ニ伴ヘリ、商船隊ノ重ナルハいすばにや、ぼるとがる、西部ふらんす、いぎりす、ふらんてる(Flanders)地方ニ通商スルふらんてる艦隊、あるめにや艦隊(Armenia)たな(Tana)あぞふ(Azof)くりみや(Orimeal)等ヲ巡歴スル黒海艦隊、あれささんどりや、かろ(Cairo)

ニ至ルえじぶと艦隊ナリキ、十字軍の時ベにすハ運送船ヲ供給シテ許多ノ益ヲ收メ、千二百四年第四十字軍ノ首領等ヲシテこんすたんちのーぶるヲ攻メシメテヨリ、ぎりしや近海、地中海西部及ヒ黒海地方ノ商權ヲ專ラニセリ、千四百十年蒙古人たなヲ占領スルニ及ンテ黒海ヨリ退去シあれつぼ(Aleppo)ヨリ東邦ノ貨物ヲ得、又あれささんどりやニ於テいんど、あらびや等ノ産物ヲ得タリ、あふりか北岸ニハ諸所ニベにす商人ノ出張所アリ、隊商ヨリ内地ノ象牙、砂金、羊毛、椰子實、穀類、奴隸等ノ供給ヲ受ケタリ、ベにすハ右ノ如クあじや、あふりかノ生産品ヲ取次キタル外又自家ノ製造品ヲ輸出セリ、製造品ノ重ナルハ絹織物ニシテ生糸ハぎりしや及ヒ附近諸島ヨリ輸入セリ、ベにすニハ又硝子ノ原料ニ適シタル砂アリテ、該製造業早クヨリ發達シ、ベにすノ硝子器ハ中世時代ニ於テハ最モ珍重セラレタリ、往時我邦ニ到來シタルぎやまん硝子器等モベにす産ノモノ多カリキ、此外毛織物、絹布、紙、革等ヲ製造シ又銅鐵ノ鑄造所アリ、ベにすノ武器ハ當時歐洲ニ於テ嘆賞セラレタリ、ベにすハ右ニ述フルカ如ク工業商業共ニ甚タ盛ナリシカハ人口二十萬ニ上リ、



四千乃至七萬ぢゆかつと(Ducat)一ぢゆかつとハ凡金五圓ニ當ルノ收入ヲ有スル貴族千餘人ニ達シタリト云フ、而シテふろれんすと同シク銀行家亦多ク、ベに銀行ハ八百七十一年ニ設立セラレ、大運河ニ架セラレタルりあると(Rialto)橋畔ノ取引所ハ歐洲各國ノ商人ノ集合スル所ニシテ、此等外來ノ客多數ナル爲メベにすニ於テハ早ク客館起リ、千三百十九年むーん(The Moon)千三百二十四年ほわいとらゐん(The White Lion)設立セラレタリ、

基督紀元第十四世紀ニ至リテベにすハぜのあと戰ツテ敗レ、爾來漸ク衰へ、第十六世紀ノ初メ法王、どいつ皇帝、ふらんす王、いすばにや王トかんぶれー同盟(The-ague of Cambray)ヲ結ヒテ之ニ當ルニ及ヒ、千五百九年あゝぐなゝてゐる(Aignadel)ニ於テ大ニ敗レ復昔日ノ盛況ヲ見ル能ハサリキ、然レトモ尙ホ永ク歐洲ニ於テ有力ナル地位ヲ占メシカとるこ人えじぶとヲ征服シいんど新航路亦發見セラレ東洋貿易ノ通路一新シばるとがる人之ヲ專ラニスルニ至リテベにすハ終ニ衰狀ニ陥リ再ヒ回復スル能ハサリキ、

ぜのあ Genoa

ぜのあハろーま時代ヨリ材木、陶器、羊毛、蜜等ヲ輸出シテ繁昌シ十字軍ノ時運送船ヲ供給シテ之ヲ助ケタルカタメ、しりや沿岸貿易ノ特權ヲ得、東方ノ貨物輸入ニ從事シテ更ニ其繁榮ヲ増シ、其船舶ハざりしや、小あじや、しゝりや、北あふりか、ふらんす南岸、ふらんてる、どいつ地方ニ航海シ、東邦ノ貨物ヲ以テ各地ノ産ト交換セリ、いたりや諸市トノ競争ニ於テハ一勝一敗アリ一時ハ其勢張り地中海航行ノ權ヲ獨占セントスルニ至リシカ、内部ノ不和ノ爲メ國政亂レ、みらん、ふらんす等ノ強隣相繼イテ之ニ君臨シ、とるこ人ノ勢力漸ク強盛ナルニ及ヒ東邦トノ貿易ノ路ヲ斷タレ商業モ大ニ衰ヘタリ、

みらん Milan

みらんハぼー河(Po)流域ノ豊沃ナル地ニ在リ、古來農業盛ニシテ工業モ亦大ニ發達セシカ、はん種族侵入ノ際城壁ヲ築イテ之ニ備へ、爾來獨立ノ市トナリ、四方



ノ領主ノ壓抑ニ堪ヘサルモノ皆逃レテ、此所ニ集リシカハ、みらんノ人口彌々増加シ第十二世紀ニハ城廓ヲ擴張スルニ至レリ、みらんハ生糸ヲ産シ、其絹織物及兵器ヲ以テ知ラレタリ、同市政ハ始メ共和政體ナリシカ第十四世紀以來びすこんち(Visconti)すふあるぶ(Sforza)等代ハル々々政權ヲ握リ第十六世紀ニ至リテいすばにや領トナリ次イテおーすとおりやニ屬セリ、

まるせいゆ Marseilles

まるせいゆハふらんすノ地中海岸ノ重要ナル港ナリ、モトざりしやノ植民地ニシテ古代ニ於テモ盛ナル貿易市場タリ、どいつ民族大移轉ノ際一時衰微シタルカ秩序回復スルニ及ヒ、いたりや諸市ト同時ニ再ヒ興隆シ、西歐ヨリじえるされむ(Jerusalem)ノ聖墓ヲ訪フモノ此所ヨリ渡航スルニ及ヒ、大ニ其富ヲ増セリ、十字軍ノ時代ニ至リテ佛國人ノ軍ニ加ハルモノ及ヒ巡禮ニシテまるせいゆヨリ乗船スルモノ年々數千人ニ上リ、まるせいゆノ船ニテ歸來スルモノモ亦之ニ劣ラス其商人ハ亦此機ヲ利用シテしりや沿岸ヨリ東邦ノ貨物ヲ輸入シ、之ニ交フル

ニふらんす内地ノ織物ヲ以テシ、市ハ爲メニ彌々繁昌セリ、さらせん人(Barracens)ばれすちな(Palestine)ヲ克復スルニ至リ、東邦貿易ハ殆ント止ミ、市ハ復昔日ノ如ク盛ナル能ハサリキ、

ぼるどー Bordeaux

ぼるどーハふらんすノ大西洋岸ニ在リ、國産ノ葡萄酒ハ此所ヨリ英國ニ輸出セラレ、英國ニ於テ産スル所ノ羊毛ハ此港ヲ經テ佛國內地ニ入り、進ンテいたりやニ至リ、いたりや及小あじや、しりや地方ノ貨物モ亦同路ニヨリテぼるどーニ集リ更ニ英獨諸國ニ散セラレ本市ノ盛大ヲ成セリ、

ばるせろな Barcelona

いすばにやニ於テハ中世期ノ末ヨリ北方ノ基督教徒ト南方ノ回教徒トノ間ニ争鬪絶エス、國內ノ商工業爲メニ衰微ニ歸セシカばるせろなハしやーれまん帝之ヲ回教徒ヨリ奪還シタル後漸ク繁昌シ、いすばにやノ特産ナル羊毛、鐵、水銀、熱



帶ノ果實、とれど(Toledo)ノ武器、せびる(Seville)ノ羅紗、ぐらなだ(Granada)さらが(Malaga)ノ絹織物、こるとば(Cordova)ノ熟皮等ヲあふりか北岸、あれきさんどりや、しりや、いたりや、ぎりしや、こんすたんちのーぶる等ニ輸出シ、あれきさんどりや、しりや、ヨリ東邦ノ貨物ヲ輸入シ、しりや地方ノ穀物、生糸、油、硫黄、果物、あふりかノ穀物、羊毛、棉花、皮革、鹽、明礬、蠟等ト共ニ更ニ蘭英諸邦ニ輸出セリ、右外國貿易ノ爲メバるせるなノ海運業ハ大ニ發達シ、其盛ヲべにす、ぜのあと競ヒ、其船舶ノ外國ニ傭ハル、モノモ亦多カリキ、ばるせるなハ廣濶ナル天然ノ良港ニシテ、當時既ニ倉庫、造船所、取引所、銀行、海上保險會社等ノ設アリ、第一流ノ貿易港ナリシカ故ニ外國人ノ此所ニ集ルモノ多ク、第十五世紀ノ初メニハどいつノ商館十五アリ、いたりや諸市ノ銀行家ノ此所ニ來リテ營業スルモノモ亦頗ル多カリシト云フ、東洋貿易ノ通路變スルニ及ヒ、ばるせるなモ亦いたりや諸市ト同シク舊來ノ業ヲ失ヒ漸次衰微ニ向ヘリ、

### どいつ諸市

どいつニ於テ最モ早ク發達シタルハ水路、こんすたんちのーぶるニ至リ、ぎりしや、しりや、いんど地方ノ貨物ヲ輸入スルノ便アリシ、だにゆーぶ(Danube)河畔ノれーげんすぶるぐ(Regensburg)はつらう(Passau)諸市ニシテ之ニ次キタルハ獨伊兩國間通商ノ路ニ當レルにゆれんべるぐ(Nuremberg)あうぐすぶるぐ(Augsburg)等ナリ中ニモあうぐすぶるぐハ此貿易ノ爲メニ利シタルコト非常ニシテ、其富豪中ニハ全歐ニ名ヲ知ラル、ニ至レルモノモ亦尠カラサリシト云フ、らいん河(Rhine)ハ其源ヲあるぶす山中ニ發シ、すす(Switzerland)といつヲ通過シ、遠クたらんだ(Holland)ニ至リテ海ニ注キ、其流域廣クシテ商業ノ通路トナリタレハ其河畔ニハばーる(Basle)すとらすぶるぐ(Strasbourg)とびーる(Speyer)まさんつ(Mainz)うちるむす(Worms)ころーん(Cologne)等繁昌ナル市多ク興レリ、而シテばるちく沿岸及ヒ北海沿岸ニ於テモ亦商業市續々發達セリ、第十三世紀ハ、斯ルニ當リ、ばるちく及ヒ北海沿岸諸市ノ船舶ハ屢々てんまるく(Denmark)するーてん(Sweden)のるうネー(Norway)地方ノ海賊ノ害ヲ受ケ、内地ノ諸市亦地方豪族ノ爲メ或ハ重稅ヲ課セラレ、或ハ不當ノ徵發ヲ蒙ルコトアリタレハ之ニ抗センカ爲メニ



諸市相團結シ、此團結ニ加ハルモノ漸ク増加スルニ及ンテ有名ナルはんざ同盟 (Hanseatic League) ヲ構成スルニ至レリ、抑モはんざ同盟ハ第十二世紀ニゴとらんど島 (Gotland) ノラウズビー (Wisby) ニ於テ組織セラレタルどいつ商人ノ團結ニ其芽ヲ發シ、第十三世紀ノ初年ニ當リはんぶるく (Hamburg) 及ヒリューベック (Lübeck) ノ二市相約シテ海賊及ヒ土豪ノ攻撃ニ當リ兩市ノ商業ヲ保護センコトヲ計ルニ及ヒテ其基礎確立シ、第十四世紀ニ至リテ盛大ノ極ニ達セリ、此時ニ當リテ同盟ニ加入セルモノハ總數九十ヲ超エ、所在地ニヨリ四部ニ分タレタリ、第一ハぶろしや (Prussia) 及ヒリボンニア (Livonia) 地方ノ諸市ニシテ、其首部ハだんちひ (Danzig) ニ在リ、第二ハラウえんど地方諸市 (Wendic towns) 首部ハリューベック (Lübeck)、第三ハサクソン (Saxon) 地方諸市、首部ハコランすウィック (Brunswick) 第四ハラウえすとふありや (Westphalia) 地方諸市、首部ハコロリンニシテ總本部ハリューベックニ在リ、諸市ハ時々此所ニ代議員ヲ派遣シテ同盟ニ關スル事務ヲ議セシメタリ、はんざ同盟ハモト商業ノ安全ヲ圖ルカ爲メニ起レルモノナルカ、漸ク強盛トナ

ルニ從ヒ北方諸國王ヨリ献金ト交換ニ諸種ノ特權ヲ附與セラレ、又時々戰勝ノ結果利益アル媾和ヲナシ、でんまるく、すかちなびや (Scandinavia) ノしやぶろしや等ノ貿易權ヲ獨占シ、又ばるちく海ノ航海權ヲ專ニスルニ至レリ、はんざ同盟ハ外國ノ產物ヲ集メ、諸市ヨリ輸入スル所ノ貨物ト交換スルノ便ヲ計ル爲メ諸所ニ出張所 (Factory) ヲ設ケタリ、就中最モ重要ナルハろんどん、へるゲン (Bergen) ノブゴロツド (Novgorod) ニ在リシモノニシテ、ろんどんノ出張所ハ初メころリンヨリ出シ、のぶゴロツドノツレハライスビー (Wisby) ヲ出シ、皆治外法權ヲ有シ、租稅ヲ免セラレ、其輸入スル所ノ品ハ特ニ低率ノ稅ヲ納メタリ、のぶゴロツドハ第十一世紀以來東北歐ニ在ル最モ繁昌ナル市場ナリシカ、其商權ハ全クはんざ商人ノ手中ニ陥リ、同所ノ年ノ市ニ於テ北歐全體ニ貨物ヲ供給セルハ實ニ彼等ははんざ商人ナリキ、はんざ諸市ノ通商區域ハ殆ント歐洲全部ニ亘リ、其貿易セル貨物ハろしやノ穀類、皮革、獸脂、蠟、すのてんノ銅、鐵、材木、鹽漬ノ魚肉、でんまるくノ鯡、鹽魚、牛馬、穀類、のらうえんの材木、樹脂、獸皮、魚、魚油、いざりすノ羊毛、錫、皮革、低地諸邦ノ麻織物及



ヒ毛織物、レース、革細工、絹織物、天鵞絨、武器、ふらんすノ葡萄酒、油、鹽、いすばにや及  
 ヒぼるとがるノ葡萄酒、油、鹽、砂糖、蠟、絹布等ナリキ、  
 はんざ同盟ノ盛時ニハろしや、ぼらんなど、おらんだノ諸市モ亦之ニ加ハリシカ  
 此等外國ノ諸市發達スルニ從ヒテ漸クどいつ諸市ノ專横ヲ憤リ、續々同盟ヲ脱  
 シ、いんどノ新航路發見セラレ歐洲貿易ノ中心移動スルニ及ヒはんざノ勢力ハ  
 彌々減シ、三十年戰爭(至一六一六—一六四八年)乃ノ爲メどいつノ商工業大ニ衰フルニ至リ同  
 盟ハ再ヒ救フ能ハサル大打撃ヲ被レリ、然レトモ造船航海ノ術ヲ完全ノ域ニ進  
 メ海賊ヲ掃攘シテ航海ヲ安全ニシ、通商セル所ノ諸邦ノ殖産興業ヲ助ケ、北方未  
 開ノ地ニ町村ノ發達ヲ促シ、市民ニ自治ノ精神ヲ與ヘ、衣食住ノ愉快ヲ増進シ、歐  
 洲一般ノ文化ノ程度ヲ高メタルハ實ニはんざノ功ニシテ、永ク没スヘカラサル  
 モナナリ、  
 はんざ同盟ノ外ニ又らいん同盟アリ、貴族ノ強奪ヲ防カンカ爲メラいん河畔諸  
 市ノ首唱ニヨリテ成立シタルモノニシテ、第十三世紀ノ初メニ起リ其盛時ニハ  
 九十ノ市之ニ加盟シ居レリ

すわびや同盟(Swabian Confederacy)ハあうぐすぶるぐ、にゆれんべるぐ等ノ首唱ニ  
 ヨリ第十四世紀ニ組織セラレタルモノニシテ畧々前二者ト目的ヲ同シウセル  
 カ、第十六世紀東邦貿易ノ通路變シ獨伊間ノ陸上貿易衰フルニ至リ亦衰運ニ向  
 ヘリ、

### 低地諸市

Netherlands

ふらんでる地方ニ於テハ領主ノ獎勵ニヨリ第十一世紀ヨリげんと(Ghent)ふる  
 ーじ(Bruges)ふる(Lille)スーぶれす(Tyres)ノ諸市盛ニ織物製造ニ從事シ、第十四  
 世紀ニハ各々絶ユス四萬臺ノ織機ヲ運轉シ其富亦非常ニシテげんとノ如キハ  
 八萬ノ武装シ得ヘキ人ヲ有シ其内二萬ハ機業家ナリシト云フ、  
 ぶるーじハ英國羊毛ノ重ナル輸出先ニシテ、ふらんでる諸市ノ麻布及ヒ毛織物、  
 北方諸邦ノ材木、亞麻、大麻、穀類ノ市場タリ又らいん河ニヨレル通商ノ主要港タ  
 リキ、あむすてるだむ(Amsterdam)ろつてるだむ(Rotterdam)らうてん(Leyden)亦織  
 物製造ヲ以テ名アリ、あんべるす(Antwerp)ハ良港トシテ榮エ、いんど新航路及ヒ



新世界ノ發見後ハ歐亞ノ貨物此所ニ集リ彌々繁昌セリ、

### 工業ノ狀況

硝子製造 べにすハモト之ヲあれきさんどりやヨリ傳ヘタルカ、好原料ヲ得ルノ便利アリシカ故ニ同業忽チ發達シ地方ノ需用ニ應シテ新奇ナル製造品ヲ出スニ至レリかとりつく教寺院用ノ繪硝子ノ如キハ則チ其一ナリ、第十三四世紀ノ交ニ及ヒテハ私邸ノ窓ニモ硝子ヲ用フルニ至リシカ、中世紀ノ末ニ至ルマテ其用ハ尙ホ王侯富豪ノ家ニ止レリ、硝子ニ鉛ヲ塗リテ金屬製ノ鏡ニ代用スルコトモ亦此時代ニ始マレリ、

木綿織物 第八九世紀ノ交あらびや人此製造業ヲいすばにやニ傳へばるせろなニ於テ盛ニ行ハル、ニ至レルカ、此業ノべにすニ興レルハ第十四世紀ノ初メニシテ、同所ヨリ漸次ふるれんす、みらん、あんべるす、ぶる、じ、げんと、南どいつ諸市等ニ傳ハレリ、

麻織物、毛織物 製造ノ最モ盛ナリシハ低地諸邦、北ふらんす及ヒ英國ノのるふれーく(Norfolk)、うーるとしやー(Wiltshire)、そーまるせつと(Somerset)等ナリキ、羊毛ノ主産地ハいざりす、いすばにや兩國ニシテ、英産ヲ最良トシ、いすばにやノ羊毛ハ通常英産ト混シテ用ヒラレタリ、左レハ英國ノ羊毛輸出額ハ甚タ多クシテ中世紀ノ英國ノ富ハ専ラ之ニ基ケリ、どいつニ於テハふりーすらんど(Friesland)早ク毛織物製造ヲ以テ名アリ、あうぐすぶるぐ、うるむ(Die)等南どいつノ諸市ニ於テハ、リンネル製造盛ニシテ第十三四世紀ニハ同地方ノいたりや向輸出ノ主要品ハ、リンネル類ナリキ、殊ニあうぐすぶるぐハ織物業最モ盛ニシテ第十五世紀ノ中頃ニハ織物師七百人ニ上リシト云フ

絹織物 製造ノ最モ盛ナリシハいすばにやノばるせろな、ふらんすノりよん(Lyon)地方及ヒいたりやノぜのあ、みらん、べにす、ふるれんす、ねーぶるす等ニシテ、其材料タル生糸ハ東邦及ヒざりしや並ニ沿海ノ諸島ヨリ來レリ、



三  
べるしやニ於テ生糸ノ西方輸出ヲ妨害スルニ及ヒざりしやニテハ頻リニ養蠶  
ヲ起サンコトヲ欲セシカ基督紀元五百五十年頃二名ノ宣教師べるしやヨリこ  
んすたんちのゝふるニ還ルトキ始メテ蠶種ヲ竹管中ニ隠匿シテ携へ來リ之ヲ  
じゆすちにやん帝(Justinian)ニ獻セリト云フ是レ歐洲ニ於テ蠶兒ヲ知ルノ初ナ  
リ養蠶業ハコレヨリざりしやニ起リ漸クいたりやニ弘リ又ふらふすニ傳レリ  
いすばにやニ之ヲ傳へタルハあらびや人ナリシカ桑葉不良ナリシタメ太々盛  
ナルニ至ラサリキ、  
あらびや人ハ又し、りやニ絹織物業ヲ傳へ第十二世紀ニ至リこりんとあてん  
等ノ機業家多ク此地ニ移住スルニ及ヒ該業盛ニナレリ第十三世紀ニ至リべに  
すニざりしやノ機業家ヲ招キ第十四世紀ニハ絹織物ノ業べにす、るか(Lucca)  
もてな(Modena)ぼろにや(Bologna)各地ニ起リ千三百十年るつかノ機業家政争  
ノ難ヲ避ケテべにす其他北伊諸市へ移ルニ及ヒ彌此業ノ繁昌ヲ來セリ、ふらん  
すニ於ケル絹織物製造ハ千四百八十年るい十一世(Louis XI)ノ命ニヨリつゝる  
(Tours)ニ機ヲ据へ付ケタルニ始マリ、千五百二十年ふらんしす一世(Francis I) S

たりや出征後みらんヨリ蠶種ヲ輸入シテろーん(Rhone)河畔ノ地ニ試養セシメ  
タルヨリ此業彌々隆盛ノ域ニ向ヘリ、  
刀劔甲冑ノ製造ハ戦争絶ユルコトナカリシ中世時代ニハ最モ有用ナル業ト  
シテ大ニ繁昌セリ、みらんノ甲冑いすばにやノとれど(Toleto)ノ劔ハ歐洲ニ於テ大  
ニ賞セラレどいつノあうぐすぶるぐにゆれんべるぐモ亦之ヲ以テ有名ナリキ  
砂糖精製及ヒ蠟燭製造モ亦此時代ニ於テべにす地方ニ新ニ起レル業ナリ  
銀行貨幣ノ通用漸ク繁クシテどいつ地方ノ如キハ諸侯皆領内専用ノ貨幣ヲ  
鑄造スルニ至リシカハ貨幣ノ眞贋ヲ鑑定スルノ必要生シ、商人ノ他領ニ行クモ  
ノハ又自領ノ通貨ヲ行カント欲スル地方ノ通貨ト交換セサル可ラサルコト、  
ナリ爲メニ兩替業ノ發達ヲ促セリ、而シテ兩替業者ハ又遠隔地ノ商家相互ノ送  
金ノ媒介ヲナセリ、十字軍時代ヨリいたりや諸市ノ豪商ハ出張店ヲ東方諸邦、ふ



らんす、ふらんでる、どいつ等ニ設ケ、此等出張店ハ何レモ兩替業ヲ營ミ、又漸次其所在地ト本店所在地トノ間ノ爲替ヲ取扱フニ至リタレハ、ばるせるなりよん、いざりす、ふらんでる諸市等ニ於テハ、第十三世紀ニ於テ爲替ノ發行ヲ見タリ金錢ヲ貸附ケテ利子ヲ徴收スルコトハ、ろーま教會ニ於テ嚴禁セル所ニシテ、初メハゆだや人(Jews)專ラ金錢ノ貸附ヲナシ、高利貸トゆだや人トハ同一視セラル、有様ナリシカ、銀行ノ盛大ニ赴クニ從ツテ又貸附ヲ業トシ、君主モ之ヲ禁スル能ハサルノミナラス、却テ屢々自ラ銀行ヨリ借入ヲナシ、僧侶ニシテ其所有金ヲ銀行ニ預ケ入レ、利子ヲ收ムルモノモ多カリキ、ふろれんすノばるぢ家銀行ノ如キ僧侶ヨリ預レル金額ハ實ニ五十萬ニ上レリト云フ、當時ノ利率ハ二割乃至五割ヲ通常トシ更ニ高キコトモアリタレハ貧人ノ高利貸ノ爲ニ苦シメラル、モノ甚タ多カリキ、故ニ之ヲ防カンカ爲メ市立銀行及ヒ公立質屋(Montes Pietatis)等設立セラル、ニ至レリ、低地諸邦ニ於テハ第十三世紀ノ終ニ既ニ其設立ヲ見タリどいつノふらんくふあると・おんまいん (Frankfort-on-Main) ノ商業銀行ハ第十五世紀ノ初年ニ創立セラレ、兩替、預リ金及ヒ貸附ヲ營メリ、ベにす銀行ハ第十五世紀

ノ末ニ起リ千五百八十七年ニ其組織完成セリ、  
 金銀ノ比價ハ時々高下アリシカ中世紀ヲ通シテニ對スル十乃至十二ノ割合ナリキ、  
 商工團體ハ中世紀ノ歐洲ハ秩序大ニ亂レ箇人ノ生命財產安全ナラザリシカ故ニ士民皆自衛ノ途ヲ講スルノ必要アリ、商工ノ業ヲ同ウスルモノ各々團體ヲ結ビ相互ノ利益ノ保護増進ヲ計レリ、工業團(Craft guilds)ハ共同貯金ヲナシテ會員ノ共濟ヲ計リ、徒弟ノ養成ヲ努メ、又會員外ニシテ粗惡ナル品ヲ製造スルコトヲ監督防止セリ、商業團(Merchants guilds)ハ會員相助ケ又協力シテ商業ノ安全ヲ計ルノ主旨ヲ以テ起レルカ、漸ク勢力ヲ増スニ從ツテ商業ノ獨占ヲ計リ、又市ノ政治ヲ左右スルニ至レリ、中世ニ於ケル市政ノ發達及ヒ民權自由ノ進歩ハ多ク此ノ如キ團體ノ力ニヨレリ、而シテ團體ノ範圍漸ク廣ク、數市ノ連合ヲナスニ至レルハ前ニ既ニ述ヘタリ、



市<sup>イ</sup> 我邦ニ於テ二日市、四日市等ノ稱地名ニ存シ今日尙ホ年ノ市所々ニ行ハル  
カ、歐洲ニ於テモ中世紀ニハ到ル處之ニ類シタルモノアリテ商業ノ便ニ供セ  
ラレタリ、市ノ起因ハ靈現著シキヲ以テ名アル寺院ノ祭禮ニ際シ、諸方ヨリ來ル  
モノ多ク、其需用ニ應スル爲メ商人ノ此所ニ集レルニアリシカ、當時各所共大ナ  
ル商買乏シク、一所ニ在リテ各種ノ商品ヲ購ムルコト容易ナラス、又交通不便ニ  
シテ旅行困難ナリシカ故ニ、此ノ如キ場合ヲ利用シテ貨物ノ交換ヲナスヲ便利  
トナシ、遠隔地方ノ人皆此所ニ集ルニ至レリ、交通漸ク便ナルニ從ヒ、隨時商品ヲ  
運搬シ得ルカ故ニ市ノ必要減シ、今日尙ホ市ノ存スルハいすばにや及ヒろしや  
等數所ニ過キサカ、當時ノ盛況ハ現存ノのぶごろつどノ年ノ市ノ狀況ニ照シ  
テ其一斑ヲ知ルコトヲ得ヘシ、にじにのぶごろつど(Nijni-Novgorod)ノ市ハ毎年七  
月一日ニ開カレ凡ソ六週間繼續シあじやろしや、はうろつばろしや、どいつ、ぼ  
らんど等ノ商人皆此所ニ集リ、其開ク所ノ店ノ數ハ五千ヲ超エ、商人ノ郷里ニ從  
ヒテ數區ニ分ル、而シテ其取引高ハ七八百萬磅ニ上リ來集ノ人員三十萬ニ達ス

ルコトアリト云フ以テ其盛ナルヲ推知スヘシ、此市ハモトかざん(Kazan)ニ開キ  
シヲ千六百四十八年まかりえふ(Makariev)ニ移シ、千八百十七年ノ同所大火後の  
ぶごろつどニ移セリ、同市カ今日ノ繁昌ヲ致セルモ全ク其年ノ市ニヨレリト云  
フ、

### 第三章 發見時代

基督紀元第十二世紀以前ニハ歐洲ヨリ中央あじやニ至ル隊商ノ通路多カリシ  
カ、十字軍後回教徒ノ敵愾心強ク、此地方ヲ通過スルコト危險トナリ、只三條ノ道  
筋ヲ存スルニ至レリ、  
第一、いんどヨリ海路べるしや灣頭ノばすら(Basra)ニ來リ、ちぐりす河ヲ溯リ  
テばぐだつどニ出テ更ニ兩河間ノ地ヲ北上シ、陸路あんちあきや(Antioch)ニ至リ  
おろんてす河(Orontes)ヲ下リテ地中海岸ニ出ツルモノ、  
第二、いんどヨリばぐだつどノ北方ニ至ルマテハ前路ト同一ニシテ、此所ヨリ  
小あじや及ヒあるめにや(Armenia)ノ高原ヲ經テ黑海岸ノ港とれびずんど(Tre-



bizond)ニ至ルモノ  
 第三、いんどヨリ海路あてん (Aden)ニ至リ、其所ヨリ砂漠ヲ過キテないる河ノ上流ニ出テ、之ヲ下リテかいろニ至リ、更ニ二百哩ノ運河ニヨリテあれきさんどりやニ出ツルモノ、  
 ばぐだつどハ右ノ如ク東洋貿易ノ要路ニ當リ、いんど、べるしや、あらびや及ヒ中央あじやノ貨物ノ集ル所トナリ、又盛ニ木綿、絹、麻等ノ織物、革、金銀細工等ヲ製造シタレハ一時最モ繁昌ヲ極メタリ、あれきさんどりやニモ亦香料、砂糖、寶石、護謨、油、綿、生糸等東洋ノ貨物集リ、べにす、ぜのあ地方ノ商人來リテ之ヲ歐洲ニ轉賣セリ、

此外だますこ (Damascus)ハ、べるしや、あらびや、しりや地方ノ貨物ノ集散地トナリ、其工業亦盛ニシテ精巧ナル劍、天鵝絨及ヒ絹織物、馬具等ハ其製造品中最モ名アルモノナリキ、  
 とるこ人ハ千二百四十年頃始メテ歐洲ニ其名ヲ知ラレタル人種ナルカ漸ク勢力ヲ増シ、第十四世紀ノ後半ニ東歐ニ侵入シ、とるこ (Turkey)ノはどりやの、  
 (Hadrianople)ヲ都トシせるびや (Serbia)ふるがりや (Bulgaria)ヲ占領シ、千四百五十二年ニハこんすたんちの、  
 せりむ一世 (Selim I)をじぶとヲ征服セリ、是ニ於テ前記ノ東西貿易ノ通路ハ三條共ニ全ク斷タル、ニ至レルカ故ニ他ノ路ニヨリテ東洋ノ貨物ヲ輸入スルノ必要起レリ、又第十二世紀ノ頃ヨリ東方ニ基督教國ニ君臨シ、自ラ祭司ヲ兼ネタルふれすてる、じよん (Prester John)ト云フ強大ナル王アリトノ話歐洲ニ傳リ、其國力ノ強盛ナルコト其使者ノ歐洲ニ來リ基督教國ノ王ニ書ヲ致シタルコト、等語ヲ傳ヘラレタレハ回教徒ノ勢力漸ク盛ナルニ及ヒテふれすてるじよんと連絡ヲ通シ東西相應シテ回教徒ヲ亡サントノ考ヲ生シ、頻リニあじやニ至ル、新路ヲ索ムルニ至レリ、  
 是ヨリ先キ歐洲ニ於テハ文明史上ニ大影響ヲ及ホセル三大發明アリ、其一ナル磁石ノ發明ハ航海術ニ新紀元ヲ開キ、大洋ヲ渡リテあじやニ至ル新航路ヲ索ムルノ壯舉ニ出ツルコトヲ得セシメタルモ實ニ其效ナリ、  
 支那ト西洋トノ交通カ夙ク唐ノ太宗ノ世ニ開ケタルハ、基督紀元千六百二十五



年新安府即チ古ノ長安ノ城外ヨリ發掘セル大秦景教流行中國碑ニヨリテ明ナリ、碑ハ高サ六呎四分一、幅三呎アリ、基督紀元七百八十一年(唐建中二年)ニ建設セルモノニシテ同六百三十五年(唐貞觀九年)大秦國ノ宣教師始メテ支那ニ來リ、六百三十八年(貞觀十二年)太宗基督敎宣傳ニ利益アル布告ヲ發シ、爾來敎勢大ニ張レルコトヲ記シ、末尾ニ宣教師ノ姓名ヲ漢字及しりや文字ニテ列記セリ、此宣教師等ハ四百二十八年ヨリ同三十一年マテこんすたんちのゝぶる、ノ教長タリシカ、異端ヲ唱フルモノトシテ放逐セラレ、あんちをさやニ退キ四百三十五年更ニあらびやニ移レルねすとらうす(Nestorius)ノ派ニ屬スルモノニシテ、大秦國ハモトろゝま或ハしりやナラント思ハレタルカ、此ノ頃我邦ノ學者ニシテゑじぶとナリトノ新説ヲ出シタルモノアリ、碑文ヲ始メテ世ニ公ニセルハあさねしうす、さるへるす(Athanasius Kircherus)ニシテ其著 Prodomus Ooptus sive Aegyptiacus, 1636 及ヒ China Monumentis, 1667 ニ全文ヲ載セタリ、天道溯源ニモ此文ヲ掲ケ碑文ノ石刷モ亦世ニ傳ハレリ、○  
 基督教ハ既記ノ如ク一時支那ニ行ハレシカ、爾後二百餘年ニシテ禁止セラレ、支

那ト西洋トノ關係モ亦再ヒ絶エタルカ如シ、蒙古人勢力ヲ得支那ヲ併セ又西方ノ諸地ヲ略シテ歐洲ニ入りろしやヲ占領シばーらんど(Poland)及ヒはんがりー(Hungary)ヲ蹂躪し殆ント歐洲ノ全土ヲ席捲セントスルニ及ヒ之ト結ンテとるこ人ニ當ランコトヲ欲スルモノ起リ千二百四十五年いたりやノ人じよばんに、びやのぢ、かるびに(Giovanni Piano di Carpini)法王ゐんのせんと三世(Innocent III)ノ命ヲ奉シ佛國りよんヲ發シテ蒙古ノからこゝるむ(Karakorum)ニ使シ千二百四十七年歸着シ、千二百五十三年ニハ又ふらんでる人ぶるーく(Willelm Rubruk)亦からこゝるむニ至リ、千二百五十五年歸リ來リ皆途中見聞セル所ヲ記録シテ世ニ傳ヘタルカ、此時代ニ於テ支那ヲ西洋ニ紹介スルニ付テ最モ功アリシハまゐるこ、ぼろナリ、  
 ぼろ(Polo)ノ家ハ、へにすノ門閥アル商家ニシテ、にころ(Nicolo)及ヒまづふえお(Matteo)兄弟ハ千二百六十年こんすたんちのゝぶるニ至リテ商業ニ從事セシカ、其後進テからこゝるむニ至リ、忽必烈汗ノ知遇ヲ得、命ヲ請ケテ宣教師ヲ迎ヘンカ爲メ、千二百六十九年いたりやニ還レリ、千二百七十一年まづふえお等ハ新ニ



任ニ就ケル法王ぐれごり十世 (Gregory X) ノ返答ヲ得、宣教師二名トにころノ子まるこ (Marco) ヲ伴ヒテ出發セルカ宣教師ハ半途引返シぼろ等三人ハえくる (Aere) ぼぐだつふ (Bagbad) ちるむす (Ornuz) ばみゝるノ高原 (Plateau of Pamir) かしがる (Kashgar) やるかんど (Yarkand) こゝたん (Khotan) るぶのる (Lobnor) こび砂漠 (Gobi) ヲ經テ千二百七十五年五月北京ニ到着セリ、彼等ハ復命ヲ終リテ其儘同所ニ留リシカまるこハ大ニ皇帝ノ寵用ヲ蒙リ、屢々國內各所ヲ巡歴セルカ皇族ノ女べるしや王ニ嫁セントシテ旅程ニ上レルトキぼろ等ハ一行ニ加ハリテ海路べるしやニ至リ、千二百九十五年ベにすニ歸着セリ、其頃ベにすハぜのあト海上ノ權勢ヲ争ヒ屢々衝突セルコトアリシカ、まるこぼろハ千二百九十八年九月七日ノ海戦ニぜのあ人ニ捕ヘラレ、尋イテぜのあノ獄ニ繋カレタリ、此檻禁中ニ有名ナル旅行記ヲ作レリ、其後ベにす、ぜのあ間ニ平和條約締結セラル、ニ及ヒぼろハ釋放セラレテベにすニ歸リ、千三百二十四年頃死去セルカ其著書ハ千四百七十七年ノどいつ譯ヲ初トシ、千五百二年ノぼろとがる譯、千五百二十年ノいすばにや譯、千五百七十九年ノいざりす譯等續々世ニ現ハレ、其他寫本譯書ノ世

ニ傳ハレルモノ七十八ニ達スト云フ、此書ハ二部ニ分レ第一部序文ニハまるこ、ぼろノ旅行ヲ叙シ、第二部ニハ其ノ見聞セル各地ノ狀況ヲ載セタリ、此部ニハ又日本 (Zipangu) ト呼ヘリ) ノコトヲ記ルシ、黄金ニ富ミ、宮殿ノ屋根ハ黄金ノ板ヲ以テ葺キ、室ノ天井モ亦之ヲ用ヒ、窓モ之ヲ以テ飾リ、室内ニハ所々ニ頗ル厚キ黄金ノ机アリト云ヒ、元主此島ヲ征服セント欲シ、大兵ヲ派シタレトモ其效ナカリシ由ヲ記セリ、回教徒ノ爲メニ東洋貿易ノ途ヲ絶タレタルコトカ近世期ノ始メ歐洲人カ新地發見ニ向ヘル主因ナルコトハ前ニ既ニ述ヘタルカ、新航路ニヨリ直ニ支那ニ達シ、又黄金ニ富メルじばんぐニ至ラントノ希望カ大ニ此發見熱ヲ刺激セルハ疑フヘカラス、

歐洲諸國中率先シテ新地發見ニ從事セルハぼろとがるニシテ、國王じよん一世 (John I) ノ第五子へんり親王 (Prince Henry) ぼろとがるノ南角さんびせんで岬 (Cape San Vicente) ニ觀測所ヲ設ケ、航海學校ヲ開キ私財ヲ擲チテ、大ニ航海ヲ奨勵シタリシカハ千四百三十一年ニハあぞゝれす島 (Azores Isdls) 發見セラレ、同三十四年ぼろとがる船ハ従前何人モ恐レテ近ツカサリシぼじやどゝる岬 (Cape Boj-



ador)ヲ過キテあふりか西岸南下ノ道ヲ開キ、千四百四十五年ニハ進ンテべるて岬(Cape Verde)ニ達セリ、へんりー親王ハ千四百六十年齡六十七歳ニシテ死セルカ、其ノ着手シタル事業ハ彌々進歩シ、同年けいぶべるて島(Cape Verde Isds)發見セラレ、千四百八十六年ニハばるとろめうぢあす(Bartolomeu Dias)あふりか南岸ヲ下リテ終ニ其南端ニ達シ、波浪ノ荒キニヨリ之ヲCabo Tormentoso(荒レノ岬)ト命名セリ翌年りすぼんニ歸ルニ及ヒテ國王ハ之ヲ改メテCabo da Boa Esperanze(Cape of Good Hope 喜望峰)ト稱セリ、之ヲ廻リテいんどニ近ツクヘキヲ豫想シテ此名ヲ附シタルナリ、

千四百九十二年ころんぶす(Columbus)大西洋ヲ横斷シテ對岸ノ地ヲ發見スルニ及ヒテ、ばるとがる政府ハ其ノ專ニシ來レル發見ノ功名ヲいすばにやニ奪ハレソトヲ恐レ速ニいんど及ヒ支那ニ達センコトヲ計レリ、ばすこ、だ、がま(Vasco da Gama)ハ千四百九十七年三月二十五日三隻ノ船ヲ率キテりすぼんヲ發シ、途中暴風及船員ノ反抗ニ會スルコト屢々ナリシカ、終ニ喜望峯ヲ廻リテもごんびーく(Mozambique)ニ達シ、更ニ北進シ、もんばさ(Mombasa)ヲ經テめりんだ(Melinda)ニ

至リ、此所ヨリいんどニ渡リ、千四百九十八年五月二十日かりくつと(Kalikut)ニ到着セリ、當時此地方ニ通商セルハあらびや人ニシテ、ばるとがる人ノ來レルヲ見テ商權ヲ奪ハレソトヲ恐レ、だ、がまカかりくつとノ王ト會見シ條約ヲ定メテばるとがるノ商館ヲ此所ニ設ケントスルヤ、大舉シテ之ヲ襲ヘリ、だ、がまハ僅ニ逃ル、コトヲ得、去リテかなのーる(Kanamor)ニ至リ、千四百九十八年十二月十日いんどヲ去リテあふりかニ渡リ、前路ニ由リテ千四百九十九年九月りすぼんニ歸着セリ、此航海ハ實ニばるとがる政府カ多年目的トセルいんど航路發見ノ目的ヲ達シタルモノニシテ、其功ハころんぶすノ新地發見ニ匹敵スヘシトナシ國王ハ、だ、がまヲ貴族ニ列シ、あどみらる(Admiral)ノ稱號ヲ授ケ、年々いんど貿易ノ利益ノ幾分ヲ與フルコト、ナセリ、

いんどノ新航路發見セラレタル後、ばるとがるニテハ連年艦隊ヲいんどニ派シテ勢力範圍ノ擴張ヲ努メ、千五百五年ニ至リテふらんしすこ、あるめいだ(Francisco Almeida)ヲいんど總督ニ任シタリ、あるふおんそ、あるぶけるけ(Alfonso Albuquerque)代リテ任ニ就クニ及ヒ、千五百十年一月二十一隻ノ船ヲ率キテ、ごあ(Goa)



ヲ攻メ直ニ之ヲ陷レタリ、其後土人ノ逆襲ニ會ヒテ一時此所ヲ撤去シ、同年十一月二十三隻ノ船ヲ率キテ再ヒ此所ニ來リ終ニ之ヲ攻取シ、まのえる (Manoel) 城ヲ築キ兵四百人ヲ以テ之ヲ守レリ、千五百十二年ニ至リ、ごあハ土人ノ蜂起セルカ爲メ一時危急ニ陥リシカ、あるぶけるけ遠征ヨリ歸來シテ之ヲ鎮靜シ、ごあハ終ニ葡領ニ歸シ、總督ノ居所トナリ、葡領いんど施政ノ中心トナレリ、是ヨリ先キあるぶけるけハ艦隊ヲ率キテいんどノ西岸ヲ北航シ遠クペるしや灣頭ニ至リ又紅海ニ入り、ぼるとがるノ勢力ヲ扶植シ、あらびや人既得ノ商權ヲ奪フコトニ力メ、あるめいだ亦えじぶと王カ特派シタル艦隊ヲ擊破セリ、此時ニ至リテえじぶと王ハ終ニいんどニ於ケル勢力回復ノ念ヲ斷チいんど各地ノ主權者モ亦ぼるとがるト好ヲ通スルコトヲ求ムルニ至レリ、

いんどニ於ケルぼるとがるノ勢力漸ク盛ナルニ及ヒ、ぼるとがるノ艦隊ハ更ニ東航シ、千五百九年せけいら (Diogo Lopez de Sequeira) シンゾヨリすまとら (Sumatra) ヲ經テまらつか (Malacca) ニ至リシカ、土人ニ襲ハレ此所ヲ去リテ歸路ニ就ケリ、當時南洋諸島ニ産スル香料ハ歐洲ニ於テ甚タ嗜好セラレ、東洋輸入貨物ノ主位

ヲ占メ、まらつかハ實ニ南洋ノ咽喉ナリシカハ、あるぶけるけハ戰艦十九隻ヲ率キテ千五百十一年春こちん (Cochin) ヲ發シ、七月一日まらつかニ著シ、國王ト通商條約ヲ結ハントセルカ、國王ハ葡人ノ勢力漸ク盛ナルニ至ランコトヲ恐レ、密ニ兵備ヲ整へぼるとがる人ヲ殲滅センコトヲ謀レリ、あるぶけるけハ是ニ於テ直ニ應戰シ、八月初旬まらつかヲ攻取シ、此所ニふもーさ城 (Famosa) ヲ築キ、其地ノ防備ニ充テタリ、此戰ニ於テまらつか王ハ兵三十萬、銃八千、象數十頭ヲ用ヒぼるとがるノ軍ハ葡人八百人、いんど人六百人ヨリ成リシト云フ

まらつかヲ占領シタル後ぼるとがる人ハ暹羅、ペグー (Pegu)、じゃば (Java)、すまとらト隣交ヲ結ヒ、千五百十一年末あんとにちだぶれう (Antonio D'Abreu) 船三隻ヲ率キテまらつかヲ發シ、じゃば、あんぼいな (Amboina)、ばんだ (Banda) ノ諸島ヲ巡航シ、千五百十三年ニハ葡艦隊進ンテるなて (Ternate) 及ヒちどる (Tidor) ニ至リ島主ト親交ヲ約シ、香料直輸出ノ途ヲ開ケリ、千五百二十一年ニハあんとにちだぶりと (Antonio de Brito) 艦隊ヲ率キテもろつか諸島 (Molucca Ilds) ニ至リ艦隊ノ一部ヲ派シテぼるねま (Borneo)、せれべす (Celebes)、らどろん諸島 (Ladrones) ヲ探檢セ



シメタリ、ふりとノ艦隊じやばヨリもろつか諸島へ航行中ニいすばにや文ノ航海免狀ヲ有セル土人ノ船ニ會シ又千五百二十二年ちどるニ於テいすばにやノ商人ふわんで、かんばす (Juan de Campos) ヲ捕へ、始メテいすばにや人ノ此地方ニ來レルヲ知レリ、で、かんばすハ實にまぜるらんノ世界周航艦隊ノ一員ニシテいすばにやノ貿易事務官トシテちどる島ニ止リタル者ナルカ其事蹟ヲ述フルニ先チテ、ころんぶすカ新地探見ノ爲メニ盡シタル所ヲ叙スヘシ、  
 ころんぶす (Christopher Columbus) ハいたりやノぜのあノ人ニシテ、其家ハ羊毛ノ梳整ヲ業トセルカ、彼ハ十四歳ノ頃ヨリ航海ニ従事シ、あめりか發見ノ業成ルニ及ノテ始メテ世ニ知ラレタルハ其生年月ノ如キモ不明ニシテ千四百三十六年或ハ千四百四十六年或ハ千四百五十六年ナリト云ヒ、其出生ノ地ナリト主張スル處モいたりや國內ニ十ヶ所アリ、ころんぶすハ軀幹高ク骨格逞シク頭髮ハ赤味ヲ帯ヒタルカ早クヨリ灰色ニ變シ居タリト云フ、其肖像中最モ眞ニ近シトセラル、ハいすばにやノまどりつ (Madrid) ノ國立圖書館ニアルモノト同國ノ海軍省所藏ノモノナリ

歐洲ノ西ニ當リ大洋中ニ陸地アルヘキハ第十五世紀ノ初年來人ノ想像セル所ニシテ、航海者中ニハ遠方ニ島嶼ヲ見タリト云フモノアリ、當時ノ地圖ニモ洋中ニ島嶼ヲ載セタルアリ、ふろれんすノ醫師ばねろ、とすかねり (Paolo Toscanelli) (一三九七年出生一四八二年死去) ハ地理學ニ精通セル人ナリシカ千四百七十四年六月りすぼんニ在リシ其友まるちねす (Fernão Martinez) ニ書ヲ送り、西航シテカセー (Cathay) 支那及ヒヒばんぐニ到リ得ヘキコトヲ論シ其實行ニ盡力センコトヲ求メタルコトアリ、ころんぶすハ多年航海ニ従事シタル後りすぼんニ定住シ、專ラ地理學及ヒ航海術ヲ研究セルカ、とすかねりノ說ヲ聞キ又彫刻シタル木片及ヒ異様ノ人體ノあぞれす諸島あふりか沿岸等ニ漂着スルコトアルコトヲ傳聞シ、大洋ノ彼岸ニあじや大陸アリ、西航シテ此所ニ至ルコト容易ナルヘシト考へ、千四百八十三年ぼるとがる王じよん二世 (John II) ニ西航船派遣ノ事ヲ建議セルカ、當時ノ學者ハ國王ノ諮問ニ對シテ、ころんぶすノ論ハまるこぼろノ談ニ基キタル空想ニ過キスト答ヘタレハ、ころんぶすノ議ハ採用セラレス、千四百八十四年去リテいすばにやニ行キ暫ク此所ニ滞在セル後、有力ナル保護者ヲ得



其助力ニヨリテ千四百八十六年一月女王イサベラ (Isabella) ニ謁シ其説ヲ述ヘ女王ノ命ニヨリさらまんか (Salamanca) 大學ニ至リ學者會議ノ審査ヲ受ケタルカ其意見復タ容レラレス、千四百九十一年海路ふらんすニ到ランカ爲メニ南下セリ途中ばろす (Palos) ニ近キらびだ (La Rabida) ノふらんしすニ派ノ僧院ニ宿泊シ院主ふわん、べれす、で、まるちぬな (Juan Perez de Marchena) ニ流浪ノ理由ヲ説キ、西航ノ意見ヲ述ヘタルニ院主ハ大ニ之ニ賛成シ、曩キニ女王ノ懺悔師タリシコトアルヲ以テ直ニ書ヲ女王ニ送リテころんぶすノ議ヲ採用センコトヲ勸メタリ、女王ハ院主ノ勸メニ従ヒ、千四百九十二年一月ぐらなだ (Granada) ノ城陥落シ回教徒全クいすばにやヨリ驅逐セラル、ニ及ンテころんぶすヲ引見シ、其意見ニ賛成セルモ要求條件ノ過大ナル爲メ再ヒ其請ヲ退ケタルカ、終ニ私財ヲ投シテ之ヲ助ケ西航ノ素志ヲ遂ケシムルコトニ決セリ、ばろすノ豪家びんそん (Pinzon) 亦ころんぶすニ協力シ、終ニ船三隻ヲ艦装シ、びんた (Pinta) 及に、や (Niña) ノ二隻ハびんそん兄弟之ヲ指揮シ、ころんぶすハ船體最大ナルさんた、まりや號 (Santa Maria) ニ座乗シテ、千四百九十二年八月三日ばろす港ヲ發シ、かなりや諸島ニ直行

シ、びんた號修繕ノ爲メ四週間此地ニ碇泊セル後、九月六日再ハ出帆セルカ、際涯ナキ大洋ヲ航行スルコト數十日ニ及ヒ水夫等ハ漸ク危惧ノ念ヲ懷キ、直ニ回航センコトヲ請ヒシコト一再ナラス殆ント暴舉ニ及ハントセルコトモアリシカころんぶすハ百方之ヲ慰諭シテ航海ヲ續ケタリ、千四百九十二年十月十二日午前二時びんた號桅上ノ水夫始メテ陸地ヲ認メ天明ニ至リテ其ノ島ナルコトヲ確メタリ、此所ニ着スルニ及ンテころんぶすハ盛装シテ上陸シいすばにや王ノ名ニヨリテ同島ヲ占領スル旨ヲ公言シ、之ヲさん、さるばどーる (San Salvador) ト稱セリ、當時船員ノ喜悅ハ非常ニシテ皆ころんぶすノ足下ニ伏シ途中ノ暴行ヲ陳謝セリト云フ、さん、さるばどーるハ土名ぐわなはに (Guanahani) ト云ヒ、ばはま諸島 (Bahama Isds.) ノ一ナリ、今ノわつとりんぐ (Watling) 島ナラント云フ、ころんぶすハ此島ヨリ南航シ十月二十八日くば島 (Cuba) ニ至リ其ノ大ナルヲ見テ大陸ナリトナシ支那ノ泉州附近ナラント考ヘ、十一月二日ろどりご、で、へれす (Rodrigo de Jerez) 等ヲシテ支那皇帝ニ宛テタル書簡ヲ携ヘテ内地ニ入ラシメタルカ、一行ハ戸數五十餘、人口一千許ノ村落ニ至リ大ニ歡迎セラレタレントモ土



民ノ状態ハまるこぼろノ記セル所ト大ニ異ナレルヲ以テ支那本土又ハ日本ニ  
 アラス附近ノ一地ナラント思惟シ歸リテころんぶすニ復命セリ十一月十二日  
 同所ヲ發シ海岸ニ沿ウテ更ニ東行シ、十二月五日くば島ノ東端まゝし岬(Maysi)  
 ニ至リ進ンテはいち島(Hayti)ニ渡リ其風土草木ノいすばにやニ似タルヲ以テ  
 いすばによら(Española)小いすばにやト稱セリ、本島沿岸航海中十二月二十四日  
 さんたまりや號暴風ニ遭ヒテ難破シタレハころんぶすハにや號ニ移乘シ島  
 ニなびだーど(Navidad)ノ寨ヲ設ケ、此所ニいすばにや人三十九人ヲ遺シテ第一  
 ノ殖民トナシ、千四百九十三年一月四日歸航ノ途ニ就ケリ、二月十二日ヨリ暴風  
 起リ二船相別ル、ニ至レリ、ころんぶすハ難破ノ不幸ニ遭遇スルコトアリトモ  
 發見ノ報ヲ歐洲ニ傳ヘント欲シ羊皮紙ニ認メタル報告書ヲ帆布ニ包ミ之ヲ箱  
 ニ入レ海中ニ投シタリト云フ、幸ニシテ風波少シク鎮リにや號ハ同十七日あ  
 づーれす島ニ着シ船ニ應急ノ修繕ヲ加ヘタル後同月二十四日出帆シ三月四日  
 りすぼんニ着セリ、此地ヨリ發見ノ報告書ヲいすばにや王及ヒ女王ニ送リ又ば  
 るとがる王ニ謁見シ三月十三日出帆同月十五日ぼろすニ着セリ、該港出帆以來

實ニ二百二十五日ナリキ、  
 ころんぶすハぼろすヨリせびりや(Deville)ニ至リ、同所ヨリ陸路ばるせろなニ行  
 キ、三月三十日國王及ヒ女王ニ謁見シ携ヘ歸レル新發見地ノ產物ヲ獻セルカ、國  
 王ハ其ノ偉功ヲ賞シ、約ニヨリテころんぶすヲ貴族ニ列シ提督(あどみらる、Ad-  
 miral)ノ稱號ヲ許シ新發見地ノ總督ニ任シ同所ノ國庫收入ノ十分一ヲ與フル  
 コト、ナセリ、ころんぶす新地發見ノ偉業ハ人心中世期ノ固陋ヲ脱シ新活動ヲ  
 始メタルコトノ結果ナルカ、此ノ前代未聞ノ大發見ニヨリ精神上ノ活動彌々加  
 ハリ近時文明ノ進歩ヲ促シタリ、ころんぶすカ微賤ニ身ヲ起シ忽チ榮達ヲ極メ  
 タルモ亦怪シムニ足ラサルナリ、  
 いすばにや政府ハころんぶすノ歸着後直ニろーま法王廳ト交渉シタル結果千  
 四百九十三年五月三四兩日ノ令ニヨリ法王あれきさんでる六世(Alexander VI.)  
 ハあぞーれす諸島ノ西方一百りーぐ(100 leagues)ノ所ニ一線ヲ畫シ、此  
 線ノ東方ニ當リテ發見スル所ハぼるとがる之ヲ領シ、其西方ノ新發見地ハいす  
 ばにや占領スヘシト定メタリ、ぼるとがる政府ハ之ニ服セス終ニ西葡兩國ヨリ



委員ヲいすばにやノとるでしりやす (Tordesillas) ニ會セシメ協議ヲ重テタル後千四百九十四年六月七日ノ協約ヲ定メけいぶ、べるで島ノ西方三百七十りいぐノ處ニ分界線ヲ置キ、其正確ナル地點ハ兩國ヨリ委員各四名ヲ現場ニ派シテ定ムルコト、ナセリ、千四百九十三年九月二十五日ころんぶすハ船十二隻ニ武士千二百人ヲ分載シ運送船三隻ヲ率キ家畜穀類等ヲ携ヘテかぢす (Cadix) ヲ出帆シ、かなりや諸島ニ寄航シ、十一月二十七日小いすばにやノ殖民地ニ到着セルカ、此所ニ止リタルいすばにや人ハ皆土人ニ殺サレ一人ノ生存スル者モナカリキ、ころんぶすハ調査ノ末其地ノ酋長等ノ所爲ナルヲ知リテ之ヲ懲罰シ、新ニいすばにや (Isabella) 城ヲ築キ尋テ探檢ノ途ニ上リ、千四百九十四年三月ニハしばち (Cibao) ニ至リ五十六人ノ移民ヲ此地ニ置ケリ、始メしばねノ名ヲ聞キテまるこぼろノじばんぐ即チ日本ナラント思ヒシカ探檢ノ末誤レルコトヲ發見セリころんぶすハ死ニ至ルマテ新發見地ヲあじやノ一部ナリト考ヘタリ、しばねヨリころんぶすハじやまいか島 (Jamaica) ニ渡リ千四百九十六年三月いすばにや歸航ノ途ニ就キ六月十一

日かぢすニ着セリ、千四百九十八年五月三十日ころんぶすハさん、るかる港 (San Juan) ヲ發シテ第三回ノ渡航ヲナセルカ、此度ハ船三隻ヲかなりや諸島ヨリはいちニ直航セシメ、己ハ南航シテけいぶ、べるで諸島ニ至リ、更ラニ西航シテ南米ノありのこ (Orinoco) 河口ニ出テ此所ヨリはいちニ向ヘリ、同所ニ於テハ彼ノ不在中ニ移民ノ間ニ不和生シ其ノ着スルニ及ンテモ命令ニ從ハサルモノアリ終ニころんぶすノ處置ニ關シ本國政府ニ稟議シタレハ、政府ハふらんしすこ、て、ぼばぢりや (Francisco de Bobadilla) ニ全權ヲ委任シ、千四百九十九年彼地ニ派遣セリぼばぢりや著任スルニ及ンテ叛徒ノ言ニ聽キころんぶすノ財産ヲ沒收シ之ヲ縛シテ本國ニ送還セリ、ころんぶすハ千五百年十一月かぢすニ到着セルカ人民ハ此不名譽ナル待遇ヲ見テ大ニ激昂セルヲ以テ著後間モナク縛ヲ解カレ十二月十七日ぐらなだニ於テ國王ニ謁見シ其財産ヲ還附シ從前ノ如ク新發見地ノ收入ヲ與フルノ命ヲ傳ヘラレ、ぼばぢりやハ處分ヲ誤リタル爲メニ召還セラル、コト、ナレリ、千五百二年二月十三日どん、にこらす、で、ちばんど (Don Nicolas de Ovando) 更代ノ爲メ出發シ四月十五日任地ニ著セリ、此時同行セル移民二千五百



人ニシテ新地ノ土人ヲ強迫シテ就職セシムルノ弊ヲ矯正セシカ爲メいすばにや及ヒあふりかヨリ黒奴ヲ伴ヘリ、是レ實ニ米國ニ黒奴ヲ輸入スルノ初メニシテ後日奴隷賣買ノ起因ヲナセルモノナリ、  
 ころんぶすハ再ヒ自由ノ身トナリタレハ従前ヨリモ更ニ西方ニ航海シテ印度ニ到着セント欲シ自ラ小船四隻ヲ艦装シ、一千五百二年五月九日かぢす港ヲ出帆シ六月二十九日はいちノ首府さんとどみんご(Santo Domingo)ニ着セルカ上陸ヲ拒マレタリ是ニ於テ直ニ西航セントセルカ、暴風ノ微アルヲ以テ暫ク同島ノ沖ニ碇泊セリ、此時いすばにやニ歸航セントスル二十四隻ノ艦隊アリ、ころんぶすノ警告ヲ用ヒス出帆セシニ、途中ニ於テ果シテ非常ナル暴風ニ遭遇シ、爲メニ二十隻ハ沈没ノ不幸ニ陥リ、他ハ何レモ多少ノ害ヲ被リ、航海ヲ繼續シ得タルモノハ僅ニ一隻ニ過キサリキ、沈没船ノ乗員中ニハ曩ニころんぶすニ繩目ノ恥辱ヲ與ヘタルばぢりや及ヒころんぶす反對派ノ首領ナルるだん(Roldan)アリ何レモ其生命ヲ失ヒ、又ころんぶすニ還附スヘキ沒收品モ亦此沈没船ニ積込アリシト云フ、

ころんぶすハ風波ノ靜マルヲ持チ七月十四日はいち島ヲ離レ豫テ計畫セシ如ク西航シテ中央あめりかノほんどらす灣(Honduras)ニ進ミ同名ノ岬ニ上陸シ、すばにや王ノ名ニヨリテ之ヲ占領セリ此所ニ居リシ頃始メテゆかたん(Yucatán)ノ商人カ獨木船ニ乘リテ來レルニ遇ヒ尙ホ北方ニ陸地アルコトヲ確メタリ、而シテ海岸ニ沿ヒテ彌々南航シ十一月二日ぶゑるとべりよ(Puerto Bello)ニ着シ此所ニテ一隻ノ船ヲ失ヘリ、其所ヨリ引返シテ千五百三年二月べらぐあ(Veragua)ニ到リ上陸シテ其地ノ黄金ニ富メルコトヲ發見シ殖民ヲ留メントセシモ、土人ノ襲撃ヲ受ケ爲メニ尠カラサル損害ヲ被リ剩ヘ船一隻ヲ燒カレ辛ウシテ此所ヲ遁レ六月末じやまいか島ニ着セリ、此航海ノ途中暴風ニ遇ヒ殘レル二隻ノ船ハ大破シ復タ此地ヲ去ルコト能ハサルニ至レリ、然ルニ船員ノ一人ぢねごめんです(Diego Mendez)ハ大膽ニモ土人ノ獨木船ニ乘リ大海ヲ渡リテはいちニ着シ政府ニ救助ヲ請ヘリ、此間ニころんぶすハ部下ノ叛徒ト戦ヒ又土人ノ襲撃ニ當リ非常ニ困難ノ地位ニ陥レリ、はいちヨリハ船ヲ出シ一行ノ困難ノ狀ヲ視察セシメタルカ容易ニ之ヲ救助セサリシカハ、めんですハ一隻ノ船ヲ購ヒテ千五百



四年六月下旬じやまいかニ歸リ、ころんぶす等ヲ救ヒ、八月十八日はいちニ着シ航海ノ準備ヲ整ヘタル後九月十二日本國ニ向ツテ出帆シテ十一月初かぢすニ着セリ、

ころんぶすノ歸着後間モナク同年十一月二十六日女王いさべら崩シタレハ、ころんぶすハ其保護者ヲ失ヒ、政府ニ向ツテ要求セル所モ法廷ニ於テ頻リニ裁決ヲ遷延シ、ころんぶすハ其末年ヲ貧苦ノ間ニ送り、千五百六年五月二十一日ばりやどり(Valladolid)ノさんふらんしす<sup>San Juan</sup>派ノ僧院ニ死セリ、而シテ其遺骸ハ同院ニ葬ラレ、後せびりやニ移サレタルカ千五百三十六年又はいちノさんと、どみんごニ移シ、千七百九十五年ニハはいち佛領ニ歸シタレハくば島(Cuba)ノはばな(Havana)大寺院ニ移シ、該島カ北米合衆國ノ保護ニ歸スルニ及ヒ、更ニ之ヲせびりやノ大寺院ニ移スニ至レリ、

ころんぶすノ死シタル家ハ今尙ホばりやどり<sup>San Juan</sup>ニ在リ、其家ノ正面ノ壁ニハ白キ大理石ニ「ころんぶす此所ニ死セリ」(Aqui murió Colón)ト刻ミタルヲ掲ケアリ、ころんぶすノ末年ノ悲慘ナリシハ、いすばにや政府カ功臣ヲ待ツノ道ヲ得サリシ

ニヨルト雖モ彼モ、亦咎ム可キ點ナキニ非ス、抑モころんぶすカあめりか發見ノ大業ヲ成セルハ畢竟航海ノ經驗アリ、且ツ當時斯道ノ學者ノ説ヲ研究シタル結果ニシテ若シ永ク探檢者ヲ以テ任シタランニハ能ク終ヲ全ウスルコトヲ得タリシナランニ、彼ハ之ヲ以テ満足セス始メヨリ總督トナリ、永世貴族トナリ、發見地ノ收入ノ幾分ヲ獲得セントノ俗望ヲ出セシカ爲メ遂ニ敵ヲ得ルニ至レルナリ、元來ころんぶすハ學者的ノ人ニシテ政治家ニアラサルカ故ニ總督ト爲リテ新發見地ノ統治ニ當ルニ及ンテ忽チ失敗シ終ニ繩目ノ恥ヲ見ルニ至リシハ要スルニ自ラ招キタル災ニ異ナラス、然リト雖モころんぶすノ功名ハ一時遺忘セラレタルニ拘ハラズ近年ニ至リテ各所ニ其紀念碑ヲ建テ又紀念祭ヲ行フモノアルハ彼ノ眞價認メラル、ニ至レルナリ、

ころんぶすカあめりかヲ發見シタル後此方面ニ航海シ新地ノ探檢ニ從事セルモノ尠カラス、ふるれんすノ人あめりか<sup>Venezuela</sup>へすぶつち(Amerigo Vesputci)ハ千四百九十九年いすばにやヨリ南米ニ渡航シテべねずゑら(Venezuela)小へにす<sup>小へにす</sup>ヲ發見セリ、此地べにすニ似タル所アルヲ以テ斯ク名付ケタルナリ、此人後ニ新發見地ノ



地圖ヲ作りテ之ヲ世ニ公ニシタルハ此人ノ名ニヨリテあめりかト稱シ眞ノ發見者タルころんぶすノ名ヲ取ラサリハ奇ト云フヘシ、千五百十三年いすばにやノ人ばるぼあ(Diego Nuñez de Balboa)ばなまノ地峽(Isthmus of Panama)ヲ横斷シテ彼岸ニ至リ始メテ太平洋アルヲ知り九月二十二日かすちりや王國ノ旗ヲ携ヘ劔ヲ拔キテ海中ニ立チ占領ノ式ヲ擧ケタリ是ニ於テ時人ハころんぶすカ發見シタルハあじやニアラサル新大陸ニシテ新發見ノ大洋ヲ渡リテ始メテあじやニ至リ得ヘキコトニ思ヒ至リ先ツ兩洋ノ連絡ヲ探檢セントノ念ヲ起セリ而シテ千五百十五年十月ニハふあんぢあすてそりす(George de Soto)三隻ノ船ヲ率キテいすばにやノ南ニアルうるば港(Huelva)ヲ出テ南米ニ渡リ海岸ヲ下リテらぶらた(La Plata)ノ河口ニ至リシカ上陸ノ際土人ノ爲メニ殺害セラレシカハ殘レル船員ハ本國ニ引キ返セリ、そりすノ遺志ヲ繼キ兩洋ノ通路ヲ發見セルハまぜらん(Magellan, Fernão de Magalhães)ナリキまぜらんハばるとがるノ人ニシテ千四百八十年頃ニ生レ印度ニ航海セルコト數回アリ千五百十年まらつか攻撃ノ際ニモ之ニ加ハリ居タリ、後あ

るぶけるけト意見ヲ異ニセルタメ獨リ本國ニ還リ專ラ航海術及ヒ地理學ノ研究ヲナシ本國ニ於テハ萬事己ノ思フ如クナラサリシヨリ千五百十七年去ツテいすばにやノせびりやニ移リ同所ノ城代ノ女ヲ娶リ其推薦ニヨリテ翌年ばりやどりどニ行キ國王ニ世界周航ノ計畫ヲ提議シ千五百十八年三月二十二日國王ト右ニ關スル條約ヲ結ヘリ此時いすばにやニ駐在セル葡國公使ハ切リニ國王ニ説イテまぜらんノ意見ヲ用ヒサラシメントシ又まぜらんニ勸メテ故國ノ爲ニ盡サシメントシタリシカ何レモ其功ヲ奏セス國王ハ五隻ノ船ヲ備ヘテまぜらんノ指揮ニ附シ千五百十九年九月二十日さんるかる港ヲ出帆セシメタリ、まぜらんハけいぶべるでヨリぶらじる(Brazil)ノ海岸ニ渡リ十二月中旬りあて、じやねろ(Bio de Janeiro)ニ至リ翌年一月十日らぶらたノ河口ニ着シ徐々沿岸ヲ探檢シツ、南下シ三月末さんじゆりやん港(San Julian)ニ着セリ同所滯在中船員ノ中其命ニ從ハサルモノアリテ大ニ騷擾シタレハ終ニ主謀者ヲ殺シ叛徒ノ主タルモノヲ陸上ニ遺留シテ漸ク其處分ヲ了セリ此地方ヲばたごにや(Patagônia)ト稱セリばたごんとはいすばにや語ニテ大足ノ義ナリ此地ノ土人ノ足非常



ニ大ナリシヨリ斯ク名ツケタリト云フ、八月末同所ヲ發シ十月二十一日海峽ノ入口ニ至レリ、兩岸一千乃至二千メートルノ高山アリ、此間ヲ通過シテ海峽ノ廣所ニ出テ、暫時滯留シテ諸處ヲ探檢シタル後十一月二十八日海峽ヲ出テ其西端ノ岬ニけいぶてせあと(Cape Desgado、望メル岬)ノ稱ヲ附セリ、海峽ハ後ニ發見者ノ名ヲ取リテまぜらん海峽ト名ツケラレタリ、海峽ヲ出テタル後まぜらんハ海岸ニ沿ウテ北上セシカ、漸ク糧食不足ノ爲メ困難シ、乗組員ハ船中ノ獸皮ヲ嚙ミ鼠ヲ捕ヘテ食フニ至レリ、千五百二十一年二月十三日赤道ヲ越エ、其ヨリ西方ニ航シ三月六日らどろん諸島ニ到着シ、此所ヨリ南航シテふいりつびん諸島中ノせぶ(Nebu)ニ着キ此處ニ滯在シテ疲勞セル船員ヲ休養セリ、此滯在中ニ附近ノ小島まくたん(Mactan)ニ至リ遽ニ土人ニ襲ハレまぜらんハ負傷シテ終ニ此地ニ歿セリ、是レ實ニ四月二十七日ノコトニシテまぜらんハ齡僅ニ四十一歳ナリキ、其後他部落ノ土人等モ連リニ西人ニ抵抗シせぶノ王モ亦之ト戦ヒ、いすばにや船一隻ハ終ニ焚カレタリ、是ヨリ先航海中ニ於テ失ヒシモノアリ、殘ルハ只つりにた(Trinidad)及ヒびくとり(Victoria)ノ二隻ノミナリキ、コノ二隻ハ出帆シテみんだなを(Mindanao)ぼるねをヲ經テ十一月八日ちどーるニ着シ、十二月二十一日びくとりやハせばすちあんでる、かの(Sebastian del Cano)ノ指揮ノ下ニ同所ヲ發シテ歸途ニツケリ、其時乗組ノ歐洲人四十七人いんど人十三人ナリキ、同船ハ七月九日けいぶべるで島ニ到着シ船ノ日附ト島ノ日附ノ間ニ一日ノ差違アルヲ認メタリ、更ニ航海ヲ續ケ千五百二十二年九月六日遂ニさんるかる港ニ歸着セリ、此航海中船員ノ死亡セルモノ甚タ多ク生存セル歐洲人ノ數僅ニ十八人ナリシト云フ、つりにだどハ千五百二十二年四月六日ちどーるヲ出帆セルカ暴風ノ爲メニ中途ヨリ引返シてゐるなて島(Ternate)ニ寄港セリ、此時恰モぼるとがる艦隊來航シテ此船ヲ捕獲セリ乗組ノいすばにや人ハ暫ク同所ニ留メラレ後まらつかヨリいんどニ送還セラレ終ニ歐洲ニ歸着セルモノハ僅ニ三人ナリキ、初メまぜらんカいすばにやヨリ伴ヒシ人員ハ總數二百三十九人ナリシカ其中無事ニ世界ヲ周航シテ還リタルハ僅ニ前記ノ二十一人ニシテ其ノ率井タル船五隻ノ中只一隻ノミ本國ニ歸航スルコトヲ得タルナリ、當時航海ノ困難ナリシコトハ推シテ知ルヘシ。



いすばにや船世界周航ノ途次もろつか諸島中ノちどゝるニ貿易事務官ヲ留置シ、葡艦隊カ後ニ之ヲ捕ヘタルコトハ前ニ述ヘタルカ、右諸島ハとるてしりやすノ協約ニヨリテ西葡兩國何レニ屬スヘキカニ關シテ爭議ヲ生シ、千五百二十四年四月ヨリ五月ニ亘リテ兩國委員國境ナルをばす(Elvas)及ばだほす(Badajoz)ニ會合シテ之ヲ決セントセシカ終ニ效ヲ奏セス、いすばにやニ於テハ該諸島ハ自國ノ領ニ歸スヘキモノト看做シ、千五百二十五年七月ろあゝやノ(Garcia Jo-fre de Loayasa)ニ七隻ノ船ヲ與ヘ、まぜらんニ代リテ世界周航ヲ遂ケタるせばすちやんでる、かのヲ航海長トシテもろつか諸島ニ行カシメシカ、途中暴風ニ遭ヒ一隻ノミ、辛ウシテちどゝるニ到着セリ、斯ノ如ク兩國ノ爭議ハ永ク解ケサリシカ千五百二十九年四月二十二日終ニ分界線ヲもろつか諸島ノ東十七度ノ所ニ定メいすばにや政府ノ讓歩ニ對シぼるとがるハ三十五萬ぢゆかつとヲ支拂フコト、シ兩國ノ爭議茲ニ解決ヲ見ルニ至レリ。

#### 第四章 ぼるとがるノ東洋貿易

歐洲ニ於テハ東洋貿易ハモトベにすノ獨占スル所ナリシカ、あふりかヲ廻リテいんどニ至ルノ航路發見セラレ此地方ニ於ケルぼるとがるノ勢力漸ク盛ナルニ及ンテりすぼんハ東洋貿易ノ中心トナリ日ニ月ニ繁昌ヲ加ヘ千五百十二年ごあ全ク葡國ノ領ニ歸シ總督府此所ニ置カル、ニ及ヒテごあハ東洋ニ於ケルぼるとがるノ政治及ヒ商業ノ中心トナレリ、いんど地方ニ於ケルあらびや人ノ勢力ヲ削キまらつかヲ陷レ南洋貿易ノ基ヲ開キタル後ぼるとがる人ハ進ンテ支那ト通商センコトヲ計レリ、抑モぼるとがる人カ始メテ支那人ヲ見タルハまらつかニ來レル商人ニ會シタル時ニシテ、其性質頗ル溫和ニシテ商業ニ巧ナルハ他東洋人種ニ勝レリトナセリ、千五百十六年八月ふえるなん、べれす、だんどら、(Fernão Peres d'Andrade)ヲ遣シテ支那ニ行カシメタルカ、こんどる島(Pulo Condor)ヨリ引返ヘシ、其翌年七月再々まらつかヲ出テ、此度ハ媽港沖ノさんしやん(Sancian)ヲ經テ廣東ニ至リ通商ノ許可ヲ得シ爲メ支那皇帝ニ使者ヲ送ルノ許可ヲ求メタリ、然レトモ此地ハ氣候不良ナルヲ以テさんしやんニ立歸リテ返答ヲ待テリ、而シテ滞在申すかれにやす(Mascare-



Phas)ハ命ヲ受ケテ海岸ニ沿ウテ北航シ終ニ泉州ニ至レリ、だんどら一てハ滞在十四ヶ月ニ及ヒシカ政府ノ返答ヲ得ルコト能ハサリシカハ貿易事務所ヲさんしやんニ設立シとます、びれす(Thomé Pires)等ヲ事務員トシテ此所ニ留メ、千五百八十八年九月まらつかニ歸航セリ、びれすハ千五百二十年一月海路福建ニ行キノレヨリ南京ヲ經テ北京ニ到リ翌千五百二十一年一月皇帝ニ謁見シテ通商ノ許可ヲ求メシカ、是ヨリ先ぼるとがる艦隊再ヒさんしやんニ來リ此所ニ城ヲ設ケタルカ爲メ支那ニ對シテ敵意アルモノト思ハレ、又びんたん島(Bintang)ノ主ぼるとがる人ノ暴行ヲ支那皇帝ニ訴ヘタルカ爲メ皇帝ハ通商ノ許可ヲ與ヘス、剩へとます、びれすヲ捕ヘテ廣東ニ拘禁セシメ其戰艦ヲシテ千五百二十一年及ヒ千五百二十二年ニさんしやんニ來レル葡國艦隊ヲ攻撃セシメ之ニ大ナル損害ヲ加ヘタリぼるとがるノ支那貿易計畫ハ右ノ如ク失敗ニ歸シタリト雖モ葡船ハ尙ホ時々さんしやんニ來リ更ニ福建寧波等へ船ヲ出シテ貿易ヲ營メルカ其後支那政府ハ葡人ノ支那沿岸ニ來リ擾亂ヲ起スコトヲ厭ヒ媽港ヲ貿易港ト定メ、葡人ノ此所ニ定住シテ通商スルコトヲ許セリ、媽港ハ同所ノ祭神亞媽ノ名ヲ

取リテモト亞媽港ト稱シ歐人モ之ヲAmacantト呼ヒ日本ニテモ天川ト稱セリ今略シテMaaoト云ヒ支那ニテハ澳門ト稱ス

ぼるとがる人カ媽港ニ據リテ支那貿易ヲ營ムノ許可ヲ得タルハ千五百五十四年ナリシカ、其ノ未タ寧波附近ニ密航シツ、アリシ頃葡人ノ乘リ組メル一隻ノ船日本ニ來リ終ニ貿易ヲ開クニ至レリ、えうろつばノ舊記ニヨレハ葡船ノ始メテ日本ニ渡來セルハ千五百四十二年ニシテソノ顛末左ノ如シ

千五百四十二年ちよごで、ふれしたす(Diogo de Freytas)暹羅國ノドトラ(Dodra)ニ在リシ時、其船ノ乗組員三名支那行ノじやんく(Junk)ニ乘リテ逃レタリ、三人ノ名ヲあんといちだ、もた(Antonio da Mota)ふらんしすこ、せいもと(Francisco Zeimoto)あんといち、へしよと(Antonio Pexoto)ト呼ヘリ、北緯三十餘度ニ在ルリやむばー(Tiampo)寧波ヲ云フニ向ヒテ航行中船尾ヨリ強風ヲ受ケ陸地ヨリ吹キ離サレ、數日後東方ニ當リ凡ソ三十二度ノ處ニ一島ヲ認メタリ、日本ト稱シ、諸書ニ見エ其富ヲ以テ名アルしばんがす(Sipangas)即チしばんぐ(Zipangu)ナルカ如シ、此地又金銀其他ニ富メリあんといち、がるばん著新古發見錄一五五七年リ



すぼん刊行

歐洲人初來ノ事ニ關シテハ我邦ノ記録甚タ乏シキカ唯一ツ據ルヘキモノハ鹿兒島ノ僧大龍寺文之ノ文ヲ集メタル南浦文集中ノ鐵砲記ナリ、

天文十二年癸卯秋八月二十五丁酉基督紀元千五百四十年九月二十三日我西村小浦有一大船、不

知自何國來、船客百餘人、其形不類、其語不通、見者以爲奇怪矣、中至於二十七日己

亥、入船於赤尾木津、中賈胡之長有二人、一曰牟良叔舍、一曰喜利志多佗孟太、手携

一物、長二三尺、其爲體也、中通外直、而以重爲質、其中雖常通、其底要密塞、其傍有一

穴、通火之路也、中其爲其用也、入妙樂於其中、添以小團鉛、中而自其一穴放火、則莫

不立中矣、其發也如掣電之光、其鳴也如驚雷之轟、聞者莫不掩其耳矣、

右ノ文中ノ牟良叔舍ハふらんしすこノ音譯ニシテ喜利志多佗孟太ハきりしと

ぼん、だもたナラン、然ル時ハがるぼんノ記録ノ符合スル所ハ只ふらんしすこト

だもたト云フ名稱ノミニシテ年代ニ至リテモ一年ノ相違アリ、左レハぼるとが

る人カ初メテ日本ニ來リシ年代ハ未タ確定スルコト能ハサレトモ天文十一年

又ハ十二年即チ基督紀元千五百四十二年又ハ四十三年トスヘク、我邦ノ記録中

ニハコノ以前既ニ歐洲人ノ來レルモノアリトナスモノアレトモ其ハ全然誤ト

スヘシ、然ルニ此問題ニ付テ大ニ世ノ惑ヲ起セルハふえるなむ、めんです、びんと

(Fernam Mendez Pinto)ノ旅行記ナリ、此書ハ千六百十四年リすぼんニ於テ出版セ

ラレシモノナルカ、書中びんとカ東洋ノ諸處ヲ旅行シタル後支那船ニ乘リテ他

二人ノぼるとがる人ト共ニ支那ノ沿岸航海中暴風ニ遭ヒテ種子島ニ漂着セル

由ヲ詳記セリ、其記事頗ル曖昧ニシテびんとカ日本ニ着セシト云フ年代モ明白

ナラサレトモ文ノ關係ヨリ千五百四十五年ナルカ如シ、右年代其他ノ諸點ヨリ

推考スルニびんとノ記事ハ僞リニシテ三人ノ葡人カ日本ニ來リシ事實ニヨリ

自己ヲ其中ニ加ヘテ功名ヲ得ントセシモノニ似タリ、左レト其書ハ廣ク歐洲ニ

行ハレシタメ今日ニ至ルモ日本ニ來リシ最初ノ葡人ノ一人ハびんとナリト信

スルモノ多シ。

葡人ノ初メテ日本ニ來レル後ぼるとがる貿易ハ忽チ發達シ千五百四十五六年

頃ニハ我邦ニ來航セル葡船ノ數ハ同時ニ二三隻ヲ超ユルニ至レリ。

其頃鹿兒島ノ人ニシテ事情アリテ人ヲ殺シ寺院ニ遁レタルモノアリ、自己ノ罪



ヲ侮イ罪障消滅ノ方法ヲ薩摩ニ來レルぼるとがる人ニ謀リシニ此外人ハ基督  
 教ヲ傳ヘンカ爲メニぼるとがるヨリまらつかニ來レル宣教師ノ許ニ行クヘシ  
 ト告ケタレハ乃チ其紹介ヲ得テ山川ニ碇泊セル葡船ニ乘リテまらつかニ赴キ  
 シカ、其宣教師ハ布教ノ爲メ南洋ニ行キタル後ナリシカハ日本ニ歸ラントセシ  
 ニ途中暴風ニ遭ヒ吹戻サレテ支那沿岸ニ寄り曩キニ相談ヲ爲シタルぼるとが  
 る船長ニ出會ヒ其船ニ乘リテ再ヒまらつかニ行キ遂ニ其宣教師ニ會スルヲ得  
 タリ、此宣教師ハふらんしすこ<sup>ら</sup>びえる(Francis Xavier)ト云ヘル人ニシテ千五百  
 三十四年始メテ設立セラレ千五百四十年法王ノ認可ヲ得タル耶蘇會即チこん  
 ばにや、ぜ、て、せず、(Companhia de Jesus, Jesuits)ノ會員ニシテ、千五百四十二年以來  
 いんど地方ニ來リ布教ニ從事セリ、ざびえるハ日本ヨリ來レル求道者ノ談ヲ聽  
 キ之ニ勸メテごあニ行カシメ、同所ニ在ル耶蘇會ノ學林ニ入ラシメタリ、此人ノ  
 名ハ歐洲ノ史書ニハ通常あんじろー(Angero)トセルカ俗名やじろーニシテ世ヲ  
 脱カレテあんせいト云ヘル由當時ノぼるとがる文ノ教會史ニ見エタリ而シテ  
 基督教ヲ奉シテ後其學校ノ名ニヨリばうろ、で、さんた、ふ、えー(Paulo de Santa Fe)ト

云ヘリ、ざびえるハ此人ト共ニ千五百四十九年四月ごあヲ出テ同年八月十五日  
 鹿兒島ニ着シ其九月二十九日領主ニ會シ其許可ヲ得テ基督教ヲ傳ヘタリ、其後  
 平戸、山口、京都、豊後等ヲ巡歴シテ千五百五十一年九月豊後ニ來レル葡船ニ乘リ  
 テいんどニ歸レリ、ざびえるハ日本ニ於ケル基督教ノ開祖ニシテ其後年々多數  
 ノ宣教師渡來シ基督教ヲ傳ヘ九州一圓ハ勿論四國中國京阪ヨリ遠ク北海道ニ  
 到ル迄宣教師ノ行カサル所ナキニ至レリ。  
 ぼるとがる船ハ始メ種子島ニ來リシカ後鹿兒島、山川、坊津、豊後等ニ入港シ、千五  
 百五十年始メテ平戸ニ來リ、同五十三年再ヒ同港ニ入り爾來年々此所ニ來レリ、  
 原來葡船ノ碇泊ノ港ヲ定ムルハ布教ニ關係スル所尠カラス、ざびえるハ始メ鹿  
 兒島ニ於テ基督教ヲ説キシカ後同地ノ僧侶等宣教師ヲ妨害シタルカ故ニ平戸ニ  
 移リ之ト同時ニ葡船ハ薩摩ノ港ニ入ラスシテ平戸港ニ入レリ、千五百五十八年  
 平戸ノ僧侶基督教宣教師ノ妨害ヲナシ翌年宣教師等ハ爲メニ平戸ヨリ放逐セラ  
 ルハ、ニ及ヒ葡船ノ入港ヲ中止シ、千五百六十一年入港ノ葡船員ト平戸人ト同港  
 ニ於テ衝突シ船長以下數人ノ葡人殺サレシニヨリ千五百六十二年ニハ葡船ハ



横瀬浦ニ入り爾後二年間此所ニ來レリ然レトモ海嘯ノ爲メ同港破壊シタレハ再ヒ平戸ニ入ルコト、ナレリ、此時ニハ平戸ノ領主モ布教ノ便宜ヲ與ヘ葡人ノ歡心ヲ得ルコトヲ計レリ、千五百七十年葡船始メテ長崎ニ入レルカ同港ノ便利ナルヲ認メ同七十一年以後ハ年々此所ニ入港シ終ニ大村家ヨリ之ヲ讓受ケ、ぼるとがる人カ日本ヨリ、放逐セラレ、迄其貿易港トナセリ。

長崎ハモト深江浦ト云ヒ大村領ノ小邑ナリシカ、元龜元年葡船入津シテ交易ノ場所ト定メタルヨリ諸方ノ商人此所ニ來リ、同地方ノモノハ皆一區ニ住ミ元龜二年ニハ島原町大村町平戸町横瀬浦町等五六町ヲナセリ、其後ぼるとがるノ商人ノ來住スルモノ漸ク多ク、基督教ノ寺院建立セラレ、宣教師等モ此所ニ其本部ヲ置キ、終ニ長崎ノ地ヲ讓リ受ケテ寺領トナシ、又防備ヲ講スルニ至レリ、天正十六年秀吉九州ヲ鎮撫セル後、基督教徒ノ暴狀ヲ怒リ長崎ヲ公領トナシ鍋島飛騨守ヲシテ之ヲ治メシメ、文祿元年寺澤志摩守ヲ長崎奉行ニ任シ、爾來長崎ハ奉行所ノ管轄ニ屬セリ、此時代ニ於テハ長崎ノ人口大ニ増加シ山野ヲ開キ海ヲ埋メテ家屋ヲ築キ町數モ二十三ニ達セリ、其頃媽港ヨリハ毎年一隻ノ大船ヲ長崎ニ

送ルヲ定例トシ、外ニ小船及ヒじやんくノ來航スルコトアリ、唐船モ亦多ク入港シ、何レモ滞在ノ期五六個月ニ及ヒタレハ、其間外國人ノ長崎ニ在ルモノ數百ニ上リ、其需用スル所ノ支那西洋ノ雜貨ハ皆同所ニ於テ製造販賣セラレ宛然今日ノ外人居留地ノ體ヲナセリ、隨ツテ長崎ハ外國文明ノ中心トナリ其影響ヲ諸方ニ及ホセリ。

ぼるとがる人日本ト交通スルニ及ヒ媽港ハ支那及ヒ日本貿易ノ中心トナリテ大ニ繁昌シ、ごあ亦葡領いんど政廳ノ所在地トシテ盛ナル市トナリシカ、東洋貿易ノ爲メ最モ利シタルハリスぼんナリ、支那いんどノ木綿及ヒ絹織物、南洋ノ香料、其他東洋ノ珍奇有用ノ貨物ハ皆此所ニ集リ、英蘭獨伊諸邦ノ商賈ハ競フテ東洋貨物ヲ仕入レテ其本國ニ持歸リ、リスぼんハ世界ノ貿易市場トナリ忽チ歐洲第一ノ富市トナレリ。

當時ノ船ハ皆帆前船ニシテ定期ノ風ヲ利用シテ航海セシモノナレハ、東洋航路ノ葡船ハ毎年四月リスぼんヲ出テ九月又ハ十月頃ごあニ着キ、十二月乃至一月ニごあ又ハこちんヨリ歸航ノ途ニ上リ、リスぼんニ着スルハ六七月ノ交ナリキ、



支那方面ニ來ル船ハ毎年四月ごあ若クハこちんヲ出テ、六月媽港ニ着シ、日本ニ來ルモノハ六月媽港ヲ出テ、其航海ニ要スル日數ハ通常二十日内外ニシテ時ニ四十日ヲ要シタルコトアリキ、而シテ日本ヲ去ルニハ十月ヨリ三月ニ亘リテ吹ケル東北ノ風ヲ利用シテ航海スルモノナレハ、其滞在期間ハ殆ト半年ナリキ。』  
 ぼるとがる人カ我邦ニ輸入セル商品中主要ナルハ歐洲産ノ織物、硝子器及ヒ革、いんど地方ノ織物、南洋ノ香料、支那ノ生絲及絹織物等ニシテ、其日本ニ於テ購ヒタルハ主トシテ金銀銅ニシテ、蒔繪ノ器具、屏風及ヒ武器、米麥乾肉干魚等又少シク輸出セラレタリ、今日ぼるとがるノ字書ニびよん (Bionbo 屏風) かな (Catana 刀) かなねあゝる (Catanear 刀ニテ打ッ) かななだ (Catana 刀ノ一撃等ノ語アルハソノ一證ナリ。

ぼるとがる人ノ始メテ日本ニ來レル頃ハ我カ文化未タ幼稚ナリシカ故ニ我カ輸出ニ對スル彼ノ輸入ノ比例甚タ多ク又輸入品ノ珍奇ナルカ故ニ其名稱モ亦ぼるとがるヨリ傳ハリ今日マテ用ヒラル、モノ尠カラス、今ソノ主タルモノヲ舉クヘシ

羅紗 Raixa らしや

金巾 Canequim かねきん

天鵞絨 Velludo べるど

棧留縞 São Thoné んとめー

いんど東海岸ノ地名ニシテ同所ノ産ナ

ルカ故ニ此名アリ

辨柄縞 Bengala べんがら

いんどべんがる産ノ織物ナリ

あまかわ珊瑚 媽港 (Macao) モト亞媽港

我邦ニテハ天川ト云ヘリ、同所産ノ珊瑚

ナリ

羅脊板 Paxeita らせいた 羅紗ノ粗悪ナ

ルモノナリ

更紗 Saraga さらが

西洋商業史第四章一ぼるとがるノ東洋貿易

もーる Mogor もぐる 國産ノ織物

茶字縞 Chaul ちやうる いんどノ西海岸

ニアル同名ノ市ノ産ナリ

はるしや皮 Persia べるしやノ革ナリ

印傳 India さんぢやノ革ナリ

合羽 Capa かば

輕袷 Calção かるせん 短キばツち様ノ

モノナリ

襦袢 Gibão じばん

玻璃 Vidro びーどろ

石鹼 Sabão さばん

槽底羅 Castella かすてら 即チいすばにや

ノ菓子トニヒシヨリ其名トナレリ

壽星桃 Amendoa あめんどう



歌留多 Carta かるた

太平簫 <sup>チャルム</sup> Charmela ちやるめら

烟草 Tabaco たばこ

卸 Botão ぼたん

莫大小 <sup>メ、ヤス</sup> Meias めいやす 靴足袋ト云フ語ヨ

リ同様ノ編ミタルモノ、稱トナレリ

玻璃瓶 Frasco ふらすこ

麵包 Pão ぱん

金米糖 Confeitos こんふえいとす

此ノ如ク織物、器具、食料品等ノぼるとがるノ名稱及ヒ其ノ産地ノ名稱ヲ存スルモノ少ナカラサルヲ見テモ、當時葡人カ盛ニ我カ邦ト通商貿易セシ一斑ヲ知ルニ足ルヘシ。ぼるとがる人ハ日本ニ來リテ貿易セシノミナラス又基督教ノ傳道ニ大ニ力ヲ盡シざびえる渡來ノ時ヨリ宗教書ノ翻譯ニ努メソノ用語中翻譯ニ困難ナリシ

モノハ多ク原語ノ儘用ヒタリ。

デウス 又天主、天有主、大字須、傳字須ト

セリ原語 Deus であす、神ナリ

キリシタン 又鬼理志丹、切志丹、吉利支

丹トモ書ケリ原語 Christão くりすたん、

基督教徒ナリ

イルマン 又伊留滿ト書ケリ原語 Irmão、

ゐるまん法兄弟ナリ

エケレシヤ 又エキリン寺トセリ原語

Ecclesia えくれしや、教會ナリ、

當時ノ日本語基督教書類ニハ右ノ如キ原語少ナカラス見ユルカ、成ルヘク日本人ノ發音ニ便ナルヲ目的トシ中ニハ原語ノ發音ニ多少ノ變化ヲ加ヘタルモアリ。

外國交通ノ盛ニシテ外國語ノ漸ク廣ク行ハレタルニ連レテ羅馬字ノ印形ヲ用

ボロ Bolo ぼろ

浮石糖 <sup>カラム</sup> Caramelo からめる

糖菓 <sup>マメル</sup> Marmelo みるめろ

カンテラ Candela がんてしや

端艇 <sup>バツアラ</sup> Bateira ばてしら

南瓜 <sup>ポ、アラ</sup> Abobora あぼぶら

朱欒 <sup>ザ、ボン</sup> Zambora ちんぼあ

金糸雀 かなりや (Canaria) 島ノ産ナレハ此

名アリ

キリスト 又切子人、キリ人、貴理師度ト

モ書ケリ原語 Christo くりすと、基督

ナリ

バテレン 又伴天連、伴てれ、ナト書ケリ

原語 Padre ぱーとれ、師父ナリ

インベル野 原語 Inferno さんべるノ地

獄ナリ

パライン 又波羅夷會、原語 Paraiso ぱら

いと、天堂ナリ



ロシモノアリ、ソノ今日ニ傳ハレルモノヲ舉クレハ

大友宗麟 ハ其教名ふらんしすこニヨリ FRCO. ト刻ミタル印ヲ用ヒ

黒川如水 ハしめちん如水 (Simeon Josui)

細川忠興 ハ Fadanoguni ノ印ヲ用ヒタリ。

又花押ニ羅馬字ヲ入レテ書セシモノモアリキ、何レモ泰西ノ文明ニ心醉シ基督  
教ヲ信奉スル徒ノ所爲ナリ。

ぼるとがる交通ノ結果ハ我カ衣食住ノ上ニ改良進歩ヲ來シ、宗教ニ關スル新思  
想ヲ輸入シタルノミナラス、他ノ方面ニモ亦其影響尠カラサリキ。

醫術 宣教師中醫術ノ知識アルモノ宣教ノ傍治療ニ從事シ、諸所ニ病院ヲ設ケ  
テ布教ノ一助トナセリ、るいす、あるめいだ (Luís Almeida) ハ其一人ニシテ、氏ハ始  
メ商人トシテ日本ニ來リシカ、半途耶蘇會員トナリ、モト醫術ヲ學ヒタルカ故ニ  
諸所ニ於テ治療ヲ爲シ、又其財産ヲ以テ豊後ノ府内即チ今ノ大分町ニ一ノ癩病  
院ヲ建設セリ、其後長崎、大阪、京都、廣嶋、江戸等ニモ亦癩病院創設セラレコレ迄人  
ノ忌避セル者ヲ治療シ、又一方ニハ心ノ慰メヲ計レリ、此外普通ノ病人ヲ收容ス

ル病院及ヒ老人、私生兒等ヲ養育スル所モ建テラレ當時ノ日本ノ醫師ニシテ最  
モ有名ナル者ノ内ニハ基督教ヲ信スルモノ尠ナカラサリキ。

其頃又藥園ヲ伊吹山長崎等ニ設ケコレ迄日本ニ無カリシ藥草ヲ栽培セリ。

軍事 上ニ於テハ種子島ニ於ケル小銃ノ製造ヲ始メトシ、漸次大砲ノ鑄造ヲモ  
日本ニ於テスルニ至リ、隨ツテ築城術亦變化セサルヘカラス、えうろつばノ影響  
ヲ受ケタルコト尠カラサリキ、永祿三年松永久秀志貴山城ヲ築キ、天正四年織田  
信長安土城ヲ築クニ當リテ天主閣ヲ設ケ大ニ西洋築城ノ法ヲ摸セルハ顯著ナ  
ル事實ナリ

演劇 ノ起因ニ付テモ亦外國ノ影響尠ナカラサリシカ如シ、歐洲ニ於テモ中世  
期ニハ書籍ノ數少ク、學問ハ僅少ナル僧侶間ニ局限セラレタレハ、基督教ヲ説ク  
ニ當リテモ基督ノ一代記ヲ演劇ニ仕組ミ僧侶等役者トナリテ之ヲ演セリ、之ヲ  
稱シテぱつしよん (Passion) 劇又ハみすてり (神秘 Mystery) 劇ト稱シ今日ノ歐洲  
劇モ其ノ漸次發達シタルモノナリ、我邦ニ於テモ宣教師等基督教ヲ傳フルニ當  
リ斯ノ如キ芝居ヲ演シタルコトアリ、我邦ノ演劇ノ始メト云ハル、阿國歌舞伎



ハ基督 傳來ノ後ニ起レルモノニシテ直接ニ宗教劇ヲ摸擬シタルモノニアラサルモ、尠カラサル影響ヲ受ケタルナラント思ハル

祭禮 宗教上ノ儀式ニモ歐洲ノ儀式ヲ採用セルモノ尠ナカラス、元來宗教ノ起因ハ人心ノ要求ニアルカ故ニ隨テ宗教思想儀式等ノ相似スルコトモ亦自然ノ勢ナルカ、祇園祭ニ出ツル山鉦ト殆ント同様ナルモノカ基督教ノ祭禮ニ出ツルハ甚タ不思議ナリト云ハサルヘカラス此ハ今日ニテハ僅ニいすばにやノ一部等ニ存スレトモ、昔ハ天主教國ニハ皆存在シ、基督復活祭即チ三月末ヨリ四月初ニ亘リテ行ハル、祭ノ際、基督まじりや又ハ十二門徒ノ像ヲ臺ニ載セテ市中ノ重ナル街々ヲ練リ歩ルケリ、之ヲぶろせつしよん (Procession) ト云フ、日本ニ於テモ長崎ノ如キ基督教ノ盛ナル市ニテハ同シクぶろせつしよんアリシコトハ舊記ニ見エタリ、祇園祭ノ出シ物ハ或ハ之ヲ摸倣シタルニハアラサルカ。

遊戲 ノ内ニモ亦葡人ヨリ習ヒ傳ヘタルモノ尠カラス、歌留多ノ如キハ其一例ニシテ當時ノ繪ニとらんぶヲ弄フ婦人ノ圖アルモノ多シ又ぼるとがる及いすばにやニハぎたら (Guitarra) ト云フ薩摩琵琶ニ似タル樂器アリ、琵琶歌ノ調子モ亦頗ル相似タリ、兩者ノ間ニ何カノ關係アラソ、

斯ノ如クぼるとがる交通ノ結果ハ其ノ及フ所頗ル廣ク、我カ文化ノ上ニ影響スル所甚タ大ナリキ。

### 第五章 いすばにやノ新發見地經營

新地發見後間モナクいすばにや政府ハはいちノさんとどみんど (Santo Domingo) ニ政廳ヲ置キテ新發見地ノ統治ニ當ラシメタルカ、千五百二年にこらすで、ればんど任地ニ着シテ移民間ノ紛擾ヲ鎮メタル後、先ツ小あんちれす (Lesser Antilles) ヲ征服シ、次イテふあんで、えすさべる (Juan de Esquivel) しやまいか島 (Jamaica) ヲ改メ取り、ばんせで、れあん (Ponce de León) ハ千五百十年ニぶえるとり (Puerto Rico) ヲ占領セリ。

くば (Cuba) ハころんぶす初航ノ時ニ發見シふあな (Juana) ト命名シ、其後近海航行ノ際該島ノ港灣ニ入レルモノ及ヒ其沿岸ヲ探見セルモノモアリシカ、占領ノ



實擧ケラレタルハ千五百十一年ナリ、此年ぢえごべらすけす (Diego Velasquez) 兵三百ヲ率キテはいちヲ出テ、まいし岬附近ヨリ上陸シ、はいちノ避難土人トくば島土人トノ連合軍ヲ攻メテ大ニ之ヲ敗リ、其首領ヲ焚殺セリ、其後更ニ西方ニ進ミ屢々土軍ト戦ヒテ之ヲ敗リ、千五百二十三年べらすけす死スルニ及ンテハ全島略ホ鎮定セリ。

ばなま (Panama) ハモトだりえん (Darien) ト稱セリ、千五百十年まるちん、ふえるなんです、で、えんしそ (Martin Fernandez de Enciso) 百五十人ノ一隊ヲ率キテはいち島ヲ發シだりえんノ海岸ニ上陸シ、此所ニ一市ヲ建設セリ、其後ばすこぬにえす、で、ばるぼあ (Vasco Nuñez de Balboa) 衆ノ推ス所トナリ、で、えんしそニ代リテ指揮官トナリ、土人ノ反抗ト天然ノ困難トヲ排シテ西進シ、千五百十三年九月二十六日終ニ大太平洋岸ニ達シ、又ばなま灣内ノ諸島ヲ探見シ、漸次附近各地ヲ征服シテ自ラ之ヲ支配セリ。

ぺどらりやす、で、あびら (Pedrarias de Avila) いますばにや政府ヨリ新殖民地ノ大守

ニ任セラレ、二千餘人ヲ二十餘隻ノ船ニ分載シテだりえんニ來リ、ばるぼあカ、此地方ヲ領シタルヲ不法ナリトシテ其部下ノ主タルモノト共ニ死刑ニ處セリ、然ル後ばなま市ヲ建設シ此地方ノ占領ヲ確實ニセリ。

めさしこ (Mexico) 千五百十七年ふらんしすこ、えるなんです、で、こるとば (Francisco Hernandez de Cordoba) ゆかたん半島 (Yucatan) ヲ發見シ上陸ヲ試ミタルカ土人ノ爲メニ撃退セラレ、翌年ふあんで、ぐりはるば (Juan de Grijalva) くばヨリ此地方ニ航シテ沿岸ヲ探見シ、千五百十九年くばノ太守べらすけすハえるなん、こるとす (Hernan Cortes) ヲ遣シテ之ヲ征服セシメタリ。

こるとすハ千四百八十五年いますばにやノ南部ニ生レ、早クヨリあめりかニ來リ、はいち及ヒくばノ征服ニモ加ハリ居タル人ナルカめさしこ征討ノ命ヲ受ケ、有志者ヲ募リ忽チ三百餘人ヲ得テくばノ首府さんちやご (Santiago) ヲ發シ、べらすけす、半途ヨリ之ヲ呼ヒ戻サントシタレトモ應セスシテ更ニ諸所ニテ有志者ヲ集メ十一隻ノ船ニ兵士五百八人砲十門馬十六匹ヲ搭載シテめさしこニ進航セリ、



而シテ千五百十九年四月二十一日さんふあんでうるあ(San Juan de Ulua)ノ島ニ着キ其對岸ニ上陸シテ此所ニべらくるす(Vera Cruz)ノ殖民地ヲ置キ、ソレヨリ進ンテ内地ニ入ラントセシ時、めきしこ皇帝ノ使者來リテ黄金ヲ與フルカ故ニ内地ニ侵入セザランコトヲ乞ヘリ、めきしこハ當時獨特ノ文明ヲ有シ、其富ハいばにや人ヲ驚カシムル程ナリキ、こるてすハ親シク皇帝もんですま(Montezuma)ニ會センコトヲ欲スル旨ヲ告ケテ其請ヲ容レス、且ツイすばにや人ノ武力ヲ示サシカ爲メニ大砲ヲ發シ又部下ノ兵士ヲシテ操練ヲナサシメタリ、めきしこノ使者歸レル後せんばありや(Cemipallia)ノ會長使者ヲ遣シこるてすト協力シテめきしこヲ討タンコトヲ申込メリ、こるてすハ偶像崇拜ト人ヲ犠牲トスルコトヲ止ムルコトヲ誓ハシメテ之ニ同意セリ、然ル後べらぐるすニ守備兵ヲ殘シ、千五百十九年八月十六日歩兵四百人騎兵十五人砲七門トせんばありや會長ノ出セル兵千三百人輸卒千人ヲ率キテめきしこニ向ツテ行進シ途中とらすから(Traxcala)ト云ヘル所ニ於テ土人ト衝突シ、非常ナル劇戰ノ後勝利ヲ得タリ、此戰ニ臨メル敵兵ノ數ハ八萬或ハ十萬ナリト云ヒ戰ハ九月二日ヨリ七日ニ至ル五日間ニ亘

レリ。

十一月八日こるてすハめきしこニ着セルカ、皇帝もんですまハ之ヲ市ノ入口ニ迎ヘ且ツ大ニ優待セリ、然レトモめきしこノ住民ハ總數三十萬アリ若シ敵意ヲ生シテいすばにや軍ヲ襲ハ、孤軍到底之ニ抗スルコト能ハス、若シもんですまヲ味方ノ手中ニ置カハ決シテ恐ル、ニ足ラスト思ヒ、其月十五日もんですま面會セルトキ彼ニ逼リテいすばにや軍ノ營内ニ移住セシメ之ヲ捕虜トセリ、めきしこ人民ハ之ヲ聞イテ非常ニ激昂シいすばにや軍ヲ襲ハントセリ、こるてすまもんですまニ説キめきしこノ重ナルモノ數人ヲ集メ、自ラいすばにや軍ニ降服シいすばにや王ヲ其君ト仰クコト、ナセルニヨリコレ迄納メタル貢ハいすばにや王ノ代官こるてすニ納メ又己ニ對スルト同シク彼ニ服従スヘシト云ハシメタレハ其時集マレルモノハこるてすニ對シテ降服ヲ誓ヘリ、是ニ於テこるてすハ兵ヲ用フルニ及ハスシテめきしこヲ征服セリ、是ヨリ先こるてすノめきしこニ來レル時くばノ大守ハこるてすノ出發ヲ止メントシタルニ拘ハラヌめきしこニ來レルカ故ニ太守ハばんふいろで、なるばえす(Panfilo de Narvaez)ニ歩兵



八百騎兵八十士人千人砲十二門ヲ興ヘテこるてすヲ討タシメタリ、なるばえすハ其命ヲ受ケ船十八隻ヲ率キテ千五百二十年四月二十三日ニうるあ港ニ着シベらくるすニ殘セルこるてすノ部下ニ對シテ降服ヲ勸メ、又密ニ人ヲ遣シ聯合シテこるてすヲ斃サンコトヲもんですニ説カシメタリ、こるてす之ヲ聞イテ部下ノ士ヲなるばえすノ許ニ遣ハシ平和ニ事ヲ結ハシコトヲ力メタレトモなるばえすハ之ニ應セサリシカハ、めさしこニ隊ノ一部ヲ殘シ僅カニ七十人ヲ率キテなるばえすノ軍ヲ迎撃セント決心セリ、進行ノ途中ベらくるすニ殘セル兵ト合シ總數二百五十人トナリシカ尙ホ平和ニ事ヲ納メント力メシモなるばえすハ自己ノ軍勢多クシテ勝利ヲ得ルコト必然ナリト思惟シ之ニ應セサリキ、是ニ於テこるてすハ五月二十五日夜大雨ニ乘シテ夜襲ヲナシ大ニ敵軍ヲ破リなるばえす軍ノ多數ハこるてすニ降レリ。

めさしこニ於テハペとろて、あるばらど(Pedro de Alvarado)留守軍ヲ指揮セシカ、土人ヲ虐殺セル爲メ土人激昂シテいすばにや軍ヲ襲ヘリ、こるてすハ此報ヲ聞キ千五百二十年六月二十四日急行シテめさしこニ入りシカ、再ヒ土人ノ襲フ所ト

ナリ多數ヲ相手トシテ頗ル窮迫シもんですニ説キめさしこ軍ノ面前ニ立チいすばにや軍ニ降服スルコトヲ勸メシメタリ、蓋シめさしこ人ハもんですニ神ノ如ク思ヒ居リシカ故ニ必ス之ニ服スルナラント思ヒシニ、めさしこ人ハもんですニ勸メニ應セサルノミナラスもんですニ甥ぐわちもしん(Quatinocin)先ツ彼ニ矢ヲ放チもんですニ其矢ニ當リテ負傷シ遂ニ治療ヲ辭シテ死セリ、是ニ於テこるてすハ永クめさしこニ留マルノ不利ナルヲ悟リ、七月一日ノ夜退去セントセシニ其路ヲ斷タレ、圍ヲ破ラントシテ部下ノ兵いすばにや人四百人土兵二千人ヲ失ヒシト云フ、尙ホめさしこヨリ海岸ニ行ク途中ニ於テモ屢々土人ノ攻撃ニ會シ更ニ其兵ヲ失フニ至レリ。

七月八日とんぱん(Otonpan)ノ原野ニ於テ敵兵二十萬餘ニ會セシカ、いすばにや人先ツ之ヲ襲ウテ大ニ破レリ、是ニ於テ少シク勢ヲ回復シ漸次いすばにや人ヲ集メ同年十二月歩兵五百五十人騎兵四十人砲九門ヲ集メ得テ之ニ又一萬ノ士兵ヲ加ヘ再ヒめさしこニ逆襲セリ、而シテ其翌年即チ千五百二十一年四月二十八日めさしこ湖水ノ上ニ於テ雙方ノ船戰アリこるてす軍ハ此際勝ヲ得進ン



テめさしこノ包圍攻撃ニ着手セリ、此時めさしこ軍ヲ指揮セルハ前記ノぐわちもしんニシテ、非常ナル勇氣ヲ以テ其城ヲ守リタレトモ、終ニ外壁ヲ破ラレ僅カニ城内ノ一區域ニ追ヒ籠メラレ千五百二十一年八月十三兩日ノ戦ニ於テ其軍ノ多數ハ死シ、死セサルモノハ捕虜トナリ、めさしこ城ハ遂ニ陥落セリぐわちもしんハ船ニ乗シテ遁レントセシカ亦縛ニ就キ種々虐待セラレタル後土人ヲ煽動シタリトノ嫌疑ヲ以テ殺サレタリ、めさしこ城ノ陥落ト共ニめさしこ帝國ハ滅亡シいすばにや人ハ其後容易ニ全國ヲ征服シ此所ヲのびすばにや(新しいすばにや)ト稱シめさしこヲ再建シテ都トナセリ、めさしこ征服ノ報いすばにやニ達スルニ及ヒ時ノ皇帝ちや一れす五世(Charles V.)ハ千五百二十二年十月十五日こるてすヲのびすばにやノ大守兼總指揮官兼大判官ニ任セリ

中央あめりか 前ニ述ヘタル如クばなま地方ニハ早クヨリいすばにや殖民  
地アリシカ、千五百十八年頃ヨリばなまヨリ漸次北部ニ探檢ヲ進メ終ニほんど  
らす(Honduras)マテ征服セリ、めさしこ平定後こるてすノ部下ノ將ちりつ(Oldi)

ハ千五百二十四年海路ほんどらすニ至リ、又あるばらど(Pedro de Alvarado)ハ陸路ぐわてまら(Guatemala)ニ赴キ、千五百二十四年十月ニハこるてす自ラめさしこヨリ南下シテぐわてまらニ至リ終ニ此地方ヲ平定セリ、千五百二十七年あるばらどハいすばにや國王ヨリぐわてまらノ總指揮官ニ任セラレぐわてまら市ニ政廳ヲ置キテ該地方ヲ治メ次イテ其勢力ヲこすたりか(Costa Rica)ニ及ホセリ

南あめりか ハころんぶす第三回航海ノ際ちりのこの河口ニ至レル時ニ始メテ發見セラレシカ其征服ハころんびやヲ以テ始メトセリ

ころんびや(Columbia) 千五百〇八年あるんそ、あへだ(Alonso Ojeda)ちえごて、にくるち(Diego de Nicuesa)ノ二人ころんびや地方ニ殖民スルノ許可ヲ得テ遠征隊ヲ組織シころんびやニ向ヒシカ、土人ノ頑強ナル抵抗ヲ受ケ兵ヲ失フコト多ク終ニ空シクじやまいかニ引返セリ



千五百二十五年ニ至リテろどりごてばすちだす(Rodrigo de Bastidas)四隻ノ船ヲ率キテはいちヨリ同地ニ渡リまぐだれな河(Magdalena)ノ口ニさんたまるた(Santa Marta)ノ殖民地ヲ設ケ千五百三十五年ふえるなんてすてるーご(Fernandez de Lugo)ころんびやノ長官ニ任セラレ多數ノ兵士ヲ引率シテ渡來シ此地方ノ征服ヲ成就セリ翌千五百三十六年其部下ノ士ひめねすてけさだ(Jimenez de Quesada)ニ兵士ヲ分與シテまぐだれな河ノ沿岸ヲ探檢セシメシカ非常ノ困難ヲ經テ遂ニぼごた(Bogota)ニ達シ翌年其附近ヲ征服シテ今日ノ首府ぼごた市ノ基礎ヲ置ケリ

べねずえら(Venezuela) あめりごべすぶつちカ始メテ發見セシコトハ前ニ既ニ述ヘタリ其後他ノいすばにや殖民地ヨリ屢々遠征隊ヲ出セシモ定マリタル殖民地ヲ設クルニ至ラス唯金銀ヲ奪ヒ又ハ土人ヲ捕ヘテ奴隷トシテ賣買スルニ過キサリキ千五百二十三年ニ至リテ始メテ小いすばにやヨリ此ノ如キ暴行著ノ取締ノ爲メかすてりよん(Castellon)ヲ派遣セシカ此人くまな(Oumana)ニ殖

民地ヲ置キ平和ノ民ノ移住ヲ計リ漸次此地方ノ開發ヲ企テタリ千五百二十七年ニハあんどぶるす(Ampues)ころ市(Coro)ヲ建テ又其近傍ヲ征服セント計リシカ當時ノいすばにや王ちやーるす五世ハどいつノウえるせる商會(Welsler)ニべねずえら拓植ノ權利ヲ讓リ渡セリ蓋シ此商會ハ當時歐洲ニ於テ最モ富有ナリシ商會ニシテちやーるす五世ニ對シ多額ノ債權ヲ有シタレハ終ニ左ノ條約ヲ結

ロベねずえらノ拓植ニ從事セリ  
一、うえるせる商會ハ四隻ノ船ヲ艦裝シいすばにや人三百人トどいつ人五十人トヲべねずえらニ渡航セシメ二年内ニ二ツノ町ト三ツノ要砦ヲ建設スルコト

一、いすばにや王ハまるかはな(Marcabana)トべら岬(Cape Vela)トノ間ノ地ヲ商會ニ附與シ、鑛山採掘稅ノ一部ヲ與ヘ、且ツ服從セサル土人ヲ捕ヘテ奴隷トナスコトヲ許スコト

商會ハ此約ニヨリあるふんげる(Ambrosius Alfinger)及ヒカスれる(Georg Seyler)ノ二人ヲべねずえらノ大守及ヒ副官トシテ派遣セシカ千五百二十八年ころ市ニ



到着シあむふえすヨリ政務ノ引繼ヲ受ケ先ツころ市附近及ヒまらかいぼ湖(Lake Maracaibo)ノ沿岸ヲ探檢シ、千五百三十年ニハ二百餘人ノ部下ヲ引率シテ更ニ深ク内地ニ侵入シ、遂ニ國境ヲ越エテころんびあ領内ニ進ミ未知ノ地ヲ世ニ紹介セシ所多カリシカ、到ル所非常ニ土人ヲ虐待シ某村ノ如キハ或ハ殺サレ或ハ逃亡シテ一人ノ殘ルモノナキニ至リ、又土人ヲ捕ヘ一條ノ繩ヲ以テ其頸ヲ縛シ、一人ノ繩ヲ解クニハ最初ノ人ヨリ次第ニ解カサルヘカラサル様ニシ、若シ途中疲勞シテ歩行スル能ハサルモノアレハ他人ノ妨害ナリトテ其首ヲ刎ヌルカ如キ殘忍ヲ行ヘリ、あるふいんげるハ斯ノ如クシテ内地ヲ廻リシコト三年ナリシカころ市ニ歸ル途中土人ト衝突シ交戦中ニ戰死セリ

其後太守ノ交替アリシモ殘虐ハ常ニ繰リ返ヘサレ爲メニ土人ノ反抗ノミナラスベねずえらノいすばにや人等ノ間ニモ亦反對起リ、遂ニ商會カ當初ノ契約ニヨリテ殖民地ヲ開キ城砦ヲ建設セサルヲ名義トシテ千五百四十六年特許ヲ取消シ、いすばにや政府自ラベねずえらノ政治ニ當ルコト、ナシ、ふあん、べれす、てとろーろ(Juan Perez de Tolosa)ヲ太守兼總指揮官トシテいすばにやヨリ派遣セ

リ其後諸方ニいすばにや人ノ殖民地續々生シ、中ニハ僅カニ五六百人ノいすばにや人一地方ニ殖民セシモノ中心トナリテ町ヲ生セシモ尠カラサリキ、千五百六十年ニハからかす地方ニ侵入シ終ニからかす市(Caracas)ヲ建設シ後此所ニ政廳ヲ置ケリ、而シテ此所ヨリ遠征隊并ニ殖民ヲ派遣シテ終ニ全國ニ及ヘリいすばにやノ南米殖民地中主トシテ殖民政策ニヨリテ征服セラレタルハ此地方ナリト云フ

ベねずえらノ未タラえるせる商會ノ領有タリシ頃ふえてるまん(Federman)トイフ人内地探檢隊ヲ出シころんびやノぼごたマテ進ミシカ其部下ノ一兵士ベどろ、りんびやす(Pedro Limpias)ころ市ニ歸リテ黄金ノ産額海岸ノ砂ノ如ク多キ地方ヲ發見セルコトヲ語リシカハ、千五百四十一年ラフェル(Felipe Uten)ハ此ノえる、どらど(Di Dorado 黄金ノ地)遠征ヲ企テ四年間内地ヲ跋渉セシカ遂ニ此地ニ至ル能ハサリキ、是レ固ヨリ無稽ノ物語ナレハ發見スルニ由ナキモ當時此地ニ至ルノ目的ヲ以テいすばにやヨリ南米ニ渡航シタルモノ無數ニシテえる、どらどハ又全歐洲ノ話題トナレリ。



べる一(Pernu)ノ征服、いすばにやノえさすとれまづら(Extremadura)ノ人ふら  
 んしすこびあるる(Francisco Pizarro)及ヒらまんちや(La Mancha)ノ人ぢゑごて、あ  
 るまぐろ(Diego de Almagro)ノ二人ニヨリテ成就セラレタリ、兩人ハ共ニ遠征隊ニ  
 加ハリテあめりかニ渡リ此所ニ於テ相識リテ親交アリシカ、太平洋發見後其沿  
 岸ノ新地ヲ探檢スルノ希望ヲ起シ、ゑるなんと、て、るけ(Hernando de Luján)トイフ  
 僧侶ノ助力ニヨリテ其資金ヲ調達シ且ツばなま(Panama)ノ太守ヨリ太平洋ヲ經  
 テ遠征ヲ試ムルノ許可ヲ得テ千五百二十五年びざるる先ツ一隻ノ小船ニ百人  
 ヲ載セテばなまヲ出帆セリ、あるまぐろハ續イテ六十人ノ部下ヲ率井テべる一  
 ニ至リシモ、當時恰カモ雨期ニシテ河水汎濫シ交通自由ナラサリシカ爲メ大困  
 難ヲ嘗メ、又土人ノ抵抗強硬ナリシカ故ニ遂ニばなまニ引キ返セリ、其ノ歸ルヤ  
 べる一地方文化ノ程度ヲ證スルニ足ルヘキ標本ヲ携ヘシト云フ、  
 當時べる一ノ文明ハめさしこノソレニ劣ラス皇帝いんか(Inca)ノ政令ハ北ハき  
 と一(Quito)ヨリ南ハちり(Chili)ノ南部ニ及ヒ道路驛傳ノ制整ヒ政治ノ組織工藝  
 ノ發達等見ルヘキモノ多カリシト云フ

ばなま歸着後太守ハべる一征服ヲ援クルコトヲ拒ミシカハ、びざるるハいすば  
 にやニ歸テ政府ニ乞ヒ、千五百二十九年七月二十六日びざるるハべる一太守兼  
 指總揮官ニ、るけハつんべす(Tumbes)ノ司教ニ、あるまぐろハべる一ニ於テ新ニ建  
 設セラレヘキ城砦ノ司令官ニ任セラレタリ、是ニ於テびざるるハ千五百三十年  
 一月せびるヲ發シテばなまニ到リ、翌年一月船三隻ニ歩兵百八十人騎兵二十七  
 人ヲ乗組マシメテべる一ニ渡リ、千五百三十二年六月びうら河(Piura)畔ニさん  
 みげる市(San Miguel)ヲ建設シ、同年九月ヨリ内地ニ進入シ十一月中旬かはまる  
 か市(Cajamarca)ニ達セリ、其間之ニ抵抗スルモノナカリシカ是レ全クいんかノ戰  
 略ニシテ、いすばにや兵同市ニ入ルヲ待テ兵三萬ヲ率キテ之ヲ壓殺セン計畫ナ  
 リシカ、びざるるハ敵ノ術中ニ陷レルヲ覺リ奇計ヲ案シテ其部下ニ騎兵三十人  
 ヲ附シ、いんかニ謁見ヲ求メシメ、びざるるカいすばにや皇帝ノ命ニヨリテ、べる  
 一ノ君主ト親交ヲ結フ爲ニ來レルヲ告ケ當時ノいんか、あたうあるば(Atahualpa)  
 ヲシテ翌日びざるるト會見スヘキコトヲ約セシメタリ、十一月十六日あたうあ  
 るばハ大兵ヲ率キテかはまるカノ中央ノ廣場ニ來リ、いすばにや人ノ來會スル



ヲ待テリ此時いすばにや人ハ一人ノ僧ヲ出シ通譯ヲ以テ基督ノ教義ヲ説キ基督教ヲ奉シいすばにや王ニ服従スヘキコトヲ説カシメタリ、あたうあるば之ヲ拒ミシカ之ヲ合圖ニ其附近ニ潜伏セシいすばにや人等銃ヲ放チ突撃シテ二千餘人ヲ殺シいんかヲ捕ヘタリ敵兵ハ其國王ヲ捕ヘラレタル爲メ如何トモスル能ハスシテ退却セリあたうあるばハ多額ノ賠償金ヲ出スヲ約シテ釋放ヲ求メ部下ニ命シテ直チニ之ヲびざるニ交附セシカ終ニ釋サレス千五百三十三年八月土人ヲ説キテいすばにや人ニ抗セシメントセリトノ冤罪ヲ蒙リテ殺サレタリ、爾後べるニ於テハ四方ニ獨立ノ王起リ互ニ攻伐ヲ事トセシカハいすばにや人ハ却テ征服ノ便ヲ得千五百三十三年びざるハくずコ(Quico)地方ヲ征服シテ九月くずコ市ニ入ルコトヲ得タリ、同年十二月せばすちやんで、べなるかホー(Sebastian de Benalcazar)ハくわどー(Quenador)ニ侵入シきとー(Quito)地方ヲ平タキとー市ヲ占領セリ、

あるばらどハくわてまらノ太守ニ任セラレ着任セル後間モナク五百ノいすばにや兵及ヒ多數ノ土人ヲ率キテ千五百三十四年きとーニ上陸セシカ、此地ノ寒

氣嚴シクシテ雪多キト地震ノ屢ヤアルトニ驚キ且ツびざるカ其領内ニ侵入スルコトニ對シテ抗議セルカ爲メ其兵士ヲびざるニ讓リテ引キ返セリ是ニ於テべるハびざる及ヒあるまぐるノ專領スル所トナリシカ、いすばにや王ハあるまぐるヲちれー(Onite)ノ太守ニ任セシヲ以テ彼ハ千五百三十五年七月いすばにや兵百五十人及ヒ多數ノ土人ヲ率キテくずコヲ出發シちれーニ向ヘリ、道ヲ山間ニ取り途上非常ナル艱難ヲ嘗メシカ遂ニちれーニ入ルヲ得テ其地方ノ風土ヲ視察シ歸路あたかま(Atacama)ノ砂漠ヲ經テくずコニ歸レリ、是ヨリ先キびざるノ弟えるなんど(Hernando)くずコヲ守レルカ土人蜂起シテ之ヲ圍ミいすばにや軍始ント危殆ノ狀ニ陥レリ恰モ好シあるまぐる歸來シテ其圍ヲ解キシカ終ニ自ラくずコヲ占領シテえるなんど、びざるヲ擒トセリ、是レ實ニ千五百三十七年四月ノ事ナリ、ふらんしすこ、びざるハ首府りま(Lima)ニ於テ之ヲ聞キ大兵ヲ率キテあるまぐるト戰ヒ大ニ之ヲ敗リ終ニ捕ヘテ之ヲ殺シベるハびざる一人ノ治下ニ歸スルニ至レリ、是ニ於テ更ニ東方ノ征服ヲ企テ其弟ごんぶる、びざる(Gonzalo Pizarro)ヲ長トシ千五百四十年ノ初、遠征ノ途



ニ就カシメタリ、此遠征隊ハ非常ナル困難ヲ嘗メツ、えくわどゝる地方ノ征服ニ從事シ二年半ノ日月ヲ經テ再ヒきと一ニ歸來セリ、ゴンザロノ遠征中リまニ於テハ先ニ刑死セシあるまぐるノ黨與びざるヲ暗殺シあるまぐるノ一子ヲ擁立セリ是レ千五百四十一年六月十六日ニシテびざるハ齡正ニ六十五歳ナリキ。

ふらんしすこびざるノ暗殺後べる一ノ政治ハ大ニ亂レシカいすばにや王ハばかて、かすとろ(Vaca de Castro)ヲ太守ニ任シ、其着任後千五百四十二年九月十六日あるまぐるノ軍ト戦ヒ激戦ノ後あるまぐるヲ捕ヘテ之ヲ殺セリ

千五百四十三年いすばにや政府ハべる一總督(Viceroy)ヲ置キ南米全部ヲ其治下ニ屬セシメシカ最初ノ總督ふらんこぬにぬすてへら(Blanco Nuñez de Vela)着任後ノ大事件ハゴンザロ、びざるノ反亂ナリキ、叛徒ノ勢甚タ盛ニシテ千五百四十六年ニハ總督モ敗死スルニ至リびざるノ部下ハ彼ニ勸メテ前べる一皇帝即チいんかノ女ト結婚シテいすばにや政府ニ背キ獨立ノ王國ヲ建設セシメント

セシカ彼ハ躊躇シテ未タ決セサルニ當リいすばにや國王ハべどろて、ら、がすか(Pedro de la Gasca)ヲ遣シテ鎮定ノ任ニ當ラシメ其計ニヨリテびざるノ部下ニ漸ク離散シびざるノハ決戦ニ敗レテ捕ヘラレ千五百四十八年四月斬首セラレタ

リて、ら、がすかハびざるノ部下ヲ赦シ心ヲ政治ニ用ヒタレハ此地方漸ク平和ニ歸シ彼ハ千五百五十年恙ナクいすばにやニ歸レリ、其後數代ノ總督ノ下ニペ

る一ハ次第ニ繁昌シびざるノ時代ニハ殖民ノ數六千ニ過キサリシカ本國及他殖民地ヨリ移住スルモノ多ク其數ハ急劇ニ増加セリ。

あるぜんちん(Argentine)　いすばにや人カ此地方ニ來リシハ千五百十六年をりす(Solis)カ、ら、ぶらた河(Rio de la Plata)ヲ探檢セシヲ初メトス、其後千五百二十

年までせるらんモ亦此地ヲ過キシカ、實際征服ニ着手セシハ千五百二十六年ニシテ、是年遠征隊いすばにやヨリ出發シテ此地ニ來リうるぐわい(Druguay)ばらな

(Parana)ばらぐわい(Paraguay)ノ諸川ヲ遡リテ沿岸ノ地方ヲ探檢シ終ニ一隊ノ殖民ヲ殘シテ歸國セリ、然ルニ此地方ノ土人ノ酋長殖民中ノ一婦人ニ懸想シ之ヲ奪ハント欲シテ不意ニ殖民地ヲ襲ヒ殆ト其全部ヲ屠レリ、千五百三十四年かぢ



すノ人べどろ、で、めんどーヨ(Pedro de Mendoza)ちや、れす五世ヨリあるぜんちん  
統治ノ權ヲ與ヘラレ、自ラ二千三百ノいすばにや義勇兵ヲ募リテ該地ニ渡リ、ら  
ぶらた河口ニぶねのす、あられす市(Buenos Ayres)ヲ建テ進ンテ内地ニ入りばらぐ  
わい河ヲ遡リテ千五百三十六年あすんしをん市(Asuncion)ヲ創建シ、其部下ヲシ  
テ内地ヲ探檢セシメ終ニペルノ境界ニ至レリ、彼ハ其後歸國ノ途ニ上リ、船中  
ニテ死セリ、千五百三十八年ノ末いら、(Trala)其後ヲ承クルニ及ヒめんどーゾノ  
引率セル兵士ノ殘レルハ僅ニ六百人ニ過キサリシカ土人トノ調和ヲ計リ此地  
方ニ於ケルいすばにやノ殖民事業ニ大發展ヲ與ヘタリ

千五百四十年あるばる、ぬにえす(Alvar Nuñez)此地方ノ長官ニ任セラレ更ニ北方  
ノ探檢ニ從事セシカ其部下ノ反抗ニ逢ヒ遂ニ其職ヲいら、ニ讓レリ、千五百四  
十七年いら、ハばらぐわい河ヲ遡リテペルノ堺ニ達セリ、此行諸人ノ艱苦甚  
シク終ニ黨ヲ結ンテいら、ニ迫リ職ヲ辭セシメシカいら、ハ後其勢力ヲ回復  
シ千五百五十五年いすばにや王ヨリ長官ニ任セラレ後二年死スルニ至ルマテ  
此職ニ居レリ、其後此地方ノ殖民ハ次第ニ増加シ、歐洲ヨリ輸入セシ畜類モ亦至

大ノ速度ヲ以テ繁殖シテ今日ノ盛大ナル牧畜業ノ基ヲ開キ、又宣教師ノ渡來ス  
ル、モノ多カリシ爲メ文化ノ程度大ニ進歩セリ、千五百八十年ニハ都ヲあすんし  
よんヨリぶえのす、あられすニ移シ、後ニハあるぜんちん、ばらぐわい、うるぐわい  
等ヲ併セタル總督領ノ都トナセリ

ちれー(Chile)いすばにや人カ南米ニ於テ最後ニ征服セシハちれーナリ、千五  
百三十五年あるまぐろカちれーノ太守ニ任セラレテペルノヨリ該地方ニ赴キ  
シ事ハ前ニ既ニ之ヲ述ヘタルカちれー征服ノ功ヲ遂ケタルハべどろ、で、ばるぢ  
びや(Pedro de Valdivia)ナリキ、ばるぢびやハ千五百四十年ノ初メペルノヲ發シ陸  
路南ニ進ミ、砂漠荒蕪ノ地ヲ過キ五ヶ月ノ後始テ豊饒ナルまぼちよ(Mapocho)ノ  
地ニ着シ千五百四十一年さんちやひ(Santiago)市ヲ創建セリ、此市ハ後ニ南米ニ於  
ケル最大ノ都會トナレリ、ばるぢびやハ此所ニ根據ヲ定メ漸次ちれーノ征服ヲ  
企テ、又海路ペルノトノ連絡ヲ計ランカ爲メ自ラあこんかぐわ(Aconcagua)河口ニ  
造船ノ監督ヲナセシカ、此地方ニ金銀少キ爲メ其部下ノ内ペルノニ歸ランコト



ヲ願フモノ尠カラス、遂ニばるぢびや暗殺ノ陰謀ヲ企ツルニ至レリ、ばるぢびやハ之ヲ探知シテ直ニさんちやゴニ歸リ主謀者ヲ殺シテ其計畫ヲ未發ニ防ケリ、然ルニ其ノ不在ニ乘シテ土人等あこんかぐわノいすばにや人ヲ殺シ、四方ノ土人之ヲ合圖ニ一時ニ蜂起セリ、ばるぢびやハ之ヲ鎮撫センカ爲メ兵ノ一半ヲ率キテ南進セシカ土人さんちやゴヲ襲ヒテ殆ント全部ヲ燒キ其守備危殆ニ迫リシヲ聞キ引返シテ僅ニ圍ヲ解クコトヲ得タリ、土人ノ勢斯ノ如ク強大ナリシカ故ニばるぢびやハ使ヲ遣シテべるヨリ援兵ヲ請ヒ其到ルニ及ヒさんちやゴヲ再建シ、又北方ニらせれーな(La Serena)ノ市ヲ開ケリ、其後ばるぢびや自ラべる一ニ還リ千五百四十九年新募ノ兵ヲ率キテ歸來シ、南征シテびよびよ河(Biobio)ニ到リ此所ニこんせぶしよん市(Concepcion)ヲ建テタリ、同所滯在中對岸あらうこ(Arauco)地方ノ土人ノ襲撃ヲ受ケテ激戦ノ後チ之ヲ退ケ更ニ進ミテ河南ノ地ニ至リ、あんどる(Angol)ばるぢびや(Valdivia)びりやりか(Villarica)諸市ヲ創建セリ、ばるぢびやノ勢力ハ此時ニ至リテ絶頂ニ達セシカ、千五百五十三年あらうこノ土人再ヒ大舉シテつかべる(Tucapel)ノ城ヲ攻陥セリ、翌年一月ばるぢびやハ其救援ニ

赴キシカ奮戦苦闘ノ後遂ニ敵スル能ハスばるぢびや以下多ク捕虜トナリ敵ハ之ヲ苛責シ遂ニ其肉ヲ寸斷シテ食セリト云フ、ばるぢびやハ此ノ如キ無慘ナル最後ヲ遂ケタレトモ彼ハ戦闘ノミナラス民政ニモ注意セシカ故ニちれー地方ノ征服ハ殆ント彼レニヨリテ成就セラレタリト云フヘシ、つかべるノ敗戦後いすばにやノ移民間ニ大恐慌起リばるぢびやニ代リテ指揮ヲ取レルびりやぐら(Villagra)ハ先ツあんどる、びりありか等ノ移民ヲこんせぶしよんニ集メテ其守備ヲ圖リ千五百五十四年びよびよ河ヲ渡リテあらうこ土人ヲ攻メシカ再ヒ敗レこんせぶしよんヲ棄テ、さんちやゴニ退ケリ、敵兵ハ是ニ於テびよびよ河ヲ渡リテ北進セシカびりやぐら、さんちやゴヨリ出テ、不意ニ之ヲ襲ヒ敵將らうとろ(Lautro)ハ戦死シ其兵ハ敗散セリ、  
べるー總督ハ其子どんがるしや、うるたーど、めんどーろ(Don Garcia Hurtado de Mendoza)ヲちれーノ太守ニ任シ、どんがるしやハ千五百五十七年任地ニ着シ、さんちやゴニ入ラスシテ直ニこんせぶしよんニ至リ、八月十日あらうこ土人ト戦ヒテ激戦ノ後大勝ヲ得タリ、然ル後さんちやゴヨリ援兵ヲ得テびよびよ河ノ南



方ニ進ミ屢々戦ヒテ敵兵ヲ敗リ、先キニばるぢびやカ建設セシ諸市ヲ回復シ、其翌年ニハかにえて(Canete)ノ新市ヲ建テ更ニ進ンテいすばにや人ノ足跡至ラサリシ南部地方ノ探検ヲ試ミテちろえ諸島(Chiloe Isds.)ニ達シ此島中ノ二三ヲ探検シテ引キ返セリ、どんがるしやノちれノ太守在任中いすばにや人ハあんです(Andes)山ヲ越エテ東麓ノ平地ニ達シ茲ニめんどーさノ市ヲ設ケタリ、此市今ハあるへんちな共和国ニ屬ス、千五百六十一年どんがるしや太守ノ任ヲ離レビリやぐら之ニ代リシカ土人トノ衝突ハ此後モ絶ユル時ナカリシカ、此ノ如キ困難アリシト又此地方ニ鑛山少ナクシテ遠ニ富ヲ得ルコト難カリシトヲ以テ浮薄ナル移民ノ來ルコトナク在留者ハ主トシテ質朴ナル武人ナリシカ故ニ此地ノ殖民ノ氣風ハ他ノ殖民地ニ於ケルト大ニ異ナル所アリキ、ちれノハ始メべるノ總督ノ治下ニアリシカ十八世紀ノ末年獨立ノ行政區域トナレリ。

北あめりか 千五百十二年三月ふあんぼんせでれおん(Juan Ponce de Leon)始メテふろりだ(Florida)ヲ發見シテ沿岸ヲ探検シ、其ノ大陸ナルコトヲ知り千五百二十一年ニハ其征服ニ從事セシカ、半途ニシテ死シ功ヲ成ス能ハサリキ、千五百

二十八年なるばえす(Panfilo de Narvaez)すばにや國王ヨリふろりだ太守ニ任セラレ部下三百人ヲ率キテ任地ニ到レリ、上陸後荒野沼澤ノ間ヲ彷徨フコト二ヶ月餘ニシテ始メテ稍豊饒ナル地ニ達セシカ、家屋粗極メテ小數ノ人口アルノミニシテ其ノ豫期セシめさしこノ如キ開明ノ地ニアラサリシカハ遂ニ失望シテくばニ歸レリ、千五百三十八年えるなんとでそ(Hernando de Soto)くば及ヒふろりだノ太守ニ任セラレ、千五百三十九年六月くば島ヨリ六百ノ兵士ヲ率キテ北米大陸ニ渡リ、廣ク其地方ヲ巡回シテ始メテみしつびー(Mississippi)河邊ニ到リシカ千五百四十二年五月死去シ遺骸ハ河底ニ投シテ水葬セリ、一昨年せんと、るいす(St. Louis)ノ萬國大博覽會ニ其紀念像ヲ建設セシハ此緣故ニヨレリ、めさしこヨリモ亦探検隊ヲ發シ國境ニ近キ廣漠ナル地ヲ征服セリ、右ニ述フルカ如ク北あめりかノ開拓ハいすばにや人先ツ着手セシカ成功ハ佛蘭英諸國人ヲ待チテ始メテ見ルコトヲ得タリ。

ふいりつびん諸島

いすばにやノ新發見地經營



シ該島中まくだんニ於テ戰死シ、同航ノせばすちやんでる、かのカ殘員ノ乗組メ  
 ルびくとりや號ニテ歐洲ニ歸航セルコトハ前ニ既ニ述ヘタルカ、之カ爲メニ直  
 ニ西葡兩國ノ間ニ境界問題起リ千五百二十四年ノ春ニハ兩國委員會合シテも  
 ろつか諸島及ヒふいりつびん諸島カ何レノ領有ニ歸スヘキカラ討究セシト雖  
 トモ雙方ノ主張スル所相違甚シクシテ決スル所ナカリキ、千五百二十九年四月  
 二十二日いすばにや王其權利ヲ放棄シ分界線ヲもろつか諸島ノ東方十七度ノ  
 所ニ置キ、賠償トシテばるとがるヨリ三十五萬どかどすヲ拂フコト、シテ此問  
 題ヲ解決セリ、  
 右ノ協定ニヨレハふいりつびん諸島ハばるとがるノ領内ニ在ルコト勿論ナレ  
 トモ當時其經營ニ付テハ何ノ施設スル所ナカリキ、いすばにや政府ハめさしこ  
 ノ經營略成リテ後千五百四十二年びりや、ろぼす(Ruy Lopez de Villa Lobos)ヲシテ  
 六隻ノ艦隊ヲ率キテめさしこヨリ西航セシメ同四十三年一月末ふいりつびん  
 諸島ニ來リみんだなち(Mindanao)ニ殖民ヲ置カントセシカ土人ノ反抗ニ遭ヒ又  
 糧食ヲ得ルノ途ナカリシニヨリ南ニ航海シもろつか諸島ニ至リ此所ヨリめさ

しこニ船ヲ派シテ糧食其他ノ供給ヲ仰カントセシコト數次ナリシモ常ニ失敗  
 シテ終ニ葡人ニ降り其船ニテ歐洲ニ送還セラレタリ、千五百六十四年れがすび  
 (Miguel Lopez de Legaspi)船五隻ヲ率キテめさしこのノなびだつ(Navidad)港ヲ出テ同  
 年二月ふいりつびん諸島ニ着シ四月二十七日せぶ(Sebu)島ニ上陸シ土人ト戰  
 ヒテ勝チタル後此所ニさんみげる(San Miguel)ノ殖民地ヲ置ケリれがすびハ殖民  
 地設置ノコトヲめさしこ總督ニ報セン爲メうるだねて(Urdanete)ヲ遣セシカ此  
 時始メテ北緯四十三度マテ東北ニ航シソレヨリ東航シテ四ヶ月ノ後千五百六  
 十五年十月三十日あかぶるこ(Acapulco)ニ着セリ、是ヨリ常ニ同航路ヲ取ルニ至  
 レリト云フ、千五百六十七年れがすびハめさしこヨリ船二隻ヲ以テ増援兵ノ派  
 遣ヲ受ケ漸次附近諸島ヲ威服シ、千五百七十一年部下ノ將ゴ Martin de Goiti  
 るそん島(Luzon)ノまにら(Manila)ヲ占領セリ、次イテれがすびハ葡人ヨリせぶ  
 退去を迫ラレ、終ニるろんニ移リ都ヲまにらニ定メ茲ニふいりつびん諸島大經  
 營ノ基礎ヲ置ケリ、

日本イロカノカ、賢長



## 第六章 日本トいすばにやトノ貿易

いすばにや政府ハムいりつびん諸島ノ經營ニ着手セシ後年々めきしこヨリ船ヲ出シテ軍隊及ヒ軍需品ヲまにらニ輸送セシカ故ニいすばにや船ノ我カ沿海ヲ航行シ或ハ暴風ノ難ヲ避ケテ寄港シ或ハ沿岸ニ漂着セシモノアリシナランモ、確ナル記録ニ見エタルハ千五百八十四年肥前平戸ニ到着セシモノヲ以テ最初トス、元來此船ハまにらヨリまかち (Macao) ニ航行スルモノナリシカ、船長及ヒ航海士ノ不熟練ナリシカ爲メ支那ノ泉州ニ至リ再ヒ誤リテ北ニ向ヒテ航行セル中まかちヨリ日本ニ來航スルぼるとがる船ニ逢ヒ之ニ隨ヒテ我邦ニ來リシナリ、是レ千五百八十四年八月ノコトナリキ、平戸ノ領主ハ是ヨリ先キ葡船ノ同港ニ寄航セシモノ長崎ニ移リシ爲メ外國貿易ノ利ヲ得ル能ハサリシヲ以テ此好機ヲ利用シまにら船ヲ其港ニ寄航セシメント欲シ、るそん太守ニ宛テ今後年々船ヲ派シ宣教師ヲ送ランコトヲ求メタリ、此書面ノ日附ハ九月十七日ニシテいすばにや語譯文現存ス、該船ハ同年十月五日日本ヲ發シテまかちニ向ヒシカ

平戸ノ領主ノ請ニ應シテいすばにやノ船舶平戸ニ來リシカ否カハ記録ノ徵スヘキモノナシ。

日本船ハ早クヨリまにら附近ニ往來セシカいすばにや人ノ殖民セシ後ニハ此地方ニ渡航シテ貿易ヲ營ムモノ彌々増加シ、生糸、砂糖、蠟燭、るそん壺等ヲ我邦ニ輸入セリ、太閤記ニ文祿三年七月二十日千五百九十四年堺ノ町人魚屋助右衛門カ呂宋ヨリ歸朝シ唐ノ傘、蠟燭千挺、生キタル麝香二疋ヲ秀吉ニ獻シ眞壺五十ヲ其覽ニ供セシニ秀吉ハ之ヲ西ノ丸廣間ニ陳列シ千宗易等ニ命シテ價札ヲ付ケ望ノ人ニ買取ラシメタレハ數日内ニ悉ク賣レ切レシ由ヲ記セルハ其ノ一例ナリ

其頃我邦ニ於テハ豊臣秀吉國內ヲ平定シ進ンテ朝鮮支那ヲ征服セント欲シ大兵ヲ朝鮮ニ發スルノ準備中ナリシカ、永クまにら地方ニ滞在セシ原田孫七郎ト云フ人、るそんノ防備薄弱ニシテ我邦ヨリ出兵セハ之ヲ征服スルハ容易ナルノミナラス、若シ大兵ヲ率キテ群島ニ臨ムノ勢ヲ示サハ戰ハスシテ彼レ先ツ降ルヘシト人ヲ以テ秀吉ニ説ケリ、秀吉ハ直ニ其議ヲ採用シ孫七郎ヲ使者トシテま



にらニ遣ハセリ、

千五百九十二年四月十八日(文祿元年三月七日)日本船一雙まにらニ到着セリ、長崎在留ノ耶蘇會ノ宣教師該船長ニ托シテまにらノ同會ノ學林長ニ一書ヲ送リ、秀吉カるそんニ出兵セントスルノ計畫アル旨ヲ報シタレハ、太守をめす、べれす、だす、まにりにやす (Gomez Perez das Mariñas) ハ之ヲ聞キ同月二十日該船ノ乗組員ヲ尋問シテ日本ノ國情及ヒ出征ノ實否ヲ糾シ、諸人ノ陳述ニヨリ秀吉カ朝鮮ヲ征スルト稱シ諸般ノ準備ヲ整ヘ、多數ノ船舶ヲ集メツ、アルハ或ハふいりつびん諸島ニ向ハン真意ナルヤモ計ラレス、且ツ秀吉ノ威力ヲ以テセハ二三萬ノ船ヲ集メ十萬乃至十五萬ノ兵ヲ送ルハ易々タルノミナラス、日本武士一人ハいすばにや人十人ニ當ルト高言シツ、アルヲ聞キ、又一行三十人ヨリ成ル使節をそんニ來リテ其降伏ヲ促サントスル由專ラ風説セル旨ヲ聞キ、萬一ノ變ニ備ヘンカ爲メ沿岸ノ土人ヲ内地ニ移シ、海岸ノ農作物ヲ早收シテ入寇者ノ食糧ヲ斷ツノ策ヲ取り、又まにら城内ヨリ支那人ヲ退ク、人質ヲ納レシメテ日本人ト呼應スルコトヲ防キ且ツ直ニめさして總督ニ救援ヲ求メ、本國政府ニモ變ヲ報シテ兵

員武器糧食ノ送附ヲ仰ク等諸般ノ準備ヲ整ヘシカ二十九日(文祿元年四月十八日)ニ至リテ日本使節到着シ、三十一日國書ヲ太守ニ呈シ淺野長政松浦法印等ノ添書ヲ渡セリ、國書ハ三重ノ蒔繪ノ箱ニ納メ金銀泥ヲ散シタル下繪ノ鳥ノ子ニ書シアリシト云フ

夫吾國百有餘年、群國爭雄、車書不同軌文、予也際誕生之時、以有司治天下之奇瑞、自壯歲領國家、不歷十年、而不遺彈丸黑子之地、域中悉統一也、繇之三韓、琉球、遠邦異域、款塞來亨、今也欲征大明國、蓋非吾所爲、天所授也、如其國者、未通聘禮、故先雖欲使群卒討其地、原田孫七郎以商船之便時來往、此故紹介近臣、曰某早々到其國、而備可說本朝發船之趣、然則可解辨獻筐云々、不出帷幄而決勝千里者、古人至言也、故聽謁夫言、而暫不命將士、來春可營九州肥前、不移時日、可偃降幡而來服、若匍匐膝行於遲延者、速可加征伐者必矣、勿悔不宣、

天正十九年秋季十九日

るそん政府ハ此勸降ノ書ヲ得、又原田孫七郎ヨリ來使ノ趣旨ヲ聞キ、元ヨリ降服メ意ナカリシカ當時るそんノ兵員少數ニシテ一朝戰端ヲ開クニ至ラハ到底日



本ノ大兵ニ抗シ得ルノ見込アラザリシヲ以テ苦心ノ結果時日ヲ遷延セシメン  
ト計リ、原田ハ自ラ日本大使ナリト稱スレトモ、身分賤シクシテ大國ノ使者ト思  
ハレス、且ツ國書ト稱スルモノモ之ヲ翻譯シ得ルモノナキヲ以テ其意ヲ解スル  
能ハス、之ヲ來使ニ質セトモ要領ヲ得ス、又日本ニハぼるとがるノ宣教師ノ滞在  
スルモノ多ケレハ其譯文ヲ添ヘサルハ甚タ疑フヘシ、然レトモ日本ノ使者ト稱  
スルモノヲ漫リニ退クルヲ欲セス、秀吉ニ敬意ヲ表シ使節ノ眞偽ヲ正サンカ爲  
メふわん、こぼす (Tuan Cobos) ヲ遣ス由ヲ陳ヘタル書ヲこぼすニ渡シ、添フルニ贈  
リ物トシテ十二本ノ長劔ト短劔トヲ以テシ且ツ先キニ書ヲ送リシ平戸ノ領主  
及ヒ秀吉部下ノ將士ニモ返書シ、原田孫七郎ト共ニ出帆セシメタリ、同時ニ本國  
政府ヘ向ク日本使節ノ到着及ヒ來使ノ趣旨ヲ報シ、又前述ノ一時的繙譯手段ヲ  
取リタレハ日本ヨリ確答來ラハ支那ト同盟シテ日本ニ當ルカ、或ハ日本ト結フ  
カ二者其ノ一ニ出テサルヘカラストテ其長短得失ヲ論シテ獻策セリ、秀吉ノ書  
ヲ解スル能ハスト云ヒシコトノ偽ナルコトハせびりやノ古文書錄ニ極メテ綿  
密ナル譯文現存スルヲ以テ知ルヘシ

るそんノ使者ふわん、こぼすハ海路恙ナク薩摩ニ着シ平戸ヲ經テ肥前ノ名護屋  
ニ到リ秀吉ニ謁見セリ、秀吉ハ之ヲ款待シるそん太守宛ノ書ヲ裁シテ之ニ交附  
シ歸國セシメタリ、而シテ今回ハ孫七郎ノ主人原田喜右衛門ヲ使者トシテ派遣  
セシニこぼすノ船ハ不幸ニシテ中途難破シ、喜右衛門ノミ千五百九十三年五月  
二十三日(文祿二年四月二十三日)るそんニ着シ、太守ニ面會シテ來使ノ趣ヲ述ヘ、  
尙ホ彼ニ托セルこぼすノ書ヲ呈セリ、太守ハ之ニヨリテこぼすノ日本ニ於テ受  
ケタル優遇及ヒ秀吉ノ求ムル所ヲ了解セシカ再ヒ時日ヲ遷延セシメント欲シ  
こぼすノ乗船難破シ其ノ携ヘタル秀吉ノ書狀モ亦海底ニ沈ミタルニヨリ秀吉  
ノ意志ヲ知ルニ由ナキヲ理由トシテ、又ペドロ、ばぶちすた (Pedro Baptista) ヲ遣セ  
リ、ばぶちすたハ日本ニ着シテ秀吉ニ謁シ其使命ヲ傳ヘ秀吉ノ答書ハ副使ニ托  
シテまにらニ送り、己ハ人質トシテ滞在スルコトニ定メ、遂ニ京都ニ到リテ密ニ  
布教ニ從事セリ、

るそんニ於テハ太守南洋征討ノ途上支那人ニ暗殺セラレ其子るす (Iuis) 假リ  
ニ政ヲ執リシカ、秀吉ノ書ニ接スルヤ直ニ重ナル文武官吏ヲ集メるそんハいす



ばにや王ノ所領ニシテ他ニ讓與スル能ハサル旨ヲ明言シ日本ノ國力遠クいすばにやニ及ハサルヲ述ヘ、秀吉誕生ノ際奇瑞アリシト云フカ如キハ迷信ニ過キストシ大ニ之ヲ喝破セントノ案ヲ提出セシカ、徒ラニ秀吉ノ憤怒ヲ買フニ過キサルヲ以テ熟議ノ末日本ト親交ヲ結フハ其ノ欲スル所ナレハ本國政府ノ訓令ヲ待チテ確答スヘキ由ヲ答ヘタリ、是レ千五百九十四年四月二十四日(文祿三年三月四日)ノ事ナリキ、

るそん征討ノ議ハ斯ノ如ク往復ヲ重ネるそん政府ノ返答常ニ曖昧ニシテ捕捉スル處ナカリシヲ以テ未タ決行スルニ至ラサリシカ、茲ニ新ニるそんと交渉スヘキ事件發生セリ、

慶長元年八月噸數約一千噸ノいすばにや船さん、ふえりべ號(San Felipe)土佐ノ浦戸ニ着セリ、同船ハ慶長元年六月十七日(千五百九十六年七月十二日)かびて港(Cavite)ヲ出帆セシカ、航海中大風ニ逢ヒテ船體破損シ日本ニ避難スルコトニ決シ土佐ノ海岸ニ着シ八月二十七日領主ノ舟ニ引カレテ浦戸ニ入レリ、船員上陸後事務員及ヒ乗組ノ宣教師數名ヲ使者トシ贈物ヲ携ヘテ秀吉ノ許ニ至リ船ニ

修繕ヲ加ヘめさしこへ向ケ出帆スルノ許可ヲ求メシメシニ、秀吉ハ贈物ヲ退ケ増田右衛門尉ヲ遣シテ來着ノ事情ヲ審査セシメタリ、増田ハ九月二十一日土佐ニ着シ審檢ノ末遂ニ船及ヒ積荷ヲ沒收シ、主要ナル船員并ニ宣教師ヲ大阪ニ送り、宣教師ハ曩ニ呂宋ノ使者トシテ日本ニ來リ京都ニ滞在セルペどる、ばぶちすヲ等ト共ニ總員六人國禁ヲ犯シテ基督教ヲ宣傳セシ罪ニヨリ同年十二月長崎ニ於テ十字架ニ懸ケ自餘ノ船員ハ翌年三月るそんニ送還セリ、  
さん、ふえりべ號沒收ノ理由ハ同船ノ長、世界ノ地圖ヲ示シいすばにやノ版圖ノ廣大ナルヲ誇リいすばにやカスノ如ク多クノ領土ヲ有スルハ先ツ宣教師ヲ派シテ基督教ヲ宣布セシメ土人ノ歸依スル者多キニ至ルヲ待チテ兵ヲ出シ之ト相應シテ其地ヲ征服スルニヨル旨ヲ語り大ニ當局者ノ對外恐怖心ヲ惹起シタルニアリ而シテ沒收品ハ生糸、織物、金塊等甚タ多額ニシテ之ヲ百五十艘ノ舟ニ積ミテ大阪ニ送り、秀吉ハ生キタル鸚鵡、麝香、金欄純子二萬反ヲ禁中ニ獻シ其部下ノ將士ニモ之ヲ分チ、餘ハ京阪ノ商人ヲシテ販賣セシメタリト云フ、  
るそん政府ハ此報ヲ得テ千五百九十七年五月二十六日附ヲ以テ書ヲ秀吉ニ送



リ船ノ拿捕ニ對シテ抗議シ尙ホ沒收セシ物品ノ返附及殉教者ノ死體ノ引渡ヲ求メタリ、同時ニ太守ノ肖像、鎧二領其他武器、銀器并ニ黑象一匹ヲ贈レリ、蓋シ漂着船舶及ヒ積荷ノ沒收ハ當時國際法ノ是認スル所ニシテ北歐諸國ニ於テハ漂着物ハ國王收入ノ重要ナル項目ナリキ、秀吉ハ此書ニ對シ日本ニハ古來神道アリ外教ノ宣布ハ嚴禁スル所ニシテるそんノ宣教師ヲ殺セシモ此禁ヲ犯シテ布教ニ從事セシカ爲メナリ、船ヲ沒收セシハ古來ノ習慣ニヨレルモノニシテ又いすばにやカ密ニ日本ヲ取ラントスルノ謀ヲナセルニヨレリ、るそんノ希望スル所單ニ貿易ノミナランニハ之ヲ許容スヘシト答ヘタリ、るそん政府ハ再ハ抗議ヲナスコトナク此後モ屢々書ヲ送リテ親交ヲ求メタリ、斯ク勸降ヲ受ケ、舟ヲ沒收セラレ、又使節ヲ刑セラレシモ復讐スルコトナク一意日本ノ歡心ヲ得ント力メタルハ當時るそんノ實力ナカリシト、物資ノ供給ヲ我邦ニ仰クコト多カリシトニヨレリ、當時若シ進ンテ之ヲ攻撃シタランニハふいりつびん諸島ヲ克服スルコトハ敢テ困難ナラサリシナラン、

慶長三年八月秀吉薨シ、家康國政ニ參スルニ及ヒテ、るそんニ對スル政策ヲ變シ、

當時日本ノ南方ニハまかち及ヒるそんノ船ノ往來アリテ貿易ノ利尠カラサリシカ、關東ハ其利ヲ受クルコト能ハサリシヲ以テ家康ハ慶長五年書ヲ宣教師ニ托シテるそんニ送リ、船ヲ關東ニ派シ、又航海士造船技師、礦山技師及鑛夫ヲ送ラシメ、

弊邦與濃毘數般、のびすばにや、欲修隣交、非貴國年々往來之人、則海路難通、可希求者、依足下指示、舟人船子時々令往返、

ト云ヒ、七年八月ノ書中ニモ亦

本朝與濃毘數般、欲作商船往來者、不必爲本邦貴邦之人、曾曰、弊邦東關有所止宿、則呂宋之舟可逃風難、自關東出舟者、兩國之嘉慶也、云々、故自貴國告彼國者、期望之、蓋可應貴邦所欲、

ト云ヒるそんノ媒介ニヨリテめさしこトノ直接貿易ヲ開カンコトヲ計レリ、るそん太守ハのびすばにやノ總督及ヒいすばにや王ニ家康ノ希望ヲ報告シ、其訓令ヲ得テ更ニ報スヘキ旨ヲ答ヘ、且ツ毎年日本ノ商船六隻ツ、るそんニ來航スルコトヲ承諾シ、日本ニ到ルいすばにや船ニ充分ノ保護ヲ加ヘンコトヲ望ミ、日



本在留ノ蘭人ヲ放逐センコトヲ要求セリ、當時我邦ニ在リシおらんだ人ハ千五百九十八年おらんだヲ發シませらん海峡ヲ經テ東洋ニ來航セントセシ五艘ノ艦隊中ノ一隻で、りえふて號(De Liefde)ノ乗員ニシテ種々困難ノ末慶長五年三月豊後ニ漂着シ、ソノ儘我邦ニ滞在セシモノナリ、而シテ有名ナル英人ウイリヤビあだむす(William Adams)モ亦ソノ内ニアリキ、家康ハ又るそん政府ノ請ニ應シムイリつびん諸島ヲ襲撃セル海賊ヲ罰シ、るそん行ノ船數ヲ制限シ、慶長七年八月土佐ニ避難セルさんえすびりつ號(San Espiritu)ノ乗員ヲ好遇シテ大ニるそんノ好意ヲ得ンコトヲカメ、るそんヨリハ家康ノ希望ニ應シテ年々船ヲ關東ニ送り太守ハ其都度書狀及ヒ國產ヲ贈レリ、其書狀ニハ漢文ナルアリ和文ナルアリ、皆異國日記ニ載セタリ、るそんとノ貿易ハ斯ノ如ク成立セルカ、めさしこトノ交通ハ容易ニ行ハレサリシカ、茲ニ家康ノ希望ヲ果サシムルニ一ノ好機會生セリ、即チ慶長十四年九月上總ノ國夷隅郡岩和田村ノ海岸ニ於テるそんヨリめさしこニ航行スルいすばにや船さん、ふらんしすこ號(San Francisco)ノ難破セルコトナリ、

さん、ふらんしすこ號ハ慶長十四年六月るそんヲ出發シ航行中暴風ニ逢ヒ船體破損セシヲ以テ日本ノ港ニ入りテ、修繕ヲ加ヘント欲シ日本ヘ向ケ進航セシカ、當時海圖不完全ニシテ日本ノ北端ヨリモ北方ヲ航セシ考ナリシニ、夜中海岸ノ暗礁ニ觸レテ船ハ破碎シ乗組員ノ一部ハ溺死セリ、残りノ人々ハ辛ウシテ上陸セシモ其ノ如何ナル地ニ在リシカラ知ラサリシニ、天明ニ及ヒテ始メテ日本ノ東岸岩和田村ノ海岸ナルコトヲ知レリ、土人ハ直チニ漂着ノ事ヲ大田喜ノ城主ニ報シ、城主ハ更ニ江戸及駿府ニ通知シ其指揮ヲ待テテ便乗ノ前るそん太守どん、ろどりこでびべろ(Don Rodrigo de Vivero)ハ江戸ヲ經テ駿府ニ到リ秀忠及家康ニ謁セリ、我カ商人等ハ家康ノ内意ヲ受ケ其船ニ乗リテめさしこニ歸ランコトヲ彼ニ請ヘリ、ろどりごハさん、ふらんしすこ號ト同航シ暴風ヲ避ケテ豊後國臼杵港ニ在リシさんたあな號(Santa Ana)ニ乗リテめさしこニ至ラント欲シ豊後ニ下リシカ、めさしこ貿易ハ家康ノ豫テ希望スル所ニシテ又彼地ヨリ礦夫雇傭ノ考アルヲ知リ、其希望ヲ遂ケシメ其代リニ宣敎ノ便宜ヲ得且ツ日本在留ノ蘭人ヲ放逐セシメント欲シ、再ヒ駿府ニ至リ前記ノ條件ヲ協定シ、遂ニ日本船ニ



テ歸國スルコトニ決セリ、是ヨリ先キ慶長十四年二隻ノ蘭船平戸ニ來リ七月二十五日通商ノ許可ヲ得テ平戸ニ商館ヲ設ケタルコトハどん、ろどりごノ決心ヲ促シタル一ノ大ナル理由ナリシカ、蘭人放逐ノ事ハ家康ノ容ル、所トナラサリキ、家康ハ又此機會ヲ利用シテふらい、あろんそ、むによす (Fray Alonso Munoz) ヲ使者トシテいすばにやニ送り通商條約ヲ定メシムルコト、シ曩ニあだむすニ命シテ造ラシメタル百二十噸ノ船ニ日本商人田中勝助外數人ヲ乗込マシメ商品ヲ積ミどん、ろどりご及ヒあろんそ、むによす等ト共ニ同十五年六月十三日浦賀ヲ發シテめさしこニ向ハシメタリ、同船ハ海上無恙ニシテ同年九月十一日下カリふおるにや (California) ノまたんちえる (Matanchel) 港ニ安着セリ、是レ實ニ日本船あめりか航海ノ始メナリキ、

どん、ろどりご、あろんそ、むによす等ハめさしこニ着シテ日本ノ國書及ヒ贈物ヲ總督ニ呈シ、家康ノ希望ヲ傳へ、むによすハ翌年ノ夏定期ノ便船ニヨリテいすばにやニ渡レリ、

其頃いすばにやニ於テハ日本ノ近海ニ金銀ノ島アリトノ噂アリ、國王ハ探檢隊

ヲめさしこヨリ發スヘキコトヲ總督ニ命シ既ニ其準備ニ着手シ居タルカ、どん、ろどりご等到着後總督以下協議ノ上答禮ノ使ヲ出スヲ名トシ、日本ニ船ヲ送り日本ヨリ金銀島ノ探檢ニ上ルコトニ決シ、せばすちやん、びすかいの (Sebastian Vizcaino) ヲ大使ニ任シ探檢隊ノ指揮ヲ托セリ、びすかいのハ千六百十一年三月七日めさしこヲ發シテあかふるこ港 (Acapulco) ニ到リ同月二十二日さん、ふらんしすこ號ニ乘リテ此地ヲ發シテ日本ニ向ヘリ、乗員ハ説教師、事務員、水夫等併セテ五十人ニシテ日本商人田中勝助外二十二人も亦同船セリ、船ハ航海中非常ノ暴風ニ會セシカ幸ニ無恙ニシテ先ツ水戸ノ海岸ニ着シ南下シテ慶長十六年四月二十九日浦賀ニ着セリ、びすかいのハ直ニ使ヲ駿府及江戸ニ出シテ其到着ヲ報シ又謁見ノ爲メ上府スルノ許可ヲ求メタリ、五月六日江戸ヨリノ使ニ接シ翌日浦賀ヲ發シテ江戸ニ向ヒ十二日秀忠ニ謁シテ總督ノ書及進物ヲ献シ、越エテ十五日江戸ヲ出テ、浦賀ニ歸リ、十九日再ヒ浦賀ヲ發シテ二十四日駿府ニ着セリ、家康ハ翌日彼ヲ接見セルカ彼ハ前るそん、太守一行ニ對スル厚キ待遇ヲ謝シ尙ホ家康ノ求メタル兩國ノ貿易ノコトニ關シテハ總督ヨリ本國政府ニ上申シあ



ろんろ、むによすハ既ニ歸國シタレハ本國政府ノ訓令ヲ得次第通知スヘキ旨ヲ告ケ、今後兩國ノ交通頻繁トナルヘキニ付キ沿岸ノ形狀ヲ知ルノ必要アリトテ日本東岸ノ測量ノ許可ヲ乞ヘリ、家康ハ直ニ之ヲ許セリ、びすかいのハ六月七日駿府ヲ辭シ十一日浦賀ニ着シ歸國ノ途次金銀島ヲ探檢センカ爲メ積載ノ貨物ヲ賣却シテ必需品ノ買入ヲナシ又其船ハ長途ノ航海ニ加フルニ風波ノ難ニ逢ヒ破損ノ箇所尠カラサルヲ以テ更ニ堅固ナルモノヲ新造セントセシカ、多額ノ費用ヲ要スルニ因リ遂ニ舊船ヲ修繕シテ之ヲ用フルコトニ定メソレソレ命ヲ下シタル後九月一日浦賀ヲ發シテ測量ノ途ニ就ケリ、浦賀ヨリハ先ツ江戸ニ到リ、北方ノ諸侯ニ宛テタル將軍ノ令狀ヲ受取リ宇都宮白河若松米澤等ヲ經テ仙臺ニ到リ、政宗ト會見シ其領内ノ測量ニ關シテ便宜ヲ與ヘラレンコトヲ請ヒ、十月十二日鹽釜ヨリ乗船シテ北ニ向ヒ沿岸ヲ測量シ小塚雄勝折立氣仙沼今泉盛ヲ經テ十二月初越喜來ノ北ニ到リ此所ヨリ仙臺ニ引返シ仙臺ヨリハ海岸線ニ沿ヒテ南下シ水戸ヲ經テ十一月二十七日江戸ニ歸着セリ、而シテ留ルコト三日ニシテ浦賀ニ歸リ、暫ク此所ニ滞在シ、慶長十七年四月二十一日駿府ニ出テ又

陸路京都ニ向ヒ大坂堺ヲ歷遊シ曩ニ船ニテ浦賀ヲ發シ南方沿岸ノ測量ニ從事セル航海士ばすけす (Lorenzo Vazquez) 等ト會シ、京都ニ於テ測量全圖ヲ製シ一ハ將軍ニ獻シ一ハ其ノ本國ニ送リシト云フ、斯ノ如ク外人ノ手ニ成レル製圖ハ當時ノ日本ニ取リテハ非常ナル便益アリシナルヘク我カ海岸線ニ關スル新智識ヲ外國ニ傳ヘタルノ功モ亦沒スヘカラス、但シ該圖ノ今日マテ存スルカ否カハ未タ確カナラス。

びすかいのハ京都ヨリ歸リ駿府及ヒ江戸ニ至リテ歸國ノ告別ヲナシ、日本ヨリめきしこニ送ル書ヲ受ケ取り慶長十七年八月二十一日浦賀ヲ出帆セリ、是ヨリ先キ田中勝助等ハ葡萄酒、色羅紗、鳥毛ノ天鵝絨、桑板ノ巾九尺長二十間ナルモノ等ヲ持歸リ、めきしこニハ金銀ハ思ヒシ程ニ多カラサレトモ又奇産尠ラサルヲ報シタレハ家康カめきしこ總督ニ與ヘタル書ニハ貴國與吾邦、彌結隣交、而每歲商船往來、互可通商國寶者、爲世爲人何善政加焉哉ト云ヒ、又於弘法志者、可思而止、不可用之、只商舶來往、而賣買之利潤偏可專之、貴國之商舶來朝之時、雖到着何之國々津々浦々、聊不可有異議、兼日域中益加嚴命、宜安心莫訝ト云ヒ秀忠ノ書



ニモ亦二國之商船往來、毎歲互可通之、時々欲聞國風耳ト云ヒ、家康ノ多年ノ希望ヲ達スルノ時期既ニ到レルノ觀アリキ、

びすかいのハ浦賀ヲ發シテ後直ニ金銀島ノ探檢ニ上リ、廣ク搜索シタレトモ元來存セサル島ナレハ發見スルニ由ナク、航海中暴風ノ爲メ船ノ被害甚シカリシカハ再ヒ日本ニ引キ返シテ十月十五日浦賀ニ入港セリ、

びすかいのハ始メ日本ニ憚ル所アリ、金銀島探檢ノコトハ秘シ居タルカ、蘭人之ヲ政府ニ密告セシカ故ニ終ニ之ヲ公ニセリ、家康ハ該島ノ存否確ナラサレハ若シ發見ノ上日本ノ領土内ニアラハ決シテ外人ヲシテ一指ヲ染メサラシムヘシ、今之ヲ探檢スルハ咎ムヘカラスト云ヘル由ナルカ其心平ナラサル所アリシハ疑フヘカラス、

又海岸測量ニ付テモ蘭人ハ其不法ヲ論シ、歐洲諸國ニ於テ之ヲ許サ、ルヘキヲ説キ、いすばにやハ先ツ基督教ヲ宣布シ後チ兵ヲ出シ其地ノ基督教徒ト相應シテ國ヲ奪フヲ通常ノ手段トセルモノニシテ、今回海岸ノ測量ヲナセルモ遠カラズ戰艦ヲ送ルノ準備ニ外ナラスト讒セリ、外國人ノ國ヲ奪フノ野心アルヘキハ

幕府ノ常ニ懸念セシ所ナリシカハ、家康ハ漸クいすばにや人ヲ忌ムノ念ヲ強クシ、びすかいのカ再ヒ渡來セシ時ハ前ノ如ク厚遇ヲ與ヘス、彼ハ百方奔走セシモ商品ノ賣却モ、金錢ノ借入レモ意ノ如クナスコト能ハス、新船ノ建造ニ付テモ幕府ノ助ヲ受クルコト能ハサリキ、

陸奥ノ領主伊達政宗ハ豫テ外國貿易ヲ開キ其國ヲ富スノ考アリ、仙臺ニ於テびすかいのト會見セルトキ其希望ヲ述ヘテ之カ便宜ヲ計ランコトヲ求メシカビすかいのハ他日ヲ期シテ確答ヲ與ヘスシテ止メリ、然ルニ曩ニどん、ろどりゴ漂着ノ時日西兩國ノ交誼ヲ厚クセントシテ大ニ周旋シ、遂ニ日本ノ使者トシテいすばにやニ渡ラントシ、病ノ爲メニむによすヲシテ己ニ代ハラシメタル宣教師ふらい、るいす、そてろ政宗ノ知遇ヲ得テ其領内ニ於テ布教ニ從事シ居タルカ、びすかいのカ再ヒ日本ニ來リめさしこ歸航ノ方法ナキニ苦シメルヲ見テ、政宗ニ説キテ船ヲ造ラシメ、びすかいのヲ司令官トシテめさしこニ航海セシメンコトヲ謀レリ、そてろカ此事ヲ急キタルハむによすカいすばにやニ使シタル結果未タ明カナラサルニ當リ、慶長十七年おらんだ商館長すぺつさす (Jacques Speck) 等



家康ニ謁シ再ヒ通商許可ノ朱印狀ヲ得、日本ニ於ケル根據彌々固クナラントスルノ恐アリタレハ、速ニ前ノ使節ノ趣旨ヲ貫徹シ幕府ノ歡心ヲ得蘭人ノ渡來ヲ防止シ、又いすばにや政府ノ信用ヲ得テ己カ屬スル所ノさん、ふらんしすこ派ノ隆盛ヲ計ラントノ考ニ基ケリ、政宗ハ喜ンテをてろノ提議ニ同意シ、びすかいのモ他ニ歸國ノ途ナカリシヲ以テ餘儀ナク其請ニ應シ航海中ノ諸費及ヒ警吏醫員其他數名ヲ除キ、航海士事務員水夫等船員ノ俸給ハ政宗ノ負擔トシ、又浦賀ヨリ仙臺ニ到ル諸費モ亦政宗之ヲ支辨スルコト、シ、船ノ出來ヲ待チテ慶長十八年九月十五日陸奥國月ノ浦ヲ出帆シ、途中無事ニシテ同年十二月十九日あかぶるこニ到着セリ、是レ日本船第二回ノめきしこ航海ナリキ、

始メ田中勝助等カめきしこニ到リシ時、總督ハ日本船ノ再ヒ來航スルコトヲ禁セシヲ以テ、びすかいのハ政宗ノ船ニテ歸國スルコトヲ危フミシカ、政宗カ其船ヲ出セシハいすばにや國王ト親交ヲ結ヒ、且ツ羅馬法王ニ敬意ヲ表シ日本ニ於テ宣教ノ便宜ヲ與ヘラレシコトヲ請フ爲メナリシカハ、終ニ乘船ヲ諾シテめきしこニ渡リ、總督モ亦其命令ニ違反セシニ拘ハラヌ、政宗ノ使支倉六右衛門等百

五十餘人ノ上陸ヲ許シ、儀ヲ整ヘテめきしこニ迎へ、總督自ラ使者ヲ引見シテ政宗ノ書狀及ヒ贈物ヲ受領シ、一行中三十餘人ハ千六百十四年五月末めきしこヲ發シテさん、ふあんで、うるゝあ港(San Juan de Dios)ニ至リ、同年六月十日さん、ぼせふ(San Joseph)ト云フ船ニテいすばにやニ向ヒテ出帆セリ、是ヨリ先キ日本人ノ一行ハ到着ノ初メあかぶるこニ於テいすばにや人ト衝突シテ大騷擾ヲ惹起セリ、總督ハ國人ニ向ヒテ以後日本人ニ對シ不穩ノ舉動ヲナシ、其所持品ヲ強奪シ又ハ商品ノ賣買ヲ妨害スルカ如キ所爲アルヘカラストノ訓令ヲ發シ、同時ニ日本人中主ナルモノ七名ノ外ハ悉ク其武器ヲ政府ニ預ケシメテ騷擾ハ一時鎮靜セシカ、日本人ハ爭鬪ヲ好ミ危險ナリ、日本人ニ航海術ヲ習得セシムルハめきしこノ安危ニ關スル所少ナカラストノ觀念ヲ強メ總督ハ日本人ノ職員ヲ抑留シふいりつびん群島ヨリ歸國セシメシコトヲ本國政府ニ請ヘリ、

支倉六右衛門ノ一行ハ千六百十四年六月十日ニ出帆シ、七月二十三日くば島ノはばな(Havana)ニ寄航シテ同一航路ヲ取ルヘキ他ノ諸船ヲ待チ合セ、十月五日いすばにやノさん、るかゝる(San Lucas)ニ入港セリ、支倉及ヒをてろハ船中ヨリ



國王竝ニ時ノ宰相れるま侯 (Terma) ニ日本ノ使者トシテ來着セル旨ヲ報シ、又せ  
 びる市 (Seville) ニモ政宗ノ使者トシテ不日同所ニ到ルヘキ旨ヲ通シ、さんるか  
 ーニ上陸シテ後同所ノ領主めぢな、しどにや侯 (Medina Sidonia) ニ歡迎セラレ、特  
 ニ準備セラレタル二隻ノ船ニテぐあだるさびる河 (Guadalquivir) ヲ遡リテこり  
 あ (Coria) ニ赴キ、此所ニテせびるヨリ出セル歡迎員ニ迎ヘラレ、暫ラク滞在シテ  
 旅装ヲ整ヘ、十月二十一日特ニ用意セル馬車ニ乗リ多數ノ紳縉ニ送ラレテせび  
 ーニ進ミ、とりやな (Triana) 門ニテ支倉外二三名ハ馬ニ乗リ市長警部長ト馬ヲ並  
 ヘテ市ニ入り順路ヲ歷テ宿所ニ當テラレシあるかざるニ入レリ、あるかざるハ  
 回教徒時代ノ有名ナル建築ニシテ當時同國王ノ離宮ナリシヲ特ニ一行ノ宿所  
 ト定メタルナリ、十月二十七日市廳ニ於テ日本使節ノ接見式舉行セラレ、市長ハ  
 政宗ヨリ送レル書狀竝ニ贈與ノ大小刀ヲ受取レリ、其書ニ曰ク  
 大成天有主之御はからいを以伴てれ布羅いそてろハか分國中へ被越候て  
 貴天有主之御法を承殊勝候、眞之後生之道與存、御宗門可罷成候處に、無據指  
 合御座候間今に無其儀候、左てハか分國御宗門可申ために、此たひふらい、そ  
 てるを頼、支倉六右衛門與申侍一人指添相渡申候、然者其元大國之帝王殿同  
 一半之きりしたん御親老間はつは殿へ御れい申上、此ねかい相叶候様奉頼  
 ために態兩人進上申候、然者其國御繁昌候様子并伴てれふらい、そてろ生國  
 之由承候間、別而たいせつに存其子細者、貴天有主御宗門此國にひろめ給人  
 其國より出たるえたにて候間、國ともに天有主へ御れい申上候はてかなは  
 ざる儀候、兩人等吾等代にせびいやに御れい申上候様に堅定め、已來ともた  
 いせつ一身に立合末代まで相替不申候様に思ひ定めたることく、せびいや  
 より相定之やくそく之判被下候、其たいせつ記に吾等指物進上申候、然者帝  
 國殿はつは殿御前吾等兩人使者無事に參着候者此望叶申様に御齊覺所仰  
 候、然者其元に餘之ふね道之日らう人上手寄合御座候所承候、かならす  
 御談合被成すくに日本人よりせびいや參候事成左右なる事にて候や極被  
 下候は、今より毎年渡海申様に致可申候、委曲可申候へともふらい、るいす、  
 そてろ委曲口上に被申候間早々申宣候、又此方にをいて似合の御用等も候  
 は、可承候、隨分御馳走可申候、恐々謹言、



慶長十八年

九月四日

伊達陸奥守 (華押)

政宗 (印)

せひいやしたあて

参る人々中

此書狀ハ今日モ尙ホせびるノ市役所ニ保存シアリ右文中ノ天有主ハ神伴てれハ師父ノ義ニシテ老間はつはハろイマ法王ヲ云フ日らウ人ハびろと (Pilot) ニシテ航海士ノ意ナリ

市長ハ此書ヲ得テ政宗ノ好意ヲ謝シ又其希望ニ副ハソコトヲ努ムヘキ旨ヲ述ヘ一行滞在中ハ大ニ之ヲ好遇シ大司教以下市在住ノ重ナル人々モ亦支倉ヲ訪問シテ敬意ヲ表セリせびる市トまどりつど政府ト數回ノ交渉ヲ重ネタル後市費ヲ以テ一行ヲ首府ニ送ルコトナシ十一月二十五日出發こるとは (Cordova) へれど (Toledo) ヲ經到ル處大ニ歡迎セラレ十二月二十日まどりつど (Madrid) ニ着セリまどりつどニ於テハ一行ヲさんふらんしすこ派ノ僧院ニ止宿セシメ諸費ハ政府之ヲ負擔シ翌千六百十五年一月三十日國王ハ使節ヲ宮中ニ引見シ支倉

ハ政宗ノ書ヲ呈シそてろハ先キニむによすノ齋ラセル使節ノ趣旨ヲ貫徹セントシテ來リシ旨ヲ述ヘ國王ハ兩人ヲ勞ヒ大臣等ヲシテ來使ノ事ニ關シ協議セシムヘシト云ヘリ二月七日ニハ政宗ヨリ國王ニ獻スル贈物ヲ呈シ同十七日支倉ノ希望ニヨリ國王皇族大官列席ノ上さんふらんしすこノ寺院ニ於テ洗禮ヲ行ヒ之ニどんふえりべふらんしすこ (Don Felipe Francisco) ノ教名ヲ與ヘリ政宗カいすばにや國王ニ呈セル書竝ニいすばにやト協定セント欲シタル條々左ノ如シ

伊達政宗ヨリいすばにや國王ふいりつづ三世に與ヘシ書

乍恐申上候從先年其許大國被成御治候帝王之由及承候處に此度伴天連布羅以類子曹天呂以物語御威光之通具承候内々申通度存候處に去年又濃毘數般之びぞれいめさしこ總督より爲使者日本之帝王へ被相渡候ぜねらるせばすちあんびすかひの (General Sebastian Vizcaino) 某國へ被參候御國濃毘數般より吾等國へ海路事之外近之由被申條向後爲可申談布羅以類子曹天呂を頼入爲使者相渡申候先年此伴天連を日本之從帝王使者に可被相渡之



由被申定候得共、俄に煩之故無其義候、爲名代別之伴天連渡し、被申候、此度は伴天連煩も快氣之事に候間、使者に頼候而渡申候、此伴天連より貴き天有主天道之御法聽聞仕候、一段聞入大切に雖存候難去指合之事御座候間、未無其義候、乍去某分國中下々にす、め可申候間、さん、ふらんしすこの御門派之内おぜればんしやの伴天連衆御渡可被下候、隨分御馳走可申候、左様に御座候者、向後爲可申入候、此度我等船を造りのびすばんやまて相渡申候、此船に伴天連御渡可預候、毎年渡海させ可申候、然者濃毘數般におゐて某船之義御馳走頼存候、同船衆など入申事萬々被仰付可被下候、尤御國中者不及申濃毘數般のひそれい(總督)ろそんの屋形(太守)あま川のかびたんまうる(媽港長官)まゐるこもろつか(諸島)のこべるなるどうる(太守)へ我等船參候共、無相違様に被仰付可預候、並御判可被下候、又我等國へ從其許舟共參候者、如其御馳走可申上候、又ろそんよりのびすばんやへ參申船、自然我等國へ被着候者、何篇自由に可申付候、若船など損申共、我等國においては道具以下少も無如在申付相渡可申付候、又船など作申度と御座候者、材木等無機遣可申付候、何へも此由

可被仰付候、彌申合條々以一書別而申入候、猶伴天連可申上候、自然伴天連道にて被相果候者、曹天呂被申置候、伴天連可被申上候條可被成其心得候、猶又爲使者侍壹人相渡申候、是式に御座候へ共、日本之道具五色令進上候、何方も伴天連口上に可被申上候、早々申達候、恐惶謹言、

慶長十八年九月四日

多すばんやの國大帝王どん、ひりつべ様進上

申合條々

- 一、貴き天有主之御宗門に於吾等國下々罷成候義、少もさまたけ申間敷候間
- 一、さん、ふらんしすこの御門派之伴天連衆御渡可被下候御馳走可申事、出入
- 一、毎年伴天連衆爲渡海此度我等船を作り、濃毘數般まで渡申日本之道具相
- 一、渡申候、其國之道具をも無相違御渡可有之候拙者遣用のためにて候事、
- 一、船渡海のため役者、こぐしや入次第に御やと御かし可被成候、若船損候者
- 一、作直し候時分御馳走頼存候事、
- 一、ろそんよりのひすばんやへ參候船若我等國へ參候者馳走可申、損し候者



道具已下無相違可申付候、但作直し候とも馳走可申上事、

一、於吾等國船御作被成度候者材木鐵已下大工等入程之事其時之隨様子下知可仕事、

一、御分國より船參候者如何様にも自由にあきなひ已下可申付候其上馳走可申上事、

一、於吾等國南蠻人在付候者屋敷已下無相違可申付候尤南蠻人之中に出入曲事候子細公事等於有是は其頭人に相渡其旨次第に可仕事、

一、いんぎりす(英人)あらんてす(蘭人)何も帝王之爲敵國より參候者我等國に而者崇敬申間敷候、委細者伴天連布羅以、頼子、曹天呂口上に可被申上事、

一、ゑすばんやの帝王三代目のどん、ひりつべ様於日本奥州之屋形伊達政宗一味申談上者互於何事も不可有相違事、

以上

慶長十八年九月四日

ゑすばんやの國大帝王様

右書狀並ニ協約案ニヨリ政宗ノ希望セル所ハめきしこトノ交通貿易ニアリシハ明ナレトモ豫テびすかいの等ノ談ニヨリ單ニ貿易ノミヲ以テいすばにや政府ノ承諾ヲ得ルコト難キヲ知リ第一項ニ宣教師派遣ヲ乞ヘリ、當時いすばにやニ於テハ國王ヲ始メトシテ基督教ノ布教ニ最モ熱心ニシテ、ろゝ法王モいすばにや國王ニ最モ正統ナル國王(the most Catholic King)ノ稱號ヲ呈シ、日本ノ如キ遠國マテ其力ニヨリテ斯教ノ弘布セラル、コトハ國王ノ喜ヒ且ツ名譽トスル所ナリシカハ、いすばにや政府ハ直チニ政宗ノ希望ヲ容ル、ナラント思ハレシニ、其結果ハ意外ニシテ支倉等ハ空シク數ヶ月ヲ交渉ノ爲メニ費シろゝニ到ルコトモ容易ニ許サレサリキ、其ノ此所ニ至リシハ第一宗派ノ争ヒ第二まにらニ於ケル貿易ノ維持主要ナル原因ヲナセリ、  
日本ニ始メテ基督教ヲ傳ヘシハ、びえる(Xavier)ニシテ彼ハ當時新ニ起リテ特ニ外國宣教ヲ目的トセシ耶蘇會(Company of Jesus)ニ屬シ、日本ノ宣教ハ彼ノ計畫ニヨリ著々其歩ヲ進メシヲ以テ終ニ法王ヨリ日本ハ耶蘇會ノミニテ教化スヘキ特權ヲ與ヘラレタリ、然ルニ西洋トノ交通彌頻繁ナルニ及ヒテ他宗派ノ者ニ



シテ竊ニ日本ニ渡來スルモノアリ、終ニまにらヨリ他派宣教師ノ渡來スルコトヲ公然認可スルニ至レリ、此度さん、ふらんしすこ派ノ宣教師幕府ニ説キテいすばにやトノ親交ヲ結ハシメ、又政宗ニ勸メテいすばにや國王竝ニ法王ニ使者ヲ送ラシムルニ及ヒテ若シ此舉ニシテ成效セハ日本ニ於ケル同派ノ勢力増加シ或ハそてろ自ラ司教(Bishop)トナルニ至ラントノ懸念ヨリ、日本ノ耶蘇會員ヨリいすばにや及ヒろトモノ同會員ニ宛テ此度ノ使節ハ日本皇帝ノ派遣スル所ナリト稱スルモ其實然ラス、又政宗ハ皇帝ノ臣下ニシテそてろ等ノ稱スル如キ勢力アル國王ニアラス、且ツ日本ニ於テハ基督教ハ嚴禁セラレ現ニそてろ出發ノ際ニモ大迫害起リ彼自身モ捕ヘラレテ刑ニ處セラレントセル事ヲ述ヘ使節ノ眞意ハ單ニ貿易ノ利ヲ得ントスルニ留マレル旨ヲ報シ大ニ妨害ヲ試ミタリまにらト日本トノ交通開ケテヨリまにらハ糧食軍需品造船材料等ノ供給ヲ專ラ日本ニ仰キシカハ、若シ直接めきしこトノ交通開ラタルニ至ラハ大ニ其貿易ヲ害セラレントコトヲ恐レ、種々妨止ノ策ヲ廻シ曩ニどん、ろどりごカ此計畫ヲ立テシ時モまにら市ハ書ヲいすばにや王ニ送リテ反對ノ意見ヲ陳述セリ

伊達ノ使節ノ一行ト同船シテめきしこニ還レルびすかいのハ日本出發ノ當時ヨリそてろノ處置ニ不滿ナル所アリ、總督ニ向ツテ、日本ノ現況ヲ述ヘ此度ノ使節ハ唯タ貿易ノ利ヲ目的トシ且ツ其貿易ノ利モ單ニ日本ノ側ニノミアリテめきしこハ何ノ益スル所ナク、却テ日本人カ航海ニ熟スルカ爲メ同地ノ安危ニ關スルコトアルヘキヲ説キタレハ、一行ノめきしこニ着セシ際總督ハいすばにやニ到ルノ便宜ヲ計リシト雖モ大ニ之ヲ歡迎セサリキ、いすばにや政府ハ此等諸方面ノ報告ニ接シ一行到着後數回ノ評議ヲ重キタル結果來使ノ希望ヲ容ル、ハ不得策ナリトシ、親交ヲ結フハ其望ム所ニシテ基督教ノ弘布ニ關シテハナルヘク便宜ヲ與フヘシト答ヘ、直チニ歸國セシメントセシカハ、そてろ等ハ日本ニ於テ基督教ニ大迫害ヲ加ヘシハ事實ナレトモ、是レハ曩ニむによすヲ遣シテ親交ヲ結ヒ貿易ヲ開カンコトヲ求メタルニ何ノ答フル所ナカリシカ故ニ日本皇帝カ憤怒シタルニヨレルモノニシテ、政宗ノ領内ニ於テハ依然宣教師ノ便宜ヲ與ヘツ、アリトテ反對者ノ論ヲ駁シ、更ニ利益アル返答ヲ求メ、又ろトモニ到リテ法王ニ敬意ヲ表スルノ許可ヲ請ヒ漸ク許サレテ八月末まどりつどヲ發シ陸路



ぼるせろなニ至リ、同所ヨリ海路いたりやノぜのあニ着シ更ニ船ニテちびた、べつみや(Ovita Vecchia)港ニ至リ同地ヨリ馬車ニテろトマニ向ヒ十月二十五日同所ニ着セリ、二十九日ハばちかん(Vaticani)ノ宮中ニ於テ法王ぼーる五世ニ謁見シ政宗ノ書狀ヲ呈セリ、其書ニ曰ク

於世界廣大成貴御親五番目のばつは、ばうる様(Papa Paulo)の御足を於日本奥州之屋形伊達政宗謹而奉吸申上候

於吾國さん、ふらんしすこの御もんぱの伴天連ふらいるいす、そてろたつとさでうす之御法をひろめに御越之時我等所へ御見舞被成候、其口よりきりしたん之様子何れもてうすの御法之事を承わり申候其付しあん仕候、程しゆせうなる御事まことの御定め之みちと奉存候、それにしたかつてきりしたんに成度乍存今之うちは難去さしあわせ申子細御座候而未無其儀候、乍去某分國中おしなへて下々迄きりしたんニ罷成申候やうにす、め申可ためにさん、ふらんしすこ之御もんぱのうちにわうせればんしや(Observancia)之伴天連衆御渡被成可被下候、何やうにもしゆせう大切可存候、御渡被成候

其伴天連衆に萬事に付而御ちからを御ゆるし候て可被下候、其伴天連衆に我等手前より寺をたて萬に付而御ちさう可申候、同我國之うちにあゐてたつときでうすの御法を御ひろめ被成候ために可然と思食候程之事被相定可願候、別而大きなつかさ(司教)を御一人定め被下可願候、さやうに御座候者頓而々々皆々きりしたんに罷成候事一定と奉存候、我等何やうにも請取申候間御合力之儀すこしも御きづかひ被成間敷候、是に付而我等心中に存候程の事此ふらいるいす、そてろ被存候間貴老様御前奉叶申やうに頼入り我等使者と相定渡申候、其口を御聞候て可被下候、此ふらい、そてろにさしそへ候我等家の侍一人支倉六右衛門と申者を同使者として渡申候、我等めうだいとして御したかひのしるし御足をすいたてまつるために態ろうま迄進上仕候、此伴天連そてろみちに而自然はてられ候は、そてろ被申置候伴天連をおなしやうに我等か使者とねほしめし候て可被下候、某之國とのひすはんにや之あひた近國に而御座候條向後急すばんやの大帝皇どん、ひりつべ様と可申談候、如其元被相調可被下候、伴天連衆渡海成ため奉頼存候、猶



以某之上貴きてうす天道之御前におゐて御ないせうに叶申やうに奉頼申候。猶此國如何様之御用等可被仰付候。隨分御奉公可申上候。是式に御座候得共日本之道具乍恐進上仕候。猶此伴天連ふらい。るいす。そてろと六右衛門口上に而可申上候。其くち次第に可被成候早々恐入候。誠恐誠惶敬白

慶長十八年

伊達陸奥守(華押)

九月四日

正宗(印)

於世界貴御親五代目之ばつは、ばうろ様

進上

政宗カ支倉ヲろゝニ遣シタルハ右ノ書狀ニ見ユルカ如ク、法王ニ敬意ヲ表シ自領内ニ於テ基督教宣傳ノ便宜ヲ謀ルタメ、司教(Bishop)ヲ置キ、教師ヲ派遣シ、又新しいすばにやト貿易ヲ開クニ付助力センコトヲ求ムル爲メニシテ、法王ハ新ニ基督教ニ歸依セル遠邦ノ使者ヲ見テ大ニ喜ヒ、其希望モ多クハ之ヲ容レ、いすばにや政府ト協議シテ十分ノ便宜ヲ與ヘンコトヲ其政府ニ命シ、一行ノ滞在中心ハ大ニ好遇シてろヲ日本ノ司教ニ任セリ。ろゝ市ヨリモ支倉ヲ貴族ニ列シ、一行ノ武士ニ市民權ヲ贈レリ。千六百十六年一月七日支倉等ハろゝヲ發シ同十八日ふろゝれんすニ至リテ太公ヲ訪ヒ、りぼるの(Livorno)ヲ經テ海路ぜのあニ至レルカ、同所ニ於テ支倉ハ病ヲ得テ暫ク滞在シ、三月中旬病漸ク癒エテばるせろなニ渡リ、まどりつどヲ經テせびるニ着セルハ五六月ノ交ナリキ、一行ハ初メろゝニ滞在中歸途べにすニ立寄ル考ナリシカ、行程ヲ急キシ爲メ同行ノ宣教師一人ヲシテ支倉及ヒそてろノ書面ヲ携ヘテ同地ニ赴カシメ、政宗ノ希望ヲ述ヘ布教上ニ其助力ヲ乞ヘリ。支倉等ハろゝニ於テ優遇ヲ受ケタレハいすばにやニ還リテ後豫期ノ條約ヲ結ヒテ歸國セント欲シ、頻リニ奔走セシカ、政府ハそてろカ王命ニ背キ法王廳ニ對シテ運動セルヲ咎メ、其請ヲ容レス。政宗ニ與フル答書ニモ單ニ兩國ノ間ニ親交ヲ結フヲ喜ヒ、基督教ノ弘布ニハ十分ノ盡力ヲナサントノ事ヲ記ルスニ止メ、そてろカ日本ノ司教トシテ仙臺ニ在留スルコトヲ承認セス、且ツ使節ノ目的タルめさしシテ貿易モ許サス、一行ハ永クせびるニ滞在シ使節ノ目的ヲ達セスンハ生キテ歸國セストノ決心ニテ、市長其他市有力者ノ盡力ヲ求メシモ其效ナク、遂ニ千六百十七年秋めさしシニ渡レリ。



是ヨリ先キふらい、あるんを、むによすハ家康ノ命ヲ帶ヒめさしコレヲ經テいすば  
にやニ渡リ、千六百十一年十二月までりつどニ着シテ家康并ニ秀忠ノ書及ヒ贈  
物ヲ呈シ交通貿易ノ希望ヲ通セリ、

○家康いすばにや國王ニ呈セル書

多すばんや、とふけい、てい、れるま、れるま、侯、Dugue de Termas)

申給へ

のひすはんやより日本ハ黒船可被渡由前呂宋國主(ドンイブ)被申越候、於  
日本何之港へ雖爲着岸少も疎意在之間敷候委細此伴てれ、ふらい、るいす、そ  
てろ可申候

慶長十四年十二月二十八日

家康印

○秀忠いすばにやノ宰相れるま、侯ニ贈レル書

日本國 征夷將軍 源秀忠

多すはんや國主 とうけい、てい、れるま 机下

のひすはんやより至本邦商船可令渡海之由前呂宋國主被申贈候日域之地  
雖爲何之津港着岸之儀不可有異儀候隨而鎧五兩相送之委曲伴天れ、ふらい、  
あるんを、むによす、ふらい、るいす、てろ可申候也

慶長十五年五月四日

秀忠印

國王ハ右ノ書及ヒ贈物ヲ領シ日本ノ希望ニ應スヘキカ否カラいんど事務顧問  
會議ニ諮問シ其決議ヲ經テ一度之ニ應セント決セルカ偶々まにらヨリ反對意  
見ヲ上奏セルニヨリ一時之ヲ中止シ、千六百十三年初夏再議ノ上終ニ日本ノ望  
ニ任セテ貿易ヲ開キ、めさしコレヨリ年々一隻ノ船ヲ渡スコト、シ、國王ヨリ家康  
并ニ秀忠ニ答フル書ト贈物ヲむによすニ交附セリ、むによすハ病ノ爲メニ日本  
渡航ヲ辭シテせびるヨリ引返シ他宣教師代リテめさしコレニ至レルガ、其未タ日  
本ニ渡ラサルニ當リテ支倉ノ一行めさしコレニ到着シ、日本ニ於ケル迫害ノ報傳



ハリびすかいのノ如キ自己ノ經驗ニ徴シテ極力日本貿易ニ反對ノ意見ヲ述フ  
 ルモノアリシカハ總督ハ此使者ノ派遣ヲ延期シ、千六百十四年二月初本國政府  
 ノ訓令ヲ求メタリ、政府ハ是ニ於テ單ニ答禮ノ使者トシテ日本ニ至ラシムルコ  
 ト、シ、國書ヲ改メ貿易船ヲ發スルノ條ヲ削リテ、隣交ヲ結フコトヲ喜フノ意ニ  
 止メタルモノトシ、贈物ヲ添ヘテ日本ニ遣スコトヲ命シタレハ、總督ハ曩ニ抑留  
 セシ政宗ノ船ニ使者ふらい、ぢえご、で、さんた、かたりな (Fr. Diego de Santa Catalina)  
 ヲ便乗セシメ、千六百十五年四月二十八日あかぶるこヲ出帆セシメタリ、  
 同船ハ同年八月(元和元年閏六月)浦河ニ着シ、使者ハ二ヶ月ノ後ニ家康及ヒ秀忠  
 ニ謁見セルカ、其齎セル返答家康ノ望ニ副ハス、いすばにやノ態度ニ付テハ前來  
 不快ナル所尠カラサリシカハ終ニ贈物ヲ退ケ一行ヲ遇スルコトモ甚タ厚カラ  
 サリキ、一行ハ是ニ於テめさしこニ歸ラント欲シ、便船ヲ求ムレトモ得ス大ニ苦  
 シメルヲ政宗好機乘スヘシトナシテ支倉等迎ノ船ヲ發スルコト、シふらい、じ  
 えご等ヲ説イテ之ニ便乗セシメ、元和二年初秋めさしこヘ向ケ出帆セシメタリ、  
 此時政宗ハ總督ニ送り日本船再航ノ理由ヲ辯明シ禁ニ背キタル爲メ船員カ處

罰セララル、コトナカラシコトヲ謀レリ、

○伊達政宗のびすばにや總督ニ與ヘタル書

一書令啓上候先年我等船相渡申候處種々御馳走殊歸朝之砌あんじん(即チ針  
航海士)舟衆被仰付無事令着岸大慶此事候然者日本將軍より墨印給此度船  
 相渡申候先年船渡申候刻奥南蕃之帝王様(いすばに)へ伴天連曹天呂ニ使者  
 相添進上申候當年其許迄可罷歸候間此舟ヲ堅渡申様にと會天呂より申來  
 候條其首尾と申相渡申候定而奥之帝王様より御朱印可相調候間自今已後  
 ハ年々渡海させ可申候條萬事可然様ニ奉頼候明年ハ此船歸朝可仕候間あ  
 んじん役者こくしや被仰付御渡可被下候此便舟に商人荷物つみ候て相渡  
 申候間歸朝前道具共仕廻申様ニ被加御詞御裁判奉頼候於日本相應之御用  
 等可蒙仰候聊不可有疎意候是式ニ候へとも此國の道具三色令進候并御上  
 様へ同三種進候已來ハ其許御用之道具渡可進候委曲かびたん横澤將監口  
 上ニ申合候間不能詳候恐惶謹言

元和二年七月二十四日



のびすはんや國ひそれい様(新いすばに)

めきして總督ハ日本人カ航路ヲ知り後患ヲ醸スニ至ランコトヲ恐レテ曩ニ再  
 ヒ渡來スルコトヲ嚴禁セシカ、いすばにやノ使節ヲ送還シ又政宗ノ使者ヲ迎ヘ  
 ンカ爲メニ來リ、其名義正シキヲ以テ之ヲ赦シ、千六百十九年二月支倉等ヲ乗船  
 セシメ、ふいりつびん諸島ヲ經テ歸國スルコトヲ許可セリ、其まにらニ着セシ時  
 ハ恰モ和蘭人ト戰ハントスル時ナリシヲ以テ恰モ同航赴任セシ太守ノ請ニヨ  
 リテ船ヲ貸シ戰爭終了後歸國セリ、時ニ我元和六年ニシテ其日本ヲ出テシヨリ  
 歸着セルマテ八年ヲ閱シ、然モ支倉をてろ等ノ盡力ニ拘ハラヌ遣使ノ目的ハ終  
 ニ達スルコト能ハサリキ、そてろハ本國政府ノ命ニヨリテ日本渡航ヲ禁セラレ  
 獨リるそんニ滞在セリ、其間ニ日本ノ形勢大ニ變シ基督教ノ禁彌々嚴シク政宗  
 ノ領内ニ於テモ亦支倉ノ歸朝後間モナク教徒ニ迫害ヲ加フルニ至レリ、そてろ  
 ハ後密ニ日本ニ渡來セシカ捕ヘラレテ寛永元年七月死刑ニ處セラレタリ、此支  
 倉ノ使節ハ千五百八十五年ノ九州大名ノ遣使ト同シク歐洲ノ注意ヲ惹キ日本  
 ヲ紹介セシ功大ナリシモ、種々ノ障害アリテ遣使ノ主要ナル目的ヲ達スル能ハ

サリシハ遺憾ノ極ナリ。

めきして貿易ノ計畫ハ右ニ述ヘタル如ク失敗ニ終リシカるるそんトノ交通ハ依  
 然トシテ繼續シ太守ノ本國政府ニ送レル報告書ニハ常ニ日本トノ交ヲ親クシ  
 時々使節ヲ派遣シ將軍并ニ權臣ニ贈物ヲナスノ必要アルコトヲ述ヘ、殊ニねら  
 んだ人カ漸次確實ナル地步ヲ占メ、日本ヲ根據トシテ支那海及ヒ南洋ニ於テい  
 すばにや、ぼるとがるノ船ヲ捕獲スルヲ見テ、益々日本政府ト親シクシ、ねらんだ  
 人ヲ排斥セシメント謀リシカ、當時日本ニ於テハ前ニ説ケル如ク基督教ノ害ヲ  
 恐レいすばにやノ宣教師カ國禁ヲ犯シテるそんヨリ渡來スルヲ怒リシカ故ニ  
 寛永元年いすばにや人ニ諭シテ其通商ヲ禁スルニ至レリ、るそん政府ハ宣教師  
 ノ渡航ヲ嚴禁シ貿易ノミノ繼續ヲ請ハント欲シテ寛永二年使者ヲ送リシカ日  
 本政府ハ之ヲ退ケるそんトノ交通ハ此時ニ至リテ全ク絶エタリ  
 是ヨリ先キるそんトノ交通盛ナリシ頃、初メ我邦ヨリまにらニ渡航スル船甚々  
 多カリシカ、慶長六年ニハるそんノ請求ニ應シテ毎年一二月ノ交ニ三隻、九十月  
 ノ交ニ三隻ツ、朱印ヲ與ヘテ渡航セシメ、慶長十三年ニハ更ニ減シテ毎年四隻



トナセリ、るそんノ船ハ初メ薩摩ノ港ニ來リシカ家康ノ求ニヨリ應長七年ヨリハ毎年政府ノ發スル定航船一隻ツ、浦河ニ入港シ、其他私船數隻九州ノ港ニ來レリ、而シテ輸入品ノ主要ナルハ鹿皮、支那産ノ生糸、絹織物、いすばにやノ羅紗、歐洲ノ織物等ニシテ、日本ヨリ輸出セルハ小麥粉、鹽豚肉、鯉、鉄釘、武器等ニシテ、金銀貨ヲ以テるそんノ商品ヲ買入ル、コトハ嚴禁セラレタリ、交通斷絶セル後、るそんニ於テ最モ苦痛ヲ感セシハ造船用ノ釘、金物及ヒ食料品ノ缺乏ナリキ、是故ニいすばにや政府モるそん太守ノ報告ニ接シ、諸派ノ管長ニ命シテ宣教師ノるそんヨリ日本ニ渡航スルコトヲ禁セシメ、るそん太守ニハ日本ノ國情ヲ探リ、機ヲ見テ再ヒ交通ヲ開クコトヲ命セシカ、寛永十七年幕府ハ鎖國ノ令ヲ下スニ至リ、いすばにやハ終ニ其目的ヲ達スルコト能ハサリキ、

## 第七章 わらんだノ東洋貿易

あらんだハちやいれす五世ノ死後いすばにや王ふいりつど二世(Philip II)ノ治下ニ歸セシカ、人民ハ王カ舊教ニ熱心ナルノ餘リ新教徒ヲ迫害シ、宗教裁判(Inqui-

sition) 制度ヲ實施セントスルヲ見テ暴舉シタレハ、王ハ千五百六十七年あるば侯(Duke of Alva)ヲ遣シテ之ヲ鎮壓セシメタルニ、其處分嚴ニ過キタルカ爲メ北方ノ諸州漸ク叛キ、千五百七十二年おれんじ公(William of Nassau, Prince of Orange)ヲ仰キテ盟主トナシテ屢々いすばにや兵ヲ敗リ、千五百七十九年ニハ北方ノ七州ゆとれひと同盟(Union of Utrecht)ヲ組成シ、千五百八十一年ニ至リテ獨立ノ宣言ヲナセシカ、英國ハ率先シテ之ヲ承認シ、又大ニ助力ヲ與ヘタリ、是ヨリ先キいすばにや、ぼるとがるノ兩國ハ法王ノ令ニ基キテ新發見地ノ貿易ヲ獨專シ、あらんだノ如キモ商船ヲりすぼんニ送リテ東洋ノ貨物ヲ仕入レタルカ、千五百八十一年いすばにや王ぼるとがるヲ併セ領スルニ及ンテ蘭船ノりすぼんニ入港スルコトヲ禁セシカ、蘭人ハ自ラ東洋貿易ヲ開クノ必要ヲ感シ、頻リニ西北ノ航路ニヨリテ東洋ニ到ランコトヲ謀レリ、其頃あらんだ國えんくほいぜん(Enkhuizen)ノ人りんすほーてん(Jan Huyghen van Linschoten)りすぼんニ至リ、いんどノ大司教ノ家人トナリ、千五百八十三年彼ニ隨ヒテごあニ渡リ、留ルコト六年ニシテ、千五百八十九年初いんどヲ發シ、千五百九



十二年りすぼんヲ經テ古郷ニ歸リ其見聞セル所ヲ録シテ東印度航海記 (Voyage ofte Schipvaart naar Ooste ofte Portugaels Indien)ト題シ千五百九十四年ヨリ千五百九十六年ニ亘リテ之ヲ出版セリ、該書ハ東洋事情及ヒ航路ヲ紹介セルモノニシテ、第一編第二十六章ニハ其知人ニシテ千五百八十五年日本ニ航海セルヘるリッヂー (Dirck Gerritsoon) ヨリ聞キタル所ヲ主トシ諸書ヲ參考シテ作レル日本ノ記事ヲ載セタリ、おらんだニ於テハ豫テ東洋貿易開始ヲ希望セル折柄本書ノ著アリ、又りんすぼん及ヒ同時ニ歸郷セルヘるリッヂー等ノ盡力ノ效ニヨリ千五百九十四年貿易會社設立セラレ千五百九十五年四隻ノ船ヲ東いんどニ送り、千五百九十八年又五隻ヲ發セリ、此艦隊ハ六月二十七日あむすてるだむ港外ノてきせる (Texel) ヲ出テ、まぜらん海峡ヲ經テ南洋ニ向ヒシカ、途中暴風ニ遭ヒテ或ハ歸航シ或ハ難破シ僅ニ一隻東洋ニ來リ、慶長五年三月(千六百年四月十九日)豊後ノ海岸ニ漂着セリ、該船ハリッヂー(De Liefde)ニシテ、生存セルハ船長やこぶくわけるな( Jacob Quaeckernaek)航海士ういりあむあだむす(William Adams)船員やん、ようすてん (Jan Joosten) めるひよる、ふあん、さんとふちーると (Melchior van Santvoort) 等二十一一人ナリシカ、豊後ヨリ大阪ヲ經テ關東ニ至リ、家康ノ給

與ヲ受ケテ日本ニ滞在スルコトヲ命セラレあだむす及ヒよーすてんハ屢々家康ニ招カレテ西洋ノ事情ヲ語リシト云フ、あだむすハ後家康ノ命ニヨリテ八十噸及ヒ百二十噸ノ船ヲ造リ其一隻ハどんろとりゴヲ載セテめさしこニ至リシカ其爲メ大ニ家康ノ信用ヲ増セリ、千五百九十五年おらんだヲ發セルはうとまん (Houtman) ノ艦隊ハ喜望峯ヲ廻リテじやば島 (Java) ニ來リ、附近諸島ヲ巡視シ其產物ヲ搭載シテ歸國セシカ、おらんだノ商人ハ東洋航海ノ成效ヲ見テ千五百九十九年ニハびーてる、ぼつと (Pieter Both) やこぶうらるけんす (Jacob Wilkens) ヲシテ各四隻ノ船ヲ率キテ南洋ニ航セシメタリ、千六百年ニハふあん、ねつく (Jacob van Neck) 又六隻ノ艦隊ヲ率キテもろつか諸島ニ渡リ、千六百一年七月てるないてヲ發シ廣東附近ニ來リ同所ヨリ引返シテまれー半島 (Malay Peninsula) ノ東岸ニ在ルばたに (Patani) 太泥及ヒじやばノばんたん (Bantam) ニ寄航シテ本國ニ歸レリ、千六百二年三月おらんだノ貿易會社ハ聯合シテおらんだ東いんど商會 (Dutch-



Privileged East India Company)ヲ組織シ政府ヨリ東洋貿易ノ独占權ヲ附與セラレ  
 ばんたん及ヒぱたにヲ根據トシテ南洋及ヒ支那ノ貿易ニ從事シ、又いすばにや、  
 ほるとがるノ船ヲ洋上に襲ヒまかお、ふいりつびん諸島もろつか諸島ノ殖民地  
 ヲ攻メ政治宗教ノ敵ナルいすばにやヲ困シメントセリ、  
 日本在留ノ蘭人ハ右ニ述ヘタルおらんだノ東洋貿易開始ノ報ヲ得テくわける  
 なつく及ヒさんとふ、いとハ家康ノ許可ヲ得、蘭船通航免許ノ朱印狀ヲ請ヒ、平  
 戸ノ領主ノ船ニ乗リテ日本ヲ去リ千六百五年十二月ぱたにニ着セリ、當時まで  
 りえン(Matelief de Jong)十隻ヨリ成レルおらんだ艦隊ヲ率キテしんがぼ、る附  
 近ニ在リシカハ同所ニ至リ家康ノ書及ヒ朱印ヲ示シ、日本貿易ノ有望ナルコト  
 ヲ説ケリ、まてりえふハ家康ノ書ヲ直ニ本國ニ送り、自ラ機ヲ見テ日本ニ航セン  
 ト欲シ、千六百七年九月媽港近海ニ來リ日本ノ海賊船ニ會セシ時モ遠カラス平  
 戸ニ至ルヘキヲ以テ歸國ノ上領主ニ傳ヘンコトヲ求メシカ、葡國ノ殖民地ヲ攻  
 メ又屢々葡船ト戦ヒ船艦ノ損傷尠カラス東洋滞在ノ期モ永クナリシカ故ニ終  
 ニ其意ヲ果サスシテ本國ニ歸航セリ、ぱたにノねらんだ商館長すぷりんける(Vi-

otor Sprinckel)ハ千六百八年二月家康ニ書ヲ呈シ、右ノ事情ヲ述ヘ蘭人ニ對スル  
 家康ノ好意ヲ謝シ、本國政府ヨリ遠カラス通商ヲ求ムル爲メ船ヲ發スヘキ旨ヲ  
 報セリ、

おらんだ人ハ獨立ノ宣言ヲ發シタル以來東西兩洋到ル處ニ於テいすばにや人  
 ぼるとがる人ト戦ヒ國力益々増進シ敵國ヲ壓スルニ至リシカハいすばにや政  
 府ハ委員ヲは、いぐ(The Hague)ニ派遣シ、おらんだノ獨立ヲ認メ、總ヘテ現状ヲ維  
 持スルヲ條件トシテ千六百九年四月十二ケ年間ノ休戰條約ヲ締結セリ、右談判  
 ノ進行中東印度商會ハ一隻ノ船ヲ東洋ニ特派シテ、おらんだ艦隊ノ指揮官ニ前  
 述ノ協約成立ノ見込アルヲ以テ成ルヘク速ニ日本其ノ他東洋諸國ノ君主ト通  
 商條約ヲ締結センコトヲ命セリ此頃東洋ニ在リテおらんだ艦隊ヲ指揮セシハ  
 千六百七年本國ヲ發セシふえん(Willlem Vervoeyen)ニシテ千六百九年  
 初じやば近海航行中ニ此命ニ接シ、當時じよほる(Johor)ニ碇泊セシおらんだ船  
 ろ、いでれ、いゆ、一號(the Roode Leeuw)及ヒぐりふ、一號(Griffioen)ニ同年媽港ヨリ日本  
 ニ航海スル葡船ヲ途ニ邀撃シ、若シ之ニ出會セスハ進ンテ日本ニ至リ通商條約



ヲ結フヘキコトヲ命セリ是ニ於テ兩艦ハじよほるヲ發シ、ばたにニ寄航シテ生糸胡椒等ヲ搭載シ、台灣海峽ニ於テばるとがる船ヲ待チシカ媽港ニ於テハあらんだ人ノ計畫ヲ探知シ期ニ先チテ船ヲ發シ支那海岸ニ沿ウテ航行シ風雨ニ乗シテ巧ニ蘭船ノ監視ヲ脱レシヲ以テ日本ニ向ヒ千六百九年七月一日長崎港口ニ着シ水先案内ヲ得テ平戸ニ赴ケリ、是レ平戸ノ領主カ曩ニくわけるなつく等ヲ好遇シ蘭人ノ來航ヲ促セシヲ以テナリ、平戸ニ着シテ後領主ハ厚ク蘭人ヲ遇シ、長崎代官ノ斡旋ニヨリ船員中數人ヲ駿府ニ遣シテ國書ヲ奉呈シ通商ノ許可ヲ求メ之ヲ許サレタリ、此時家康カ與ヘタル朱印ハ左ニ掲クルモノニシテちやくす、くるらんへいけハじやつくす、ぐるーねうらげんと云フふえるふーふゆん部下ノ重ナル事務員ヲ指セルナリ

あらんだ船日本ニ渡海之時何之浦に雖爲着岸不可有相違候向後守此旨無異儀可被往來聊疎意有間敷候也仍如件

慶長十四年七月廿五日

(家康朱印)

ちやくす、くるらんへいけ

派遣員カ右ノ朱印及家康ヨリあらんだ國主ニ贈ル書ヲ得テ平戸ニ歸着セル後慶長十四年八月二十二日あらんだノ船長以下重ナル船員ノ會議ヲ開キ、平戸ニ商館ヲ置キすべつくす (Jaques Speck) ヲ長トシ、補助員三人僕一人ヲ附シ、向ホ曩ニくわけるなつくノ船ニテ日本ニ來リ引續キ滞在セルヤン、こーさいんす (Jan consijns) ヲ通譯トシテ雇入レ、商品トシテ生糸原價一萬五千二百ぐるでん餘、鉛二千餘斤胡椒一萬二千びくる<sup>(一びくるハ百三十三英斤ニ當ル)</sup>ヲ遺スコトニ決シ、直ニ耐火藏附ノ家一軒ヲ借り入レタリ、兩船ハ其命セラレタル所ヲナシ了リ九月六日出帆十月三日ばたに寄港十一月五日ばんたんニ着セリ、スーでれーゆー號ハ千六百十年一月十日同地ヲ發シ七月二十日あらんだノてきせる (Texel) ニ着キ同船乗組ノ事務員あぶらはむ、ふあんでん、ぶるーく (Abraham van den Broek) ハ八月二日ノ東いんど商會重役會議ニ於テ日本トノ貿易開始ノ顛末ヲ報告シ、重役ハ日本貿易ヲ盛ニスヘキコトヲ議決シふあんでん、ぶるーく以下委員ノ調査シタル日本向貨物ヲ二隻ノ船ニ搭載シ同年十二月中旬出帆セシメタリ、



是ヨリ先キ慶長十四年蘭人ノ日本ヲ去ルニ臨ミ翌年ノ時風期ニ船ヲ送ルコトヲ約セシカ其約ヲ果サ、リシニヨリ、すべつくすハ商品ノ缺乏ニ困シミ慶長十五年十月補助員二名ヲばたに及ヒ暹羅ニ遣セリ其結果慶長十六年五月ぶらつく號(Black)ばたにヨリ平戸ニ來リ補助員等ハ日本じやんく船ニテ暹羅ヨリ歸レリ、慶長十七年七月ニ至リテろゝてれゝゆゝ號あらんだヨリ來着シあらんだ國主まうりす(Maurice)ヨリ家康ニ送ル書(千六百十年十月十八日付)ヲ呈シ家康ハ之ニ對シテ慶長十七年十月答書ヲ與ヘ新ニ朱印ヲ授ケあらんだノ日本貿易ノ基礎是ニ於テ彌、確立セリ

あらんだ人ハ既ニ述ヘタル如ク或ハ東航シ或ハ西航シテ東洋ニ來リ終ニ極東ノ日本ト交通スルニ至リシカ此ノ航海貿易ノ業務ヲ執レルハ東いんど商會ニシテ、あひすてるだむ(Amsterdam)ゼーランド(Zeeland)ろつてるだむ(Rotterdam)てるふと(Delft)ほーるん(Hoorn)及ヒえんくほいぜん(Enkhuizen)ノ六分社(Chambers)ヨリ成リ、各分社ノ事務ヲ管理セルハあひすてるだむ二十三人、ゼーランド十四人、てるふと十二人、ろつてるだむ九人、ほーるん四人、えんくほいぜん十一人、總計七十

三人ノ支配人(べういんとへつべる Bewinthebber ト稱ス)ニシテ、此中ヨリあひすてるだむ八人、ゼーランド四人、爾餘ノ四分社各一人及ヒゼーランド以下五分社ヨリ交々一人總計十七人ヲ選ヒ商會ノ總務ヲ掌ラシメタリ、之ヲ十七人會ト稱シあひすてるだむニ常置シ此會ニ於テ貿易船ノ數、出帆ノ時期、寄航ノ地其他貿易ニ關スル要件ヲ定メ又利益配當ヲ議決セリ、各分社ハ十七人會ノ命ヲ奉シテ船ヲ艤裝シ之ヲ出發港ニ送レリ、而シテ各分社ノ負擔額ハ豫シメ一定シアリあむすてるだむ半額、ゼーランド四分一、ろつてるだむ及ヒてるふと八分一、ほーるん及ヒえんくほいぜん八分一ノ割合ナリキ、商會ノ資本金ハ總額六百四十四萬九千五百八十八ぐるでん(Gulden)四すとしふえん(Stuiver)ハシテ其内譯左ノ如シ

あひすてるだむ	三六八、七四一五	分社	六分社(Chambers)
ゼーランド	一三〇、六六五五	分社	四分社
えんくほいぜん	五四、一五六二	分社	一分社
てるふと	四七、〇九六二	分社	一分社
ほーるん	二六、八四三〇	分社	一分社



ろつてゐるだじ

一七、四五六二

一〇

總計

六四四、九五八八

四

株主ハおらんだ國民ニ限り株金ハ一株何程トノ定ナク、各人隨意ノ額ヲ釀出スルコトヲ得ルコト、セリ、あむすてゐるだじ分社ノ資本金ハ株主千二百餘人ノ釀出セル所ニシテ一人ノ拂込額多キハ六萬ぐるてん少キハ七十五ぐるてん、百ぐるてんナリシト云フ、おらんだ政府モ亦商會カ特許料トシテ納メタル二萬五千ぐるてんヲ現金ヲ以テ收納セス之ヲ政府ノ特株トシ商會ヨリ利益配當ヲ受ケタリ

東いんど商會ハおらんだ政府ノ特許ニヨリ喜望峰又ハまぜちん海峡ヲ經由シテ東洋ニ航海スルノ專權ヲ有シおらんだ政府ノ名ヲ以テ該地方ノ君主ト通商條約ヲ締結シ商業ノ安全ヲ計リ秩序ヲ維持スル爲メ城寨ヲ築キ兵員ヲ備ヘ司法警察ノ役員ヲ置クコトヲ得タリ、而シテ外國ニ於テ艦隊及ヒ文武官ノ上ニ立チテ最上權ヲ有セルハ初メ艦隊司令長官ニシテ重要ナル問額アルトキハ副司令官、各船長、各船ノ商人頭及ヒ航海長ヨリ成レル船員大會ヲ召集シテ之ニ諮問

セシカ、司令長官ハ屢々更迭シ政令一途ニ出テサルノ弊アルヲ以テ千六百九年いんど會議(Raad Van Indie)ヲ置キテ之ニ東洋ノ政務ヲ一任セリ、同會議ハ總督及ヒ四人ノ參事官ヨリ成リ參事官ハ貿易、海軍、陸軍及ヒ司法ノ事務ヲ分掌シ、其下ニ總務長官(General Director)一人アリ東洋貨物ノ買入レ、おらんだ輸出品ノ賣捌、船荷ノ積卸シ、其他貿易全般ノ事務ヲ掌レリ、此位置ハ頗ル勢力アルモノニシテ總督ノ後任者ハ屢、此位置ニ在リシモノヨリ出テタリ、千六百二十六年以降ハ員外參事官ナルモノ設ケラレタリ、此ハ參事官ノ缺員アルトキ之ニ代ルヘキ名譽ノ職ナリキ、

最初ノいんど總督ハびーてゐるぼつと(Pieter Both)ニシテ千六百十年赴任セリいんど政廳ハ當初じやば島ノばんたん(Bantam)ニ在リシカ、後同島ノじやかとら(Jacatra)ニ移レリ、おらんだ人此所ニ都市ヲ設ケばたびや(Batavia)ト稱シ、今日ニ至ルマテ東洋ノおらんだ領ノ首府タリ、ばたびやノ名稱ハおらんだ土着ノ人種ばたび(Batavi)ニ取レルナリ。

おらんだ東いんど商會ハ右ノ組織ヲ以テ專ラ東洋ニ於ケル領土ノ獲得ト貿易



ノ擴張トヲ謀リ、漸次いんど及ヒ南洋諸島ニ於ケルばるとがる人ノ既得權ヲ奪ヒ商館(Factory)ヲ置イテ通商ノ利ヲ收メントセリ、而シテ商館ニハ商人頭ヲ兼テタル長ヲ置キ其下ニ商人補以下數名ノ雇人ヲ附シテ貿易事務ニ當ラシメタリ、商館長ハ時々任地ノ商況ヲばたびや政府ニ報告シ又毎年決算報告及ヒ商館員會議決議録ノ寫シヲ送附シ、ばたびやニ於テハ各地商館ノ報告ヲ概括シテ年々一般報告ヲあひすてるだひニ送リテ東洋ノ商況ヲ十七人會ニ報セリ、おらんだ人ハ商館ヲ平戸ニ設置シタル後、日本ノ物資豊ナルヲ以テ同所ヲ其海軍ノ根據地トシテ船艦ノ修理、食料軍需品ノ積入ヲナシ時風ヲ待チテ南下シばるとがる及ヒいすばにやノ殖民地ヲ攻撃シ、其商船ヲ洋上ニ襲ヒ之ヲ奪掠スルコトヲカメタリ、元和五年ニ至リテ、是ヨリ先キ東洋ニ來リ日本ニモ商館ヲ設ケタルいざりす東いんど商會トおらんだ東いんど商會トノ間ニ協約成立シ、各十ニ隻ノ船ヲ出シ西葡兩國ノ東洋艦隊ニ當ルコト、ナリシカハ聯合艦隊ノ一部ハ平戸ヲ根據地トナセリ、其頃おらんだ商館ハ平戸ノ崎方ニアリ、慶長十六年一萬四千六百ぐるてん餘ヲ

投シテ建物ヲ造リ爾後漸次之ヲ改築シ、元和四年ニハ附近ノ家屋五十戸ヲ破壊シ本館ヲ増築シ病室、倉庫二棟、石造ノ火藥室等ヲ新築シ、門長屋ヲ設ケ石造ノ塀ヲ以テ之ヲ圍ミ構造華美ヲ極メタリト云フ、おらんだ人ハ初メ大阪及ヒ江戸ニ店員ヲ出張セシメ、京都、大阪、堺及江戸、駿河ノ日本商人ト直接取引ヲナサシメ又大名其他ニ對シテ小賣商ヲナサシメタルカ元和二年幕府基督教ノ禁ヲ嚴ニシ宣教師ノ取締ヲ密ニセンカ爲メ外國商人ノ内地ニ定住スルコトヲ禁シ平戸及ヒ長崎ヲ以テ外人ノ居留貿易ノ地ト定ムルニ及ンテおらんだ人ハ專ラ平戸ニ於テ貿易ヲ營ムニ至レリ是ニ於テ内地ノ商人ハ皆此所ニ集リ蘭英二商館ト取引シ平戸ハ一層繁昌セリ、壺陽錄ト云フ書ニ古町人云、古より七郎權現は潮打際の際邊なりしが異國船入津しければ、京堺の者共多く今の長崎の如く不斷居ければ、彼者共町屋を廣め、浦を埋め、今の如く七郎宮の前廣小路に成たり、印山道可公の御代より、今の隆信公の御代まで御三代の間に崎方の東まで町家立續きたりトアルモ當時平戸町ノ遽ニ膨脹セルコトヲ證スルモノナリ、



蘭英兩東いんど商會同盟時代ニハ同時ニ平戸ニ入港セル聯合艦隊(Fleet of Defence)ノ船十隻乃至十二隻ニ達シ其碇泊ノ期モ五六箇月ニ亘リタレハ、此間多數ノ船員ノ給養ノミニテモ平戸ヲ利シタルコト尠カラズ、軍需品及ヒ航海中ノ食料品ノ供給ノ爲メ同所ニ落チタル外國ノ資金ハ頗ル多額ニ上レリ、而シテ繁華ハ此地ニ止ラス、船舶ノ出入スルモノ多キヲ加フルニ從ツテ悉ク平戸一港ニ入ルコト能ハス、其ノ南方一里許ノ河内浦ノ灣廣ク水深クシテ碇繫ニ便ナルヲ相シ平戸ニ於テ貨物ヲ積卸シタル船ハ同所ニ碇泊シ船舶ノ掃除修繕及ヒ建造モ亦同所ニ於テナシタレハ、此地ニモ亦新市街成レリ、平戸侯ノ領内ハ外國貿易ノ爲メニ右ノ如ク繁昌セルカ此ト同時ニ海員ノ亂暴狼籍ヲ働キ又酒色ヲ獵リテ騷擾ヲナスコト絶エサリキ、

蘭英同盟ハ僅々三年ニシテ破レ元和八年聯合艦隊分離シテじやばニ向ヘル後平戸ノ兩商館ノ間ハ舊時ノ競争状態ニ復シ競争ハ國內自由貿易時代ヨリ激烈トナリ英人ハ之ニ堪ヘス元和九年終ニ日本ヲ引拂ヒタレハ爾來蘭館平戸ノ貿易ヲ獨占シ、其後間モナクいすばにや人モ日本ニ渡來スルニトヲ禁セラレタル

ヲ以テおらんだ人ハ長崎ノぼるとがる人ト競争シ日本ノ貿易權ヲ獨占セント欲シ種々計畫スル所アリシカ此所ニ其進行ニ大障礙タル一事件出來セリ、

おらんだ人カ支那ト通商センコトヲ企テタルハ古キ事ニシテ千五百九十九年ニハ新ぶらばんと會社(New Brabant Company)及ヒ舊會社(Old Company)ノ兩社政府ノ許可ヲ得テ支那ニ到ランコトヲ計リ千六百年ニハやこぶふあんねつく(Jacob van Neck)ノ艦隊媽港ノ港外ニ到着シ千六百三年ニハわらぶらんだふあんねつ、おらんだ(Wilbrand van Waerwijck)ノ艦隊媽港ヲ經テ澎湖島ニ來リ廈門ノ支那官吏ト交渉シ、千六百七年ニハこるねりす、まてりえ(Cornelis Matelieff de Jong)廣東河口ニ來リ廣東ノ政廳ニ書ヲ送リテ貿易ヲ開カントセルカ何レモ媽港ノぼるとがる人ノ妨害ヲ被リ當時支那政府ハ外國ト關係ヲ開クコトヲ厭ヒシカ爲メ其目的ヲ達セサリキ、

爾後支那貿易開始ノ企圖ハ暫ク放擲セラレタルカ日本ニ於テ支那貨物ノ需用多キヲ見又いんど、べるしやあらびや及ヒえうるつばニ支那貨物ヲ供給シ右諸邦ノ貨物ヲ支那ニ輸入スルノ利益大ナルヘキヲ考ヘぼるとがる人ヲ支那ヨリ



驅逐シ之ニ代リテ支那貿易ヲ獨占セント欲シばたびや政府ハ千六百二十二年  
 こるねりす、らいえるせん(Cornelis Reijersen)ヲシテ八隻ノ船艦ヲ率キテ四月十日  
 ばたびやヲ出帆セシメタリ六月二十一日艦隊ハ媽港沖ニ着シ二十四日六百餘  
 人ヲ上陸セシメテ媽港市ヲ襲ヒシカ戰半ニシテ彈藥盡キ葡人之ニ乗シテ急遽  
 蘭軍ヲ打チシカ爲メ蘭軍ハ多數ノ死傷者ヲ出シ本艦ニ逃歸リ此攻撃ハ終ニ失  
 敗ニ歸セリ是ニ於テ、らいえるせんハ艦隊ノ一部ヲ媽港ニ留メテ同市ヲ監視セ  
 シメ、二十九日出帆シテ澎湖島ニ向ヘリ、七月十日澎湖島ニ着シ部下ノ二船ヲ泉  
 州ニ派シらいえるせんハ自ラ臺灣島ニ航シ該島ノ西岸ヲ探檢シタル後澎湖島  
 ニ歸リ馬公灣ノ西南角ニ一寨ヲ築ケリ而シテ後廈門ノ官憲ト交渉シテ通商ノ  
 許可ヲ得ントセシカ其結果良好ナラサリシヲ以テばたびやヨリ増援ヲ受ケタ  
 ル艦隊ヲ以テ同所沿岸ニ威嚇砲撃ヲ行ヒ千六百二十三年一月ニハらいえるせ  
 ん自ラ廈門ヲ經テ福州ニ至リ都督ト談判シ若シ澎湖島ヲ去ツテ支那境外ニ適  
 當ノ地ヲ求メナハ之ヲ貿易市場ト定メ支那船ヲ以テ貨物ヲ同所ニ送ルヘク  
 いすばにや人トノ貿易ハ禁止スヘシトノ約ヲ得タリ同年三月らいえるせんハ澎

湖ニ歸航シ更ニ人ヲ派シテ臺灣ヲ探檢セシメばたびや政府ニ申報シテ其同意  
 ヲ求メ支那官憲ト交渉ヲ重ネタル上千六百二十四年八月臺灣島ノ臺灣ニ商館  
 ヲ置キ此所ニ來航スル支那船ト貿易スルコト、ナセリ、臺灣ハ即チ今日ノ安平  
 ニシテモト一ノ島ナリシカ漸次本島ト地續キトナリ其港モ年ヲ追フテ淺クナ  
 リ、了レリ而シテ臺灣ノ名ハ後ニ全島ノ名稱トナレリ、  
 蘭人カ臺灣ニ居ヲ定メント欲シ千六百二十三年四月探檢者ヲ同所ニ遣ハセル  
 時日本ノ商船一隻同所ニ來リ前年手附金ヲ與ヘテ貨物ノ仕入ヲ約シタル支那  
 じやんく四隻ヨリ生絲絹織物砂糖等ヲ取引セルヲ目撃セリ、原來日本人ノ臺灣  
 島ニ往來セシハ早く足利時代ノ末ニ始リ、當時八幡大菩薩ノ旗ヲ樹テ、支那沿  
 岸ヲ荒シタル海賊船ハ臺灣島ニ寄航シ風向ヲ察シテ對岸ヲ襲ヒ再ヒ同島ニ還  
 リ時風ヲ待チテ日本ニ歸航セルカ如シ、豊臣時代ニ至リテハまにらニ航海セル  
 商船ノ此島ニ寄航セルモノアリ、文祿二年十一月秀吉カ書ヲ送り來貢ヲ促シタ  
 ル高山國モ亦臺灣ナルカ如シ、當時我邦ニ於テハ臺灣ヲたかさん又ハたかさご  
 ト稱シ多加沙古又ハ高砂ノ字ヲ當テ用ヒタルカ此名ノ起因ハ恐ラクハ其頃邦



人ノ出入セシハ打狗港ニシテ土人打狗山仔ト稱スルヲ轉訛シタルニアルヘク  
後ニハ我邦ノ高砂ニ類似シタル所アリトノ考モアリテ高砂ノ字ヲ當テタルナ  
ラン、高山國ハたかさぐんと訓ミ同所ヲ指セルナラン、臺灣ニハ又小琉球ノ名ア  
リ葡人ハ Legueo Pequeno(即チ小琉球)ト呼ヘリ、琉球ニハ國王アリ文化モ亦進歩セ  
シヲ以テ大琉球ト稱セルナラン、

(三年)

泉州堺津納屋助右衛門ト云ヘル町人小琉球、呂宋へ去年ノ夏相渡リ文祿甲午  
七月二十日歸朝セシカ、其頃堺ノ代官ハ石田奎助ニテ有リシ故奏者トシテ唐  
ノ傘、蠟燭千挺、生タル麝香二疋アケ奉リ御禮申上ケ、即眞壺五十御目ニ懸ケシ  
カハ特ノ外御機嫌ニテ西ノ丸廣間ニ並ヘツ、千宗易ナトニモ御相談有リテ  
上中下段々代ヲ付サセラレシ札ヲ押シ所望ノ面々誰々ニヨラス執候ヘト被  
仰出ナリ、依之望ノ人ハ西丸ニ伺候イタシ代付ニマカセ五六日ノ内ニ悉ク取  
候テ三ツ残りシヲ取テ歸リ侍ラント代官ノ奎助ニ納屋申シケレハ、秀吉其旨  
聞召シ其代ヲツカハシ取テ置候ヘト被仰シカハ金子請取り助右衛門五六日  
ノ内ニ德人トナリニケリ(太閤記)

右ニ引照セル文中小琉球ハ即チ臺灣ニシテ堺ノ商人呂宋渡航ノ途次同所ニ寄  
航セルナリ眞壺ト云フハ呂宋壺ト稱シ茶入レトシテ大ニ珍重セラレタルモノ  
ニシテ蠟燭ハ當時呂宋ヨリ輸入セル商品中ニ屢々見ユル所ナリ、  
當時臺灣ハ蕃人ノ住スル所ニシテ、其蕃人ハ又多數ノ社ニ分レ統一スル者モナ  
カリシカ故ニ秀吉ノ勸降其效ナカリシハモトヨリ當然ノコトニシテ勸降ノ本  
書カ今前田家ニ存スルモ之ヲ與フル途アラサリシニヨルナラン、徳川氏ノ世ト  
ナリテ、しやむらう、かうしや其外遠キ國々之者共さへ、日本ニ御禮ヲ申毎年商賣  
之舟往來候處、程ちかさたかさく國之者共、今迄不通仕候事ヲ曲事トナシ幕府  
ハ慶長十四年有馬晴信ニ命シテ臺灣ヲ招降セシメタリ、有馬侯ハ其部下ヲ臺灣  
ニ派シ其命令中ニ左ノ條々ヲ擧ケタリ

- 一 たかさく國之者共日本ニ御請申上候者以來何事成共彼國之爲に成候す
- 一 事望之儘に可被仰之由御意之事
- 一 たかさく國無事に申調則彼國より使者召連可致歸朝候事
- 一 無事に相濟候上にて以來日本船着へき所、よき湊を見届歸朝可申候



一 無事に成候上にて大明日本之船たかさくに合商賣仕候様ニ可致才覺事

一 たかさくん國西より東はて迄北より南之はて迄儘見届國之様子懇に繪圖に仕持參可申候

一 彼國に有程之物隨分念を入、一色も不殘何々と書付候而可參事

一 色々才覺懇をつくし候上にて無理に拵を聞候はすはせんはうなから寄

々の在所相働彼國之者共手柄次第數人生捕可致歸朝事

有馬家ノ士ハ命ニヨリテ臺灣ニ渡レルカ土人ハ招降ニ應セス不意ニ之ヲ襲ヒタレハ抄カラサル死傷ヲ出シ土人數名ヲ捕ヘテ歸レリ幕府ハ有馬侯ノ報ヲ得土人ハ優遇シテ之ヲ送還セリ元和二年長崎ノ代官村山東庵幕府ノ許可ヲ得十三隻ノ船ヲ出シテ臺灣ヲ征討セントセシカ途ニ暴風ニ遭ヒ船隊ノ一部ハ歸航シ、一部ハ支那ニ航シ、臺灣ニ到着セシハ僅ニ數隻ニ過キス而モ土人ト戰ヒテ破レ此舉モ亦失敗ニ歸セリ、

臺灣征服ノ舉ハ此ノ如ク皆失敗ニ終リシカ當時日本ノ商人ノ此地ニ來リテ支

那商人ト交易スルモノ年々多キヲ加ヘ日本人ノ此所ニ定住シ又ハ八幡船商船ノ風待碇泊中一時滞在スル者モ頗ル多カリキ、おらんだ人臺灣ニ商館ヲ設クルニ及ヒ新ニ太守ヲ任命シ臺灣河口ノ西ニ當レル高地ニゼーらんぢや城 (Fort Zealandia) ヲ築キ、又本島ノなかむ(赤嵌 Sakam) 於テ土人ヨリ地所ヲ購ヒ、此所ニモ亦一寨ヲ設ケテ此地ノ守備ニ宛テ又臺灣港ニ出入スル商船ヨリ關稅ヲ徵シ、移住シ來レル支那人ヨリ人頭稅ヲ收メ漸次臺灣ニ於ケル統治權ヲ占メントセリ、日本人ハ蘭人ニ先チテ臺灣ニ在リシヲ理由トシテ納稅ヲ拒ミシカ、蘭人ハ之ヲ聽サス、又貿易ノ利ヲ專ニセンカ爲メ日本人ノ臺灣ニ來ルコトヲ止メント計レリ、千六百二十七年六月びーてるのさつ (Pieter Nuyts) 臺灣ノ太守トシテ任ニ就ケル時、日本ヨリ來リ濱田彌兵衛カ長タリシ一船ニ對シ強硬ナル處置ヲ取リシカハ彌兵衛等ハ彌々蘭人ニ對シテ敵意ヲ増シ新港 (Sinokan) ノ土人十六人ヲ誘ヒ其船ニ載セテ日本ニ歸リ、臺灣ノ地ヲ獻センカ爲メニ來レルモノナリトシテ江戸ニ至ラシメ將軍ニ謁セシメタリ、寛永四年十一月九日將軍秀忠ニ謁セシコト異國日記ニ見ヘタリ) びーてるのいつハ之ニ後レテ千六百二十七年七月下旬臺



灣ヲ發シテ日本ニ來リ江戸ニ上リテ將軍ニ謁シテ臺灣占領ノ顛末ヲ述ヘ、日本商船ノ臺灣渡航ヲ禁止センコトヲ請ヒ爾後ノ紛擾ナカラシメント欲シ江戸逗留月餘ニ及ヒタレトモ濱田彌兵衛ノ報告ニヨリ長崎ノ代官末次平藏等幕府ニ申告スル所アリシカハ新港土人ノ引見セラレタルニ拘ラスのいつハ終に將軍に謁スルコト能ハス空シク臺灣ニ引返セリ、  
 びいてるのいつカ日本渡航ノ目的ヲ果サスシテ臺灣ニ歸リシ後間モナク千六百二十八年四月末日本船二隻臺灣ニ入港セリ、一隻ノ長ハ濱田彌兵衛ニシテ日本ニ至リシ新港土人等モ之ニ乘組ミ居リシカ、のいつハ日本ニ於テ蘭人ノ不利益ヲ謀リタルニ對スル報復ノ手段トシテ、土人ヲ國事犯人トシテ獄ニ下シ、幕府ヨリ與ヘタル諸品ヲ沒收シ、又彌兵衛等カ貿易ニ關シ交渉センカ爲メニ入城セルニ際シ欺イテ之ヲ抑留シ、其ノ不在ニ乘シテ船中ノ武器ヲ引上ケ暴舉ニ出ツルノ途ヲ塞キ、貿易ヲ禁止シ又其處分ニ關シ平戸ノおらんだ商館長ト交渉ヲ了ルマテ日本ニ歸航スルコトヲモ許サ、リキ、彌兵衛等ハ是ニ於テ進退共ニ自由ヲ失ヒタレハ、詭計ヲ案シ六月二十九日彌兵衛以下數人刀ヲ懷ニシ歸國ノ許可

ヲ請フヲ名トシテのいつニ見エ其隙ニ乘シテのいつヲ捕ヘ又側ニアリシ通譯  
 かるん(François Caron)ハ縛シ狼狽シテ爲スコトヲ知ラサル蘭人數名ヲ斬殺セリ、  
 蘭兵ハ此事ヲ聞キ大舉シテ日本人ニ當ラントセシカ彌兵衛等ハ蘭人抵抗セハ直ニのいつを殺スヘシト揚言セシカ故ニのいつノ請ニヨリ彌兵衛等ト協議シ其申出ニヨリ七月四日ニ至リテ新港土人ヲ放免シ沒收シタル物品ヲ之ニ還付シ、日本人ノ貿易ヲ許サ、リシ爲メニ起リタル損害ヲ辨償シ、曩ニ沒收セル生糸千五百斤ヲ返還シ日本船ニ危害ヲ加ヘサル擔保トシテ港内碇繫ノおらんだ船ノ楫ヲ陸上ケスルコト及ヒ彼我各五人ノ人質ヲ出シ日本ノ人質ハおらんだ船ニテ日本ニ送りおらんだノ人質ハ日本船ニ乗セ日本ニ着スルヲ待テ之ヲ交換スルコトヲ承諾セリ、此協約成リテ後のいつヲ解放シ彌兵衛等ハ直ニ歸航ノ途ニ就キシカ長崎ニ着シタル後蘭人ハ臺灣ニ於テ日本ノ朱印船ノ貿易ヲ阻害セルコトヲ幕府ノ聞ニ達シタレハ幕府ハ蘭人ノ暴狀ヲ憤リ人質及おらんだ船乗組員ノ重ナルモノヲ獄ニ投シ平戸入港中ノ蘭船ノ出帆ヲ禁シ平戸ノ商館ハ嚴重ニ監視セシメタリ、おらんだノ東洋貿易



恐レのいつノ處置ヲ非トシテ之ヲばたびやニ招還シ、艦隊司令長官ウゐるれむ、やんすぞーん (Willem Janszoon) ヲ日本ニ遣シ幕府ニ對シテ辯解ノ途ヲ講セシメタリ、やんすぞーんハ千六百二十九年九月四日平戸ニ着セシカ江戸ニ至リテおらんだ人ノ處置ヲ辯明スルノ機會ヲ與ヘラレサリキ而シテ幕府ハ臺灣ノ城寨ノ引渡又ハ破壊ヲ要求セン爲メ末次平藏ノ船ヲばたびやニ派遣スルニ付おらんだ商館員一人ヲ同行セシメンコトヲ要請セシニヨリやんすぞーん自ラ此事ニ當ルコト、ナリばたびやニ航セリ、ばたびや政府ハ支那政府ノ承諾ニ基キ臺灣ニ於テ有スル權利ヲ主張シ其處置ヲ辯護セル書狀ヲ作り千六百三十年八月やんすぞーんヲシテ再ヒ日本ニ向ハシメシカ幕府ハやんすぞーんノ江戸ニ至ルヲ許サスおらんだ貿易ノ禁モ亦容易ニ解ケサリシカハばたびや總督ハ曩ニ臺灣ヨリ招還シ千六百三十年五月以來禁錮セラレ居タルびーてるのいつヲ主犯者トシテ日本ニ引渡スコトニ決シ千六百三十二年七月ばたびやヲ發セシメタリ、のいつ平戸ニ着セル後幕府ハ之ヲ禁獄シ前年來獄中ニアリシおらんだ人ヲ釋放セリ、其内ニ在リシのいつノ一子らうれんす (Laurence) ハ是ヨリ先千六百

三十年十二月ニ死亡シ父子再會ノ機ナカリキ、長崎代官末次平藏ハ彌兵衛等ノ乗組ミシ船ノ船主トシテ臺灣事件ニ最モ關係深ク、幕府ノ處分モ亦其獻策ニヨル所多カリシカ是ヨリ先キニ死シタレハ幕府ハのいつノ引渡ヲ機トシテ其態度ヲ變シ、臺灣ニ關スル主張ヲ撤回シおらんだ人ハ終ニ舊時ノ如ク日本貿易ヲ營ムコトヲ許サレ一時ばたびや政府ヲ困シメタル問題モ幸ナル解決ヲ見ルニ至レリ、然レトモのいつノ禁錮ハ連年おらんだ船來航スル毎ニ嘆願シタレトモ解除セラレス千六百三十六年おらんだヨリ日光廟ニ重量七百九十六斤ノ青銅ノ燈臺ヲ獻スルニ及ヒテのいつハ始メテ放還セラレ十一月ばたびやニ向ヘリ』のいつ事件右ノ如ク平和ニ解決セラレタル後おらんだ人ハ顧慮スル所ナク臺灣ノ經營ニ從事シ、千六百四十二年ニハ兵ヲ發シテ千六百二十六年以來いすばにや人カ占據セル基隆ヲ攻メ、ぶるばどーる (Salvador) 城ヲ陷レテいすばにや人ヲ島外ニ驅逐シ漸次淡水附近ノ諸部落ニ其勢力ヲ及シ、千六百四十八年ニハ五十餘ノ部落ヲ勢力範圍内ニ數ヘ宣教師ヲ淡水ニ住居セシメ其教化ヲ司ラシメタリ、南部臺灣ニ於テハ其頃三百餘ノ部落おらんだノ配下ニ歸シ、部落ノ長老お



らんだ人ノ命ヲ受ケテ之ヲ治メタリ而シテ土人ノ教化ノ爲メニ最モ盡シタルハ宣教師ニシテ千六百二十七年該島ニ來リシかんぢぢらうす(Candidius)ヲ始メトシゆにうす(Robertus Junius)はつばるちうす(Gilbertus Happartius)等土人ニ基督教ヲ説キ又學校ヲ設ケテ少年子弟ヲ教授セリ當時臺灣ニハ文字ナカリシカハろーマ字ヲ習ハシメ之ヲ以テ土語ヲ綴ラシメシカ土人ハ大ニ之ヲ便トシおらんだ人カ臺灣ヲ去リシ後百年ヲ經タル頃マテモ之ヲ用ヒ居リシコトハ現存スル土人ト支那人トノ間ノ契約書類ニシテろーマ字ヲ以テ記ルシタル土語ノ文ト漢文ト對照セルモノ尠カラサルヲ以テ知ルヘシ宣教師等ハ又布教并ニ教授ノ便宜ノ爲メ聖書ヲ土語ニ譯シ又土語ノ字書ヲ編纂セリ(ぐらびらうす Daniel Gravius譯馬太傳約翰傳 Hagnau Ka d'ilig Matiktik, Ka na sasoulat ti Matheus, ti Johannes apda' 同していや土語譯宗教問答 Patar ki Tha'-'using an ki Christang' はつばるちうす編ふあぼらん土語字書ゆにうす著宗教問答 Soulat i, A. B. C. であるふと一六四五年版)何レモ今日殆ント死語トナラントスル臺灣蕃語研究上極メテ有益ナルモノナリ、

おらんだ人ハ又農業ヲ獎勵シ牛ヲ輸入シテ耕作ノ便ヲ計リタレハ臺灣ニ於テハ米作モ漸ク増加セリ、

おらんだノ臺灣貿易ハ主トシテ胡椒、香料、籐等ヲ支那ニ輸入シ支那ヨリ生絲陶器等ヲ得之ヲ臺灣産ノ砂糖、鹿皮、水牛皮等ト共ニ日本及ヒばたびやニ向ケテ輸出スルニアリ、千六百二十七年ニ輸出セシ生絲ノ價格ハ左ノ如クナリキ、

日本仕向生絲價格  
 六二一、八五五ぐるてん  
 ばたびや同  
 五五九、四七四ぐるてん  
 千六百二十八年ニハ輸出額前年ヨリ尠ク

日本仕向生絲價格  
 四一〇、八六三ぐるてん  
 ばたびや同  
 二七七、五七二ぐるてん

ナリキ、此外日本ニ向ケテ積出ス砂糖ハ一年七八百萬斤ニ上リおらんだ商會カ得ル所ノ純益ハ日本向ノ輸出入品ノミニテ一ケ年三十餘萬ぐるてんニ達セシコトアリト云フ、

日本ニ於テハのいつノ引渡シト共ニおらんだ人ニ對スル幕府ノ態度ハ舊ニ復



シ平戸商館ノ監視ヲ解キ商業ノ自由ヲ許シ又寛永十年(千六百三十三年)ニ至リ日本船海外渡航ノ禁ヲ嚴ニセシカ爲メ臺灣ニ於ケルおらんだ人ノ行動自由トナリタレハ貿易ノ發達豫期ノ如クナルコトヲ得千六百三十三年以來おらんだ人ノ日本輸出入額左ノ如ク増加セリ、

輸入額

輸出額

千六百三十三年

八五〇、三〇四ぐるてん

千六百三十四年

七四〇、〇五一ぐるてん

七五九、二二五

千六百三十五年

一、〇〇九、二六三

八〇〇、〇〇〇(臺灣仕向ノ分ノミナ算ス)

千六百三十四年ヨリハ平戸商館ハばたびや政府ノ訓令ニ基キ長崎ニ出張員ヲ派シ日本國內各地ヨリ來集スル商人ト取引ヲナサシメ販路ノ擴張ニ努メタリ此頃日本ト貿易ヲ許サレ居タルハ西洋諸國中ぼるとがる及ヒおらんだノ二國ニシテぼるとがる人ハ多年長崎ニ於テ貿易ヲ營ミおらんだ人ニ取リテハ甚タ強敵ナリキ然レトモ幕府ハ基督教宣教師ノ渡來ヲ防キ基督教ノ弘布ヲ禁スルニハ外國貿易ノ取締ヲ嚴ニスルノ必要ヲ認メ曩ニ外國人ノ内地雜居ヲ禁シ

すばにや人ノ渡航ヲ謝絶セシカ禍根未タ斷タレサルヲ見千六百三十五年長崎港内ニ出島ヲ築キぼるとがる商人ヲ此所ニ居住セシメ島外ニ出ツルコトヲ嚴禁シテ宣教師ノ商人ニ假裝シテ日本ニ渡リ教化ニ従事スルコトヲ防クノ策ヲ執ルニ至リタレハおらんだ人ハ競争上優勝ナル地步ヲ占メタリ、此時ニ當リおらんだ人ニ取リテ更ニ利益トナルヘキ一事件出來セリ即チ島原一揆ナリ、原來有馬天草地方ハ古來領主ヲ始メトシテ基督教ヲ信スルモノ甚タ多カリシカ慶長十九年幕府有馬侯ヲ日向國延岡ニ移シ松倉重政ニ其舊領ヲ與ヘタレハ重政ハ銳意基督教ノ撲滅ニ努メタリ然レトモ未タ其效ヲ全ウスル能ハスシテ寛永七年ニ死セリ、其子重次之ニ代ルニ及ヒテ漫リニ苛稅ヲ課セシカハ農民ハ之ヲ恨ミ寛永十四年冬(千六百三十七年)終ニ百姓一揆ヲ起スニ至レリ、重政以來迫害ニ困シミタル教徒及ヒ豫テ機ヲ見テ事ヲ起サント計リシ大阪方ノ遣臣ニシテ天草地方ニ在リシモノ益田四郎時貞ヲ首領トシテ農民ニ合シ先ツ天草全島ヲ從ヘ十一月十九日富岡城ヲ攻メタルカ容易ニ陷落セサルヲ以テ一時長崎ヲ襲フノ勢ヲ示シ轉シテ有馬侯ノ古城原城ニ入レリ、島原一揆ノ勢漸ク猖獗ニ



シテ天草ノ教徒之ニ合セルノ報ハ速カニ近隣ノ諸侯ニ傳ハリシカ當時幕府ノ許可ヲ得スシテ兵ヲ動カスコトハ嚴禁ナリシカ故ニ皆手ヲ束ネテ江戸ノ命ヲ待チ其間ニ叛徒ノ勢力ヲシテ著シク増大セシメタリ、十二月初メニ至リ肥後ノ兵天草ニ渡リ直ニ之ヲ鎮定セリ此ト同時ニ幕府ノ命ヲ受ケ十一月十日江戸ヲ發シテ島原ニ向ヘル板倉重昌、石谷貞清等現場ニ着シ近隣諸侯ト共ニ原城ヲ攻圍セシカ容易ニ陷ラス老中松平伊豆守信綱等更ニ上使トシテ戰場ニ赴キ兵ヲ増シ二月二十八日ニ至リテ漸ク之ヲ陷落セシメタリ、原城内ニアリシハ壯丁二萬三千餘婦女老幼一萬三千餘ニシテ攻圍軍ノ兵力ハ十二萬四千餘人ナリシト云フ此攻圍中城ノ容易ニ陷ラサルヲ見テ攻圍軍ハ平戸ノおらんだ商館長ニ砲及ヒ彈藥ノ供給ヲ仰キ其後又其船ニ砲及砲手ヲ搭載シ來リテ攻城ヲ助ケンコトヲ請ヒタレハ館長く、けばつける (Nicolaes Couckebacker) ハ砲十五門ヲ備へ乗員八十人ヲ有セシらいふ號 (de Rip) ニ坐乘シテ一月十一日原城ニ着シ翌日ヨリ砲撃ニ從事セシカ城高クシテ着彈意ノ如クナラス陸上砲臺ノ發射モ亦效渺ク城内ヨリハ矢文ヲ以テ内國ノ戰爭ニ外人ノ助力ヲ借ルハ國辱ナリトテ攻圍軍

ヲ詰責シタレハ十六日ノ後おらんだ船ハ歸航ヲ命セラレタリ、おらんだ人カ、基督教徒攻撃ニ參加シタルコトハ後ニ歐洲基督教諸國ノ非難スル所トナリシカ、幕府ハ之ニヨリテおらんだ人カいすばにや、ぼるとがる人ト同ク基督教ヲ弘布スルモノニアラサルヲ認メ且ツ島原ノ亂ハ必ス宣教師ノ煽動ニヨリ外國ノ援助ヲ恃ミテ起リタルモノナリトシ彌々宣教師ヲ恐ル、ニ至リタレハぼるとがるト斷チおらんだ人ノミ日本ニ貿易セシムルコト、シ翌年入港ノ媽港出ノぼるとがる船二隻ハ貿易ヲ許ルサス再ヒ來航スヘカラサルコトヲ諭シテ歸航セシメタリ、媽港ニ於テハ市ノ盛衰一ニ日本貿易ノ繼續スルト否トニヨルヲ以テいんど總督ニ事ノ鎮末ヲ報シ國王ニ奏シテ法王ヨリ宣教師ノ日本ニ渡航スルコトヲ禁センコトヲ請ヒ、又千六百四十年特使ヲ日本ニ派シテ貿易ノ復舊ヲ要請セシメシカ幕府ハ之ヲ容ルサスぼるとがる船ノ來航ハ前年ノ命ニ背キタルモノトナシ大使以下船員ノ重ナルモノヲ殺シ僅ニ黑奴十三人ヲ殘シ支那船ニテ媽港ニ送還シ一行處刑ノ顛末ヲ報セシメタリ、おらんだ人ハ多年ノ希望茲ニ成就シ日本貿易ヲ獨占スルコトヲ得ルニ至レリ、



ばたびやニ於テハ此報ヲ得テ千六百三十九年十二月十日祝賀式ヲ舉ケタルカ其ノ喜ヒハ少時ニシテ幕府ノ對外警戒ノ餘波ハおらんだ人ニモ及フコト、ナレリ、松平伊豆守島原ヨリノ歸途平戸ニ立寄りおらんだ商館ヲ見タルニ其構造華美ニシテ茶臼ニ仕候石ヲ石疊ニ仕候事トモ驕ノ至極ト思召候トテ井上筑後守ヲ特ニ出張セシメ寛永十七年九月二十五日(千六百四十年十一月)新築石藏ノ破壊ヲ命セリ、商館長ハ即座ニ之ヲ諾シ當時入港中ナリシ蘭船ノ乗組員二百人ヲ上陸セシメ近隣ノモノ二百人許ノ助力ヲ得徹夜此命ヲ實行セリ、幕府ハ尙ホ之ニ満足セス翌年更ニ本館ヲ破壊セシメ四月長崎ニ移リ出島ニ居住シ曩ニばるとがる人カ受ケタルト同シ制限ノ下ニ貿易ヲナスコトヲ命シタルハおらんだ人ハ同年五月ヨリ商館ノ移轉ヲナセリ、おらんだ人ノ平戸ニ在リシハ實ニ三十三年ニシテ其間平戸ハ繁盛ヲ極メシカ此時ヨリ同市ハ漸ク衰ヘタリ、一時外國貿易隆盛ナリシコトハおらんだ商館ノ跡ニおらんだ塀おらんだ井等ノ存スルニヨリテ僅ニ推知スヘシ、

ばたびや政府ハおらんだ人カ幕府ノ命令ヲ遵奉シ嘗ツテ違背シタルコトナキ

情ヲ陳ヘ、頻リニ舊時ノ如キ制限ナキ貿易ヲ營マンコトヲ請ヘルカ幕府ハ之ヲ許サス檢束ハ時ト共ニ彌密ナルヲ加ヘタリ、  
出島ハ扇ノ地紙ノ形ヲナシ總坪數三千九百坪餘ヲ有スル築地ニシテ一ノ石橋ニヨリテ長崎ト連絡シ橋端ニハ番小屋アリ其ノ側ノ制札ニハ左ノ文字ヲ認メアリキ、

禁制

出島町

- 一、傾城之外女入事
  - 一、高野ひしり之外出家山伏入事
  - 一、諸勸進之者并乞食入事
  - 一、出島廻リ榜示杭之内船乗廻る事 附り橋之下船乗り廻る事
  - 一、斷りなくして阿蘭陀人出島より外へ出る事
- 右之條々堅可相守之者也
- 島ノ周圍ハ板塀ヲ以テ圍ミ北方ノ水ニ面シタル所ニ二門アリ、門外數歩ノ海中ニハ十三本ノ棒杭ヲ並ヘ其頭ニ從是内え一切不可乗入者也ノ榜示ヲ掲ケ島ト



ノ交通ヲ嚴禁セリ。

島内ニハ館長以下ノ住宅、倉庫、料理場、湯殿、洗濯所、代官出張所、乙名部屋、通詞控所、辻番所等アリ又遊園ノ設アリおらんだ商館員ハ常ニ此内ニ在リ、商船入港ノ節、館長上府ノ折、八月一日奉行所ニ出頭スル時及ヒ諏訪明神祭禮ノ日隨員數名ト共ニ島外ニ出ツル外ハ殆ソト一步モ踏ミ出スコト能ハサリキ、出島町ハ乙名一人ヲ以テ治ム乙名筆者數名之ヲ助ケ日行使一名常ニ島内ヲ巡視シテ其狀況ヲ乙名ニ報ス、通辯トシテハ大通詞四人、小通詞四人、稽古通詞八人以上アリ、大小通詞ノ中ヨリ各一名ノ年番ヲ選ミ常務ヲ處理セシム此兩人ハおらんだ人上府ノ時之ト同道シテ途中ノ用ヲ便セリ、稽古通詞ハ多クハ通詞ノ子供ニシテ幼時ヨリ蘭館ニ出入シテおらんだ語ヲ學ヒ成長シテ本通詞トナルモノナリ、又内通詞アリおらんだ人一人毎ニ二人乃至六人ヲ附シ其用ヲ便セシムルモノナルカ多クハ語ヲ解セス其ノ實密ニおらんだ人ノ監督ヲナスニ過キサリキ、通詞ノ下ニハ筆者五人アリ、此外門番辻番等アリ出入ヲ見張リ又島内警戒ノ任ニ當レリ、商船入港ノ時ニハ多數ノ苦力亦出入ス、食料品其他一切ノ需用品

ノ供給ヲナスモノハ長崎町人十七軒ヨリ成レル出島こんぶら(Combrador、賣辯)ナリ、料理人ハ三人アリテ一人一ヶ月交替ニテ其任ニ當リ下ニ手傳三五人アリ此外ニハ庭番、牛飼等數人アリ島内ニ在リテおらんだ人ノ俸給ヲ受ケ其用ヲナスモノ頗ル多カリシカおらんだ人ハ其ノ多數ハ無用ニシテおらんだ人ヨリ成ルヘク多クノ金ヲ絞ランカ爲メニ置カル、モノナリトシテ不平ヲ洩セリ、おらんだ船ノ長崎ニ着スルハ毎年九月頃ニシテ港口ノ遠見番之ヲ認ムレハ船番ニ報シ船番ハ又奉行所ニ報ス、奉行所ノ役人及商館員ハ此報ヲ得テ港外凡ソ二湮ノ沖ニ出迎ヘ役人ハ入港後ノ心得ヲ輸達シ乗組員名簿及ヒ積荷目錄ヲ出サシメ、商館員宛ノ書狀ヲ受取レリ、書狀ハ一應奉行所ニ於テ檢閲シタル後館長ニ交附スル習慣ナリキ、斯クテ船ハ港内ニ進入シ出島附近ニ碇泊スルヤ奉行所ノ役人來リテ大砲彈藥其他一切ノ武器ヲ受取リテ陸上ノ倉庫ニ保管シ船側ニ番船ヲ附シテ船員ノ乗降ヲ監セシム、翌日役人ハ通詞及警護ノ武士ヲ伴ヒテ船内ニ至リ名簿ニヨリテ船員ヲ檢閲シ、再ヒおらんだ語ニ譯シタル諸心得ヲ讀ミ聞カセ然ル後積荷ヲ水門ヨリ島内ニ揚ケシメタリ、荷揚ハ二日間ニ之ヲ了ルヘ



キ規定ナリシカ通常三日ヲ要セシト云フ而シテ船員ノ私有荷物ハ悉ク開封ノ上嚴重ナル取調ヲ行ヒ又上陸スルモノ、身體ヲ検査シ密貿易ノ取締ヲナセリ」貿易ノ日ハ奉行所ニ於テ之ヲ定ム之ヲ鑑板ノ日ト稱セリ、賣却スヘキ物品ハ豫テ目錄ヲ作り島ノ入口及ヒ長崎ノ諸所ニ揭示シ、彌々賣却ノ當日トナレハ奉行所ノ役人二人出張シ乙名大通詞おらんだノ新舊商館長(幕府ハ同一人長ク在任スルトキハ情實ヲ生シ取締ヲ嚴ニスル能ハサルコトアルヘキヲ慮リ長崎移住ノ時ヨリ館長ノ一ケ年在勤ノ制ヲ定メ毎年入港ノ船ニテ新商館長着任シ其歸帆ノ節舊館長歸國スルコト、ナセリ而シテ一年ノ間ヲ置クトキハ同一人ニシテ三回マテ館長タルコトヲ許ルセリ)及ヒ次席ノおらんだ商館員列席ノ上各商人ヲシテ商品一種毎ニ入札セシメタリ、入札ニハ變名ヲ用フルヲ常トセリ而シテ入札終レハ坐長ナル大通詞ハ高價ナルモノヨリ順次ニ一々之ヲ讀上ケ三度ニ及フモ答フルモノナケレハ次ノ札ヲ讀ミ應スルモノアルヲ俟テ其本名ヲ記入セリ、斯クテ漸次賣捌ヲ進行シ通常三四日ニシテ競賣ヲ了リ、現品ヲ引渡スハ毎競賣ノ翌日ナリキ、商品ノ中生系ハ長崎、堺、大阪、京都、江戸ノ五ヶ所ノ商人ノ

ミ買收スルノ特權ヲ有セリ、鑑板終リテ後脇荷ノ賣却ヲナセリ、脇荷トハ館長以下カ賣却シ得ヘキ私ノ商品ニシテ舊館長ハ一萬兩、新館長七千兩、次席六千兩、船長以下亦一定ノ額以内ノ賣却ヲナスコトヲ許サレタリ、而シテ脇荷ノ賣上高ニ對シテハ六割餘ノ稅ヲ課シテ長崎町ノ收入トナセリ、會社ノ商品ニ對シテ課金一割五分ニ過キス是レ脇荷ハ會社ノ費ヲ以テ私利ヲ營ムモノナレハ課金ヲ多クシタルナリ、

此頃おらんだ人ノ輸入セシ商品ハ支那、とんきん、いんど、べるしやノ生糸、歐亞ノ絹織物、毛織物、木綿麻織物、蘇木、べるしや、いんどノ製皮、鹿皮、鱈皮、ぼるねを、すまとらノ樟腦、南洋及ヒいんどノ菓物ノ漬物、其他胡椒、砂糖、丁子、にくづく、水銀、朱、鉛、硝石、明礬、硼砂、ごじ、珊瑚、琥珀、鏡、がらす器等ニシテ又奇鳥異獸家畜等ヲ注文ニ應シテ持來ルコトアリキ、

而シテ一年ノ輸入額ハ元和元年ニハ五萬七千ぐるでん、寛永二年ニハ羅紗ノ輸入額二萬四千九百ぐるでん、弱寛永三四年ニハ同七萬六百五十ぐるでんニ上レリト云フ、右貨物ノ仕入及販賣價格ノ二三ヲ擧クレハ



現 價

賣 價

生 糸一ピクル(英一三三斤)

一八〇れある

三六〇—四〇〇れある

朱 珍一端

八

一二

紋朱珍一端

六

九半

天鵝絨一端

八

一三

吳紹服一端

八

一二

ニシテ生絲絹織物類仕入代金及ヒ運賃ヲ合セテ百萬八千れあるノモノハ賣上金額百八十六萬二千三百七十五れあるニ上リ金八十五萬四千三百七十五れある即チ八割五分ノ利益ヲ得ル有様ナリキ(千六百二十二年九月平戸蘭商館長ノ報告書ニヨル)

右輸入品ニ對シ蘭人カ日本ヨリ輸出セシ品ノ内ニハ陶器、漆器、彫刻品、屏風、金糸、壁紙、米、酒、醬油、茶、刻烟草、鮭、豚肉等アリシカ何レモ少額ニシテ主要ナルハ金銀銅ナリキ、唯日本ノ地圖、城廓寺社ノ繪圖、軍隊及船舶ノ繪、武器等ノ輸出ハ嚴禁セラレタリ、輸出ノ總額ハ元和元年ニハ六萬六千ぐるでん、元和二年ニハ十九萬五

千ぐるでんニシテ元和八年ノ輸出額ハ銀三十二萬五千ぐるでん銅三萬二千ぐるでんニ上リ慶長十六年ヨリ寛永十八年ニ至ル三十一年間ノ一ケ年平均輸出額ハ黄金六十噸此價金五百萬圓銀千四百箱此價金百五十萬圓及ヒ銅六十箱ナリキ其後右輸出額ハ大ニ制限セラレ寶永五年ニハ銀三千貫目銅百五十萬斤トセラレ享保十八年ニハ銀千百貫目銅百萬斤延享元年ニハ銀六百貫目銅六十五萬斤ニ減セラレタリ而シテ銅ノおらんだニ於ケル時價ハ日本ニ於ケル價格ノ一倍半ナリシカ故ニおらんだ商會ハ大ナル利益ヲ以テ賣拂ヒタル輸入品ノ代金ヲ以テ銅其他日本支那ノ貨物ヲ仕入レテ更ニ利益ヲ得其ノ占メタル日本貿易ノ利潤大ナリシハ推シテ知ルヘシ、  
おらんだ船歸航ノ時期ハ毎年十一月頃ニシテ其日確定シタル後荷物ノ船積ヲ始メ私有荷物ハ再ヒ嚴密ナル検査ヲナシ禁制品アルトキハ之ヲ沒收シ之ヲ所持スルモノハ再ヒ日本ニ渡航スルコトヲ禁セリ、船積ヲ終リタル後曩ニ預リタル武器彈藥ヲ搭載シ船員ヲ檢閲シテ悉ク乗船セシメ直ニ港口ニ向ヒ他船ヲ待チ合セテ即時出帆セシメタリ、港外數浬ノ沖マテハ日本番船之ニ伴ヒ海上ノ密